

『セレンの書』

seren arbazard

2012/5/21_2012/5/24

2013年6月27日(木)午後8時

神奈川県相模原市相模大野。

高校2年の水月勇太は食事を済ませ、自室で宿題をしていた。

勇太は小学校こそ市立だったが、中学受験で開成中学に入り、その後開成高校へと進学した。

これといって懸命に勉強したわけではないが、なぜか開成に入ることができた。自分が特別な人間だという自覚はない。

高校での成績は上位で、全国模試では常に上位に食い込む。

部活動はやっていない。規則正しく学校に行き、帰っては風呂に入って食事を取り、宿題を済ませ、予習をし、少しパソコンをいじって寝る。それだけの人生だ。

親や教師は東大に行くことを希望しているし、自然な流れでそうなるだろうと自分でも考えている。

年齢は17歳。ついこないだ16日に誕生日を迎えたばかりだ。

これといって家柄が良いわけではない。2つ離れた姉は日大だし、年子の妹はふつうの公立高校に通っている。母親は専業主婦だし、父親も公務員だ。いわゆるふつうの家庭だ。

親が特に優秀というわけではない。自分が開成に入ることができたのも、上位の成績を維持しているのも、恐らくはただの偶然なのだろう。勇太はそう考えていた。

これといって特徴のない勇太だが、ひとつ不思議な趣味を持っている。

10歳の頃、趣味で諸外国の言葉を勉強をしていて、ふとあることに気付いた。

音楽の場合、聞く人がいるし、作る人もいる。絵も同様だ。鑑賞する人がいれば、それを作る人もいる。なのに言語だけは不思議なことに使う人しかいない。

人間、誰もが言葉を使って生きている。なのになぜ誰も言語を作ろうと考えないのか。消費者だけがいて、作り手がいない。皆、当たり前のように日本語や英語を勉強し、使っている。なのに誰も自分で言語を作ろうとはしない。音楽や絵と違って。

それはとても不思議なことだった。

——もしかしたら言語も自分の手で作ることができるのではないか？

そう考えた勇太は、早速池袋まで足を伸ばしてジュンク堂で言語学のコーナーを漁った。しかし言語学について解説した本や、言語学の専門書はあれど、どこにも言語の作り方を解説した本が見当たらなかった。

不思議だった。音楽コーナーに行けば作曲本がある。絵画コーナーに行けば描き方の本がある。なのに言語コーナーには言語の作り方の本がないのだ。

家に戻った勇太はネットで「言語 作り方」と調べてみた。

すると、あるサイトが引っかかった。それは「新生人工言語論」というサイトで、人工言語の作り方などについて解説したものだった。

それを見つけた瞬間、勇太は「これだ！」と感じた。自分が欲しかったのはこの情報だ。なぜこの情報が本屋にないのか不思議で仕様がなかった。利益重視の出版社などあてにならない。ネットのほうがよほど便利だ。

いずれにせよ、やはり自分が思ったとおりの言葉を作ることは可能なのだ。そしてそれを世間では人工言語というらしい。

勇太は吸い込まれるように新生人工言語論を読みふけた。読んでいるうちに、面白いものを見つけた。

それはアルカという人工言語だった。新生人工言語論の著者が持論を実践して作り上げた言語だそうだ。なんと自分が生まれる前、1991年から制作されているらしい。そんなに古くからこんなことを考えている人がいたのかと驚嘆した。

ところが新生人工言語論を読んでいるうちに、人工言語自体はもっと古くからあることを知った。

暗号を人工言語に含めるならその歴史は古代まで遡ることができるし、それを含めなくとも最古の人工言語は12世紀にまで遡ることができるそうだ。

さらに驚いたことに、400年ほど前に西洋で人工言語の一大ブームがあったらしい。人工言語で最も有名なのはエスペラントという言語らしいが、その言語でさえくだんの人工言語ブームの後に興ったものだそうだ。思ったより長い歴史を持った分野だということを知った。

これを読んだ勇太は胸が熱くなるのを感じた。自分と同じ疑問を持った人が、何百年も前からいたのだ。先人たちは同じようなことを感じ、その疑問に向かって戦い続けてきたのだ。

早速勇太は人工言語アルカやエスペラントを筆頭に、いくつかの人工言語を学んでみた。そしてふたたび驚かされた。他のどの人工言語よりもアルカが精緻に作り込まれていたからだ。それはまさに芸術作品といってよい出来栄であった。

アルカはゼロから作り込まれており、地球に存在するあらゆる言語から単語などを拝借しない、アプリオリという方式を採っていた。

にもかかわらず、まるで日本語や英語といった自然言語のように、はじめからこの世に存在していると思わせるほどのリアリティがあった。

単なる西洋語の寄せ集めにすぎないエスペラントなど、アルカに比べれば児童に等しく感じられた。

さらに言語と文化と風土は切り離して考えることができないという主張のもと、アルカには独特の文化と風土が備え付けられていた。その世界観もまたオリジナルであり、ゼロから作り込まれたアプリオリなものだった。

新生人工言語論の著者はアルカの作者でもあり、名を *seren arbazard* というようだ。

セレン＝アルバザードは新生人工言語論の中で、言語が広まる要因は軍事力や経済力や人口などであって、言語自体の合理性や出来栄とは関係ないと唱えていた。

なるほどと勇太は思った。出来栄の素晴らしい言語が広まるのであれば、アルカほどよく作り込まれた言語が広まらないはずがないからだ。アルカは路地裏の隠れた骨董品店のような、知る人ぞ知る名店のような存在だった。

アルカに惚れ込んだ勇太は、自分もアルカのような作品を作りたいと考えた。そこで新生人工言語論が唱える言語の作り方に従い、自言語を制作した。

小学から中学に至るまでその作業は続き、2000語ほどの単語を作った。もちろん一通りの文法体系も整え、言語としての体裁は一応整えることができた。

だが高校に上がったころ、ふと気付いてしまった。どんなにやってもアルカを越えることはできないと。

アルカは勇太が作業を続ける間も着々と進歩し、ますます人工言語界での地位を確立させていった。

もともとアルカは日仏韓の混血児であるセレンが主導し、様々な国の共同制作者と一緒に作り上げたものだ。さらに日本国内にもアルカを学んだり翻訳したりする者がいた。果てはアルカのオリジナルフォントやイラストやマンガやゲームなどといったコンテンツを作る協力者までいる始末。

向こうは何十人という規模で言語と世界の創造を行なっている。さらに外国人の協力者もいるので、異なる母語話者間でアルカが実用に耐えるかどうかという実験まで行える環境にあった。

加えてセレンは学生結婚をし、結婚生活ではアルカを日常的に用いて生活していた。その後色々あって子供ができると、今度はアルカのネイティブまで作り上げてしまった。

1991年という自分が生まれる前から続く作業の上、協力体制が整っている。向こうは人材にも恵まれ、人工言語界での知名度も高い。

しかもセレンは未だに作業を続け、その勢いは留まるところを知らない。

どう考えても自分一人で頑張ったところで、追い越すどころか追い付くことさえできないのは明らかだった。むしろ時間が経つほどに引き離されていく気すら感じた。

ときに、アルカを参考に2000語ほど辞書を編んでみて痛切したが、辞書をゼロから作るというのは途方もなく労力のかかることなのだ。

森羅万象に通じる幅広い知識が最低限必要だし、それ以上に必要なのは尋常ならざる根気と体力だ。幅広い知識というだけで敷居が高いのに、それ以上に根気と体力が必要になるなど、まったく超人技といって良かった。

しかも市販の辞典のように給料をもらって作るわけでもなければ、将来的に金になる見込みもない。ただひたすら使命感のみで、いつまで経っても終わらない作業を賽の河原のように続けなければならない。

自分でやってみて分かったが、人工言語の辞書をゼロから精緻なクオリティで作るのは、世界でも上から数えて相当上位のほうに来る苦行だ。これに比べれば、出版社で給料をもらいながら国語辞典を編むなど天国とっていい。市販の辞典の編集者は給料ももらえて名声まで手に入る。

人の苦労というのはやった者にしか分からない。プロのスケート選手が簡単そうに舞うのを見て何となく自分にもできそうな錯覚に陥るが、とんでもない。実際やってみれば滑るだけでも覚束ない。

一流の人間はさも簡単そうにやっけてのけるが、自分でやってみればいかにそれが難しいかということが分かる。

人の苦労が分からないのは、苦労をしたことのないくだらない人間なのだ。

勇太はアルカを知ったとき、面白いと思ったし凄いとも思った。だが、なんとなく自分にもできそうだと安易に考えた。要するに自分も苦労知らずだったということだ。

高校に上がるまでの小中学時代の苦労を経て、アルカを身近に感じるどころか、山の高みがかかってかえって遠くに感じるようになった。山は遠くから見れば頂上を簡単に見ることができるが、いざ近付いて登ろうとすると頂上は途方もなく遠い。それと同じことだ。

勇太は高校に上がって人工言語制作を断念してしまったが、山の高みを知ることができただけでも人間として大きくなることができたと感じた。そういう意味では自分の無謀な挑戦は無駄ではなかったと思う。

人工言語制作を諦めた後も、勇太はアルカを学び続けた。2011年にアルカ関連の書籍が2冊発売されたときには即座に購入した。セレンは電子書籍版を無料で公開していたが、偉人への敬意も込めて手元に置いておくことにしたのだ。

そう、勇太はアルカを尊敬している。いや、どちらかというとそれを作り上げたセレンという人物を尊敬している。自分で苦労したからこそ、彼の凄さが分かるのだ。

だが勇太は彼と連絡を取ったことがない。その気になれば彼とは掲示板やメールやSNSなどを介してアプローチすることができた。

実際、アルカで分からないことがあって質問したいことが何度もあった。それでも勇太は彼との接触を図らなかつた。自分でも理由が分からない。同じ言語作者としてのせめてもの対抗心なのか、あるいは畏敬の念なのか、それは不明だ。

宿題を終えた勇太は英語と数学の自主勉強をし、本を閉じた。

ついでパソコンの椅子に腰掛け、コンピュータを起動する。先日の誕生日祝いに親が買ってくれた最新モデルのデスクトップだ。

パソコンを立ち上げると、人工言語関連サイトの巡回をする。時計を見ると11時を回っていた。

画面の右上では小さいウィンドウの中にニュース速報が次々と流れ込んできていた。気になる見出しがあればその都度クリックして記事に跳ぶという仕組みだ。

人工言語界は時間の流れが非常にゆっくりしている。400年間も旧態依然だった業界だから仕方ない。

その400年間の旧態依然を打破したのがかのセレンで、彼は電光石火の勢いで世界を変えてしまった。

人工言語界は彼が牽引している。この世界の歴史を動かすのは彼だ。

セレンはSNSに参加している。歴史に名を残すような高名な人の生の声を気軽に聞けるというのは凄いことだと改めて思う。

もともと、彼は主に日本語で活動している。世界の共通語、国際語は英語なので、英語圏での知名度が高くないと歴史には残りづらい。

ところが最先端であるべきアメリカの人工言語界の旧態依然ぶりがあまりに酷いため、少なくとも現在において最も人工言語理論が発達しているのはこの日本ということになる。

「今日も目立った動きはなしか……」

破竹の勢いで革命を成したセレンだったが、それでも20年以上に及ぶ長丁場を平然とやってのけるような人なので、そう頻繁にイベントは起こらない。

人工言語制作というのは実に愚直な作業だ。日々の積み重ねと研鑽が物を言う。そう毎日話題に溢れるわけではない。何もなく過ぎる日のほうが多いのだ。

まして人工言語という概念に興味を持つ人口がそもそも希少だ。希少な上に十分な知識と経験を持った人材が彼以外にほとんど皆無ともなれば、人工言語界の動きは必然的に緩慢になる。

というより、事実上セレンの動向が人工言語界の動向と同義といえる状況だ。彼が動けば世界は動く。彼が動かなければ世界は動かない。そういう特殊な世界だった。どんな狭い学問であれ、ここまで一人の人間が強大な力と影響力を持った業界も珍しい。

勇太はオンライン幻日辞典を開いた。アルカは独自にプログラムされたオンラインの辞書を持っている。幻というのはアルカの漢字訳だ。

この辞書は市販の電子辞書より遥かに便利で、機能がとにかく豊富で親切だ。とても小集団が作ったものとは思えない。たいていの企業が用意した辞書よりも優れているのだから。

また、単語も万単位で収録されており、読んでいて楽しい。単語の文化欄にはアルカが使われる異世界カルディアの設定が書かれている。アルカはエスペラントのような国際補助語ではなく、芸術言語なのだ。つまりはファンタジー用の人工言語ということ。ただ、実際には地球に話者がおり、架空の世界だけでなく現実でも使われているという優れ物だ。

文化欄で異世界の設定を読んでいると、画面右上のニュース欄に気になる記事が表示された。毎日2,3件は気になる記事が出てクリックするのが癖になっている。

今回クリックしたのはヘッドラインに自分の住所の神奈川県が踊っていたからだ。ヘッドライン曰く、同県で殺人事件があったとのこと。自分の近くで起こった事件はやはり気になるものだ。

クリックすると記事が開く。どうやら31歳のシングルマザーが刺殺されたようだ。犯人は不明で、凶器のナイフは地面に落ちていたようだ。遺体は何箇所も刺された跡があり、明確な殺意があったものと見られる。物取りではなく、遺体に荒らされた形跡はなかったという。なお、同居していた男の子は無事だったようだ。

つい先ほど起きたばかりの事件のようだ。テレビよりネットのほうがもはや早い。

犯人が不明ということは、殺人犯が県内に跋扈している可能性が高いということだ。自分が襲われる確率は宝くじに当たるより低いとは思ものの、あまり気分のいい話ではない。

「こりゃ怨恨だな……」

勇太は直感した。物取りでもなければ暴行の形跡もない。更に加害者は執拗に何度も刺している。となると通り魔ではなく、怨恨の線が濃い。怨恨の場合は被害者の人間関係を洗えばすぐに重要参考人が見つかる。闇夜に隠れた通り魔に比べて事件の解決は早かろう。

パソコンをシャットダウンすると、勇太は床についた。

2013年6月28日（金）午前7時

小田急線相模大野駅。

今日は学校だ。いや、今日も学校だ。

自宅のある集合団地から10分弱離れたところに駅がある。何年か前から始まった大野銀座商店街の改装を尻目に、駅まで歩く。銀行を越えたところでエスカレーターに乗る。このエスカレーターは乗り場が滑りやすく、雨や雪の日は注意がいる。

エスカレーターを上がると100mほどまっすぐ歩き、北口へ。右折して北口をくぐると、少し直進して左手に改札。

pasmoを改札にかざし、数十m直進、左手の階段を長々降りていくと、新宿行を待った。

開成高校へは新宿まで急行で約35分。新宿からは山手線で西日暮里まで約20分。駅を降りればすぐ学校だ。中学のほうが校舎が駅から遠いので、ほんの気持ちだが高校に上がってからのほうが近くなった。通学時間としては長くもなく短くもなくといったところか。

一時間目は8:45から始まるが、HRやその他もろもろの関係で、実際には8:25までに着かないと門を閉められてしまう。

この時間なら20分ほど余裕がある。途中トイレに行きたくなって電車を一本遅らせてもなんとか間に合う計算だ。

勇太は人ごみが嫌いだ。歩いてでも端っこの車両を使う。

ところが相模大野駅は階段を降りた先の端の車両がこの時間帯は女性専用車両になっており、自分は乗ることができない。だから端っこからひとつ隣の車両に乗るようにしている。

女性専用車両というのは男性差別で、かつてアメリカのバスなどが黒人と白人を分けて乗せたのと何ら本質的に変わらない。そういう差別は日本では禁止されているため、実は男性でも女性専用車両に乗ることができる。勇太は知識としてそのことを知っていた。

鉄道会社としては男性に任意での協力を求める形で女性専用車両を運行するしかない。だが実際は任意とは名ばかりの強制で、警察官の職務質問となんら変わらない。

当の女性たちも女性専用車両という名のせいで、任意協力だということを知らない。本来なら女性優先車両とでもすべきところなのだが、鉄道会社としては「我々は痴漢対策を

講じましたよ」というアピールをしたいため、女性専用車両という名称を変えず、男性に実質強制的な協力を求めているわけだ。

世の中に痴漢がいるのは知っているが、なんだか男性全員を追い出すとなると、痴漢しようなどとは露ほども思わない自分のような人間にとっては滑稽を乗り越して馬鹿馬鹿しくさえ思える。

まあ本音を言えば、端っこの空いている車両に乗りたいのに女どもに邪魔されてウザいというのが実情なのだけれども。

電車待ちをしている列に勇太は潜り込んだ。女性専用車両の列には当たり前だが女性が列をなして並んでいる。どう考えても痴漢とは縁のなさそうな年増がちらほらしているのが滑稽だった。どれだけ自意識の塊なんだと内心せせら笑う。

ふと勇太は女性専用車両の列の後ろに立っている男を見つけた。列に並ぶわけでもなく、着流しで虚空を眺めながらポケットに手を入れている。何をしているのだろうと思ったが、捨て置くことにした。

電車が来る。ホームに停車する。いつもどおりドアが開く――
と思ったところで異変が起きた。

突如ガキンという音がした。金属が千切れるような耳をつんざく音だった。

次の瞬間、端の女性専用車両だけがグラッと揺れた。

それはカメラの映像をゆっくり映しているかのようだった。

スローモーションで女性専用車両だけが90度横に転がっていった。

女性専用車両は、地面に吸い込まれるように倒れていった。

まもなく起こる轟音。

そして叫び声。

女性専用車両の列に並んでいた女どもがうるさい悲鳴を挙げる。

勇太の列に並んでいた男たちも何事かと駆け寄る。

勇太も思わず近付いて見た。

電車のドアは開いていない。進行方向から見て左側にいた女どもは右側にいた女どもに押し潰され、喘いでいた。この人数だと、下の方にいた女は圧死しているだろうかと勇太は推測した。

上のほうにいる女が必死に窓やドアをこじ開けようとするが、開かない。男がいれば力尽くで開けられたものを、女しかいないことが仇となり、窓ひとつ破ることができない。中は修羅場と化していた。

数分もしないうちに駅員がぞろぞろと集まり、「危ないので近寄らないでください！」と叫びだした。勇太はホームの端っこに寄る。するとそこには先ほど女性専用車両の列の後ろにいた男が立っていた。

男は横転した車両を見て薄ら笑いを浮かべていた。小声で何か呟いている。

勇太が聞き耳を立てようとした瞬間、男はすっと地面に座り込んで、何やらチョークのようなものでホームに文字を書きだした。

誰もが横転した車両に目をやる中、勇太は横目で男の動向を追った。男は地面に何かを書くと、すっと立ち上がって、何事もなかったかのように立ち去ってしまった。勇太を除いて男に関心を寄せる者は誰一人いない。

「何を書いたんだろう……」

訝りながら勇太は地面に顔を近付ける。人々は横転した車両に注目している。勇太のことなど誰も気に留めない。

そこには記号が書かれていた。

αϰυββββ ραλεν ραηβυ

「ディー、シー……次の記号はなんだ……？」

アルファベットかと思ったが、どうも違う。独特の記号のようだ。何を意味するのだろうか。そもそも何か意味があるのだろうか。

あの男はなぜこんな意味不明なものを書き記していったのか。勇太は首をひねりながらもケータイを取り出し、画像を撮影しておいた。

はじめこそ横転した車両の行方に関心を寄せていた乗客たちだったが、しばらくすると電車の遅延に文句を言い出した。いつになったら運転再開するのかといった問い合わせが忙殺されている駅員をさらに忙殺させた。

勇太はその場で学校に電話をかけた。飛び込み自殺ならいざ知らず、車両が横転してしまったら片付けるのは並大抵のことではない。処理には午前いっぱいどころか今日いっばいかかるだろう。

これは遅刻では済まない。何時間も混雑した駅で待ちぼうけを食らわされた挙句、学校に着いたころには授業が終わっていることだろう。馬鹿馬鹿しい。そんな非合理的な茶番に付き合ってもらえるものか。

勇太は即座に担任に繋いでもらい、事と次第を伝え、今日は欠席することにした。

担任から今日の分の課題の指示を受けると、電話を切った。現場では懸命な救助活動が繰り返されている。警察も救急隊員も駆けつけた。このままでは数十分もしないうちにマスコミがやってくることだろう。ますます大騒ぎになるなど感じた勇太は、面倒事にこれ以上巻き込まれないよう、さっさとホームを後にした。

来た道戻って家路につく。部屋に戻ると担任に指示された課題を早急に済ませた。テレビを付けるとテレビ東京以外の各テレビ局がこの事件を取り上げていた。流石ブレないテレビ東京だなど関心しながらパソコンを立ち上げる。

ネットでもこのニュースで持ち切りだった。2ちゃんねるにアクセスすると、まだ午前中だというのにもう4スレッド目に突入していた。

記事を見ていると、どうやら女性専用車両だけ車両の連結部が外れ、横転したらしい。連結部が外れた理由はもちろんのこと、横転した理由すらも分からないとのことだった。

小田急電鉄の株価を調べてみると、前場で面白いほどダダ下がりしており、あっさりストップ安になっていた。過去一年のチャートを見ると、去年の6月ごろが700円前後になっている。今日は金曜だから、ストップ安した以上、マーケットは月曜まで開かれぬ。このままだと月曜の前場も一瞬にしてストップ安するだろう。

2ちゃんねるの投稿には「羊水腐ったBBAども涙目ざまあwww」、「自過剰で糖質な痴漢被害妄想女どもが圧死してお前ら大勝利www」、「ちょwww女性専用車両だけ

とかGJすぎるwww」、「これは新しいタイプのテロですね」などといった煽り文句が踊っていた。

むろん「不謹慎なこと言うなクズども」と言った書き込み中にはあるが、「ハバア乙」、「フェミ乙。ざまあw」、「ご冥福をお祈りしま〜すwww」などの書き込みにかき消されてしまっている。

他に「小田急ワカ」や「テレ東無双すぎワカw」などといった書き込みも見られた。

テロ？

愚にもつかない書き込みだが、そういう見方もあるのかと勇太はふと気付かされた。だがあれは誰がどう見ても自然と倒れた。明らかに事故だ。テロなわけがない。

勇太は鼻で笑うと、パソコンを落とした。

2013年7月1日（月）午後7時

予想通り小田急電鉄の株価は今日も前場でストップ安した。土日を挟んだ今でも原因が解明できていないことが原因のようだ。上層部は真っ青な顔になっていることだろう。どこまで落ちるかある意味見ものだ。

とはいえ、小田急電鉄がこのまま潰れるとは思えない。いずれは株価も戻る。下げ止まったところで大量に買いを入れれば一財産だ。父親をそそのかしてみたいが、金は働いて稼ぐものという実直な考えを持った父親が受け入れるはずがないことは明らかだった。

学校から帰ってテレビをつけると、テレビ東京以外すべてのチャンネルでニュースの中継をしていた。何事かと思った勇太はテロップを見て仰天した。

今朝 7:30 ごろ、西武池袋線の東久留米駅で、最後尾の女性専用車両がまたも一両だけ連結部から外れて横転したとのことだった。それで世間は今朝から大騒ぎしていたらしい。自分の通学に関係ないのでつゆ知らず、呑気に一日を過ごしていた。

ネットを見ると急激に陰謀説やテロ説が浮上してきていた。それはそうだろう。こう立て続けに同じような事故が起これば、そこには人為的なものを感じざるをえない。

ネット上でまっさきにやり玉に上がっていたのは女性専用車両に反対する会だった。ここがテロを起こしたのではないかとの嫌疑がかかっていた。会の公式サイトにアクセスしてみようとしたところ、アクセスが集中しすぎていてサーバーが落ちたのか、見れなくなっていた。

なお、2ちゃんねるの記事を見ていると、サーバーが落ちる前、会の公式サイトには女性専用車両の事故に対するお悔やみが掲載されていたという。断じて自分たちは関係ないというスタンスのようだ。

発言小町を見てみると、女性からと思しき質問で、女性専用車両には怖くてもう乗れないと言った相談が何件も相次いでいた。これは質問でも相談でもなく、ただ単に不安を吐き出しているだけに見えた。

どの相談にも「これはテロなのでしょうか」といった文言が散らばっていた。

テロ、ね……。

衆人環視の中、手も触れずに器用に連結部を外して重たい車両を横転させる。そんなことが人間に可能だろうか？ 現場にいなかった人間はテロだと騒ぎ立てているが、一度現場に居合わせた自分からすると、人為的には不可能だということがありありと見て取れた。

11時ごろになると父親が帰宅した。ちょうど勇太は水を飲み、居間に降りたところだった。妹と姉がテレビを不安げに見ている。母親は夕飯を出す。父親の表情は暗い。

「母さん」

父親が重い口を開く。もともとあまり饒舌なほうではない。

「今テレビでやってる件、あるだろう」

「はい」母親は静かに頷いた。

「女性専用車両ばかりが狙いましたかのように立て続けに横転する。そんなことがあるだろうか」

横で聞いていた妹が「ないんじゃない？」と口を挟む。

「だろう。世間ではテロとの見方が強い」

「お父さんのとこだとどうなの？」姉が問いかける。勇太は黙って立っていた。

「——警察もこれは単なる事故ではないと考え、捜査を開始することにした」

そう、父は公務員、それも警察官だ。

勇太は耳をぴくりとさせた。

警察が動く？ 事件性を認めたということか。

父親は一拍置いてから、重苦しい声で言った。

「警察はこの件に関し、特別にチームを編成することにした。母さん、私はそのチームを率いるよう命じられたんだ」

「ええっ……!？」

母親が不安そうな顔をする。

「でもあなたは東京都管轄の警視庁公安部でしょう？ どうしてこの件で……」

公安の父親が家族に仕事の話をするのは極めて異例のことだった。それだけ事態が逼迫しているということか。

「上の考えることは分からん。ただ、この件が神奈川や埼玉で起こった単なる偶発的な連続事故ではない……と上は考えているようだ。そこで私にお鉢が巡ってきた」

「父さんは……」

勇太はコップを置いて父親に話しかけた。

「この件がテロの仕業だと思ってるの？」

「……分かん。だが、なんらかの人為性が働いている可能性はある」

「死傷者はどのくらい出てるんだっけ」

「数百人にも及んでいる。朝のラッシュ時の事故だから特にな」

「今後も同じような事件が起こると思う？」

「その可能性はあるな」

父親は疲れたように眉間を指で押さえた。

2013年7月2日（火）午前7時45分

果たして父親の予想は正しかった。

今度はJR 山手線の目白駅で女性専用車両が横転した。

相次ぐ事故のせいで女性専用車両に乗る女の数は減っていたものの、同じような事故が2回続いただけなので、そこまで本格的にテロだという風には考えていなかった人が少なからずいたようだ。その結果、今回も多数の死傷者が出た。

勇太が事故を知ったのは、新宿に着いてからだった。山手線に乗り換えようとしたところで運休しているから変に思ったところ、アナウンスが流れて事故の概要を知った。構内は通勤や通学のできなくなった人たちでごった返していた。

ケータイでネットのニュースを見るが、まだ目ぼしい情報はない。

このままだと西日暮里に行くことはできない。タクシーを拾おうかと思って駅構外に出てみると、タクシーを待つ長蛇の列が既に出来上がっていた。道路も混雑しており、到底学校に間に合いそうもない。

学校に電話してみるが、なかなか繋がらない。今回は山手線の故障だ。学校が山手線上にあるので、ほとんどの生徒は登校できないに違いない。学校の電話回線はパンク寸前だろう。

何十回もかけ続けた結果、ようやく学校に繋がった。担任に繋いでもらおうと、今日はほとんどの生徒がこの事故のせいで登校できないので休校だということを告知された。

小田急のホームページを見て、運行情報を調べる。幸い小田急は運行しているので帰れるが、2ちゃんねるなどの掲示板を見ると、非常に混雑しているようだ。

勇太は家に帰ると、その日の課題を終わらせ、あとはパソコンにかじりついてた。姉も大学が休講になったようで、家にいた。姉は居間でテレビを見ていた。妹は公立高校で小田急線上に学校があるので、どうにか登校できたようだ。

屋過ぎに父親が車で家に戻ってきた。母親が珍しい早い帰宅に驚いていた。だが父親は書類や荷物を手に取ると、「今日はもう帰れそうにない」と言い残して出ていった。

やはりテロという線が濃厚なのだろうか。警察は本腰を入れて捜査する気なのだろう。流石に同じ事故が3回も続くなど、ありえないことだ。

勇太は部屋に戻ると、ベッドに寝転び、ケータイをいじった。

ネット上ではテロの仕業ということでほぼ満場一致しており、容疑者探しに懸命になっていた。

午後になると JR が試験的に女性専用車両の運行を見合わせるという声明文を出した。それを皮切りに各鉄道会社が右へならえした。小田急線、西武線はもちろんのこと、まだ被害を受けていない京急なども一斉に右へならえした。

これに対して女側から一切の反論はなかったようだ。というよりむしろ女側が女性専用車両を安心して使えないとクレームを出したことが停止の原因のひとつとなっているようだ。

ただ、ネットにはテロを疑う声もあった。その最大の理由は犯行声明がなされていないこと。何らかの政治的イデオロギーのもとで動いているなら、犯行声明文を出さないのはおかしいという。

確かにそうだ。それは勇太も不思議に思っていた。ふつうテロというのはまず要求が先にありきで、それが飲まれないので実力行使に出るというのが定石だ。今回は要求もなければ犯行声明文もない。テロにしてははずいぶん自己主張が弱い。そのため、単なる愉快犯ではないかという説も持ち上がっていた。

また、女性専用車両が狙われたのではなく、単に端っこの車両が狙われただけではないかという声もあった。だがパニックでヒステリーに駆られた女どもが鉄道会社に圧力をかけて女性専用車両を自ら手放してしまった。

犯行声明……犯人の残した声……。か。

勇太は仰向けになりながらケータイをいじりつづけた。

そんな折、ふと思い出して画像フォルダに指を這わせる。先日相模大野駅で撮影した、地面に書かれた謎の記号を写したものだ。

これはいったい何なんだろう。あのときの男は一連の事件に何らかの関与があるのだろうか。

勇太は記号を見やる。

「ディー、シー……」

駄目だ。何の暗号か分からない。解読できそうにない。

そもそもあの男が事件に関与しているという保証もない。これ以上考えても仕方のないことだ。

「気分転換でもするか」

パソコンを立ち上げると、久々に人工言語関連のサイトを巡回する。最近、電車の件ですっかり見るのを忘れていた。

世間は大騒ぎしているというのにこの世界は静かなもので、テレビ東京以上にブレがなかった。まるで何事もなかったかのようにアカデミックな日常を続けている。

掲示板を見ると人工言語アルカに新語がいくつか登録されていた。オンライン幻日辞典でその単語を確認する。

作者のセレンは森羅万象に詳しく、ありとあらゆる分野の造語を行う。数学、物理、化学、建築、音楽、運動、被服、娯楽と、なんでもありの辞典だ。

ゼロから人工言語の語彙を構築するのは並大抵のことではない。自然言語から語彙を借りてくることができないので、一語一語の語法や文化設定を行う必要がある。それを彼は20年以上続けているのだ。尋常ならざる精神力と体力だ。

オンライン幻日辞典は日本語とアルファベットで表記されている。アルカの文章はアルファベットで書かれる。本来アルカは異世界カルディアで使われる人工言語なので、幻字というオリジナルの文字を使う。しかしそれでは初学者にとって読みづらいので、普段はアルファベットに転写しているわけだ。

幻字は『紫苑の書』や『夢織』といったアルカを用いた小説などに見ることができる。もちろんアルカを小学校のころから勉強している勇太は幻字の読み書きができる。

ただ、最近はセレンが初心者に向けた易しいコンテンツを多く提供しているせいで、段々と幻字を見る機会が減ってしまった。それは勇太にとって残念なことだった。幻字はたった25文字しかないのだから、そのくらい市井の人間も覚えろよと思うのだが、人工言語に興味のある人間ですらなかなか覚えられないというのが常らしい。

セレンは人工言語界の雄だが、大学院での専攻は言語学だったそう。彼は人工言語学研究会という研究会の代表を務め、人工言語で言語学をするという珍しい活動を行なっている。本質的に彼は人工言語屋であると同時に言語学者なのだ。

もともと、彼は言語学の学会に与していたり、大学に残っているわけではない。もともと彼はアルカを作る知識を得るために、つまり人工言語をやるためだけに大学に入ったという異端児だ。

彼はアルカに応用できる言語学の知識を獲得した以上、それ以上言語学に拘泥する必要はないと判断したようだ。結果、今では社会人として英語関連の仕事をしているとのこと。

学会にいないから言語学者ではないとは言えない。サピア＝ウォーフの仮説で有名なウォーフも火災保険会社に勤務する傍ら言語学を研究したが、世間一般では言語学者とみなされている。それと同じことだ。

ちなみに、エスペラントを作ったザメンホフにいたっては眼科医で、言語学専攻ですらない。それに比べるとセレンは言語学を専攻していたこともあり、立場的にはウォーフに近い。ウォーフを言語学者と呼ぶなら、セレンもまた言語学者であろう。

なお、セレンは実際に言語学者としての側面を持っている。2012年には『言語学少女とバベルの塔』というタイトルで、言語学の概説書を出版した。

これは物語仕立てで言語学の概説を読むことができる画期的な本だった。大学教材としての販路がないと刊行に及び腰な出版社をあざ笑うかのように、彼は自著を出版した。

彼がその本を出すまで、言語学の概説書はどれも取っ付きにくいものばかりだった。大学教材として採用されることを視野に入れているので、どれも内容がお固いのだ。結果、どうしても一般人にとっては分かりにくいものができあがる。

版元の営業は執筆陣のネームバリューなどで押そうとするため、無駄に著者陣だけはそれなりに名の通った言語学者であることが多い。しかし内容は機械の得意な理系が作ったパソコンのマニュアルのようなもので、単に言葉に関心のある人にとっては到底読めたものではなかった。

セレンはその状況を打破するために、哲学でいう『ソフィーの世界』、数学でいう『数学ガール』のような、小説として読める言語学の概説書を書いた。言語学者としての彼の功績のひとつだ。

『ソフィーの世界』や『数学ガール』が売れたのは、哲学や数学が高校までの学習過程に入っており、潜在的に多くの読者がいたためだ。

言語学は大学の文系のそれも一握りしか履修しない。マーケットサイズが違いすぎる。一般人受けするものを書いて、マーケットが小さくて利益が出ないのだ。

セレンはもともと英語教材を編集していたそうだ。大学教材も作っていたという。出版社の弱い部分、どういう本が出せないかという内情には詳しくはなかった。なので大槻文彦が私費で刊行した国語辞典の『言海』のように、彼も自分一人の力で本を出した。

彼の目的は、人工言語界の人間の乏しい言語学の知識を底上げすることだった。また、広く一般人が言語学に興味を持てるようにすることだった。いわば社会貢献だ。そのために利益を優先せず、私費を投じた。まさに偉人というほかはない。

どうして彼が世に認められないのか、勇太は理解に苦しむ。だがマイナーな学問というのは常に世間から冷遇されるものだ。それを分かった上でセレンは活動を続けている。たとえ下等人種に嘲笑われようとも、自分の使命を全うする。ただひたすらに頭が下がる思いだ。

そのセレンは幻日辞典という市販辞書規模の辞典をたった独りで執筆・編集している。ふつう何十人何百人と人員を割くところを、たった独りでやっているのだ。化物といっても過言ではない。

ただ、もちろん独りでやっているせいか、誤字や誤植が多い。文化欄も古い情報が残ったままで、新しい情報と矛盾するようなことがままある。

そういうのを見つけると勇太はメモを取り、幻日辞典の不正データとしてまとめておくことにしている。セレンにアプローチを取ったことのない自分がなぜこんなことをしているのか、自分でも理解に苦しんだ。だが、勇太は幻日辞典の誤りを蒐集することが習慣になっていた。

メモを取るときは主にパソコンだが、図解などが必要なときは紙に書く。図は紙のほうが書きやすいからだ。

図にするとき、アルカの文はアルファベットによる転写ではなく、幻字を使う。幻字はアルカを書くのに適した文字で、すべてが一画で書ける合理的な字だ。

アルカで神のことを mirok という。ミロクという単語を幻字で書いたところ、勇太の手がピクッと止まった。

自分の眼下には **dcqol** と書かれた手書き文字がある。どこかで見た記憶がある……。

刹那、勇太はハツとして立ち上がった。ケータイを驚掴みにすると、先日駅で撮影した画像を開く。

「——なんてこった……」

思わず額に手を当てる。

「なぜ気付かなかったんだ、俺……」

写真にはこんな記号が踊っていた。

dcqolbolf dclen dcnlcu

「これは幻字じゃないか……。記号なんかじゃない。暗号なんかでもない。文字だ！」

小学校時代から読み慣れてきた幻字。なぜ自分はこれが意味不明な記号に見えていたのだろうか。

答えは簡単。アルカをオフラインで見る機会などありえないと心のどこかで思っていたからだ。アルカが現実でも使われていることは知識として知っていた。だが勇太がこれまでに見てきたアルカはどれも画面の中だった。

——だからだ。

だから、現実アルカを目の前にしたとき、それがアルカだとは思ってもよらなかったのだ。

勇太は幻字をアルファベットに転写した。

mirokbolt milen minkov

「ミロクボルト ミレン ミンコヴ？」

どういう意味だろう。

オンライン幻日辞典を立ち上げる。見出し語検索で **mirokbolt** を調べる。するとこう出てきた。

mirokbolt

[名詞] 天罰、天誅、人誅、仏罰、鉄槌、ミロクボルト

[類義語] **haizenbolt**

sm;/ 「神の鉄槌」 <mirokvoll, fv

23

[文化]

tm から vl までは神による制裁のこと。特にハイゼンによる天罰は rd で **haizenbolt** とされた。

vl 以降はミロクによる粛清や制裁のことを主に指す。ミロクの思想に反したものに下る罰。のちにセレン＝アルバザードが彼の思想を受け継いだ。

人誅という訳語は「天が制裁をしないのならば俺が鉄槌を下す」というミロクの精神から来た言葉。

【用例】

an arat mirokbolt a laabe. 私はあの愚か者に鉄槌を下した。

la yuvat mirokbolt del tift tank milen eft. 彼は窃盗による手首切り落としの罰を受けた。

どうやらミロクボルトというのは天罰とか天誅という意味らしい。

続いて **milen** を調べる。

milen(2)

[接続詞] **mil**

23

milen は **mil** の接続詞用法らしい。**mil** は知っているが、一応調べる。

mil

[格詞] なぜなら、なぜならば、なので。弱原因。

rd;<mil,lt (なぜならば)

l9:man

pin:pin

[語法]

基本的に女性語だが、後続する語句が節でなく語や句の場合、男性でも mil を用いる。

【用例】

non xat ra mil cate lunak xial im toxel. 昨日は嵐が街に来たので家にいた。

an xat ra mil esk. 雨だったので家にいた。

mil は「なぜならば」という意味だ。それを接続詞にした milen はさしずめ「～を原因とする」という意味になるだろう。

では minkov とは何か。

minkov

[交通] 女性専用車両

al/

23

[文化]

mindaz

「女性専用車両……！」

勇太は思わず息を洩らした。思わぬキーワードが出てきた。

mirokbolt は「天誅」。milen は「～を原因とする」。minkov は「女性専用車両」。つまり mirokbolt milen minkov とは「女性専用車両を原因とする天誅」という意味になる。

「これはどういうことだ……？」

先日の記憶を回想する。男は横転した車両を見て、地面にこの文を残した。

これは彼の感想なのか？ つまり彼は女性専用車両に反対で、横転したのは天罰だと言いたいのか。

あるいはこれこそが犯行声明文なのか。つまり、あの事件そのものが彼による天誅だということなのか。

後者だとしたらそれはもはや天誅とは言えない。

勇太はもう一度 **mirokbolt** を表示させた。訳語欄には「人誅」という文字が並んでいる。文化欄にはこうある。人誅という訳語は「天が制裁をしないのならば俺が鉄槌を下す」というミロクの世界から来た言葉——と。

ミロクというのは架空の世界カルディアに登場する人物だ。異世界カルディアには地球によく似たアトラスという惑星がある。アトラスの中で最強の国家はアルバザードといい、地球という南仏に相当する場所にある。

ミロクはそのアルバザードの為政者で、ミロク革命という革命を行った人物だ。ミロクの時代、人々は魔法の力を失っていた。ところがミロクは力を持った魔導師で、武力で革命を強行した。

もしあの事件が意図的なものだったとしたら、あの文言が犯行声明文だったとしたら、それは天誅ではない。人誅だ。

辞書にはセレン＝アルバザードがミロクの思想を受け継いだとある。セレンは実在の人物だが、異世界カルディアに登場する神話上の人物でもある。

彼はオーディンという中世の時代に生き、仲間とともに悪魔を殲滅し、世界を救った。その後彼は地球に転生し、400年の時を経てまたカルディアへ転生した。転生した先はランジュという、現代の地球よりやや進んだ近未来。そこで彼は再び世界を動かすことになる。

——という設定だ。

「もしかして俺がこないだ会ったあの男がセレンさんだったのか……？」

辞書にはミロクの思想はセレンに受け継がれたとある。そのセレンというのは神話上のセレンのことなのか、現実のセレンのことなのか、あるいはその両方か。

鳥肌が立った。

「セレンさんが現実世界で人誅を下してる？ そんな馬鹿な……」

だって、あれはあくまで架空の世界のお話だ。彼が力を持った能力者という設定はあくまで異世界でのストーリーだ。現実のセレンは単なる人工言語の制作者にすぎない。電車を横転させるような力を持っているはずがない。

そもそも、仮にそうだとしてもなぜ女性専用車両が彼の人誅の標的にされなければならないのだ。納得が行かない。

勇太は慌てて彼の SNS や掲示板を見る。しかしどちらも変わった様子はない。事件については何も触れておらず、淡々といつもどおり新語を公開しているだけだった。

ギシッとパソコンチェアに背中を預け、天井を見つめる。

「そうだよな……。当たり前か。セレンさんがそんなことするわけないもんな。そもそもそんな超能力みたいなものを持ってわけがない」

セレンというのはちょっと変わった人間だった。困った人を見捨てておけないタイプというか、道端で倒れている人を介抱したり、迷子の子供を世話したり、そういう行いをする人だった。

東日本大震災のときは偶々薬局に居合わせ、店員より先に客を誘導して開けた駐車場に移動させ、震える老婆をあやして励まし続けたという。

その後市民による買い占めが起こったときも、彼は我先にと群がる市民より先に商品を多めに確保し、遅れてやってきた老人や子供など、弱者に商品を配って回ったほどだ。

さらに当時は懐中電灯用に使う単二電池が枯渇し、これも買い占めが起こった。セレンは最後に残った一個を老女に譲り、自分は計画停電に備えて蠟燭を使うことにしたという。

セレンは起こったことを赤裸々に日記のように SNS や掲示板などに書くため、善行を包み隠さず書く習慣がある。もっとも、ふだん見ている分には自分のことをそれほど多くは語らない。もっぱら話題になるのは6歳になった娘の話やその周囲の人々だ。

どちらかという勇太の中でセレンというのは正義漢というイメージが強かった。ただ、癖の強い人物だということも知っていた。

かつて池袋のジュンク堂で息子を虐待している父親を見つけたときは、ビルの裏側まで響かんばかりの怒号を上げて父親に殴りかかったというし、気性の激しい側面も持ち合わせている。

人工言語界における他人とのコミュニケーションを傍観して感じるのは、彼は味方にはとことん甘く、敵にはとことん厳しいということだ。敵に対する徹底的な潰しようは眉をひそめるほどだった。

要するにセレンは怒らせてはいけない、敵に回してはいけないタイプの人間だということだ。一度恨みに思ったらどんな手段を使っても、何年という期間をかけてでも必ず報復する。彼はそういう恐ろしい一面も持っていた。勇太が彼との接触を避けてきたのは本能的に恐怖心を感じていたからかもしれない。

「良い人なのか悪い人なのか、よく分からないんだよな……」

まあ偉人というのは得てして変わり者だ。彼もまたその一人なのだろう。

いずれにせよ、相模大野駅に残された文がアルカであることは分かった。

だがそれとセレンの関係は分からない。アルカの学習者は国内にも何百人といる。詳しく把握しているわけではないが、ちょっと見知った程度の人なら何千人といるだろう。

なにもアルカを使うのはセレンだけではないのだ。自分だってまさにその一人だ。あの男が事件と何らかの関連性を持っていたとしても、それがセレンとは限らないのだ。

2013年7月4日（木）午後6時

鉄道各社が女性専用車両の運用を停止した翌日、第四の事件は起こらなかった。その翌日の今日も事件は起こらなかった。

テレビやネットでは女性専用車両に対する反感ではなく単なる鉄道会社に対するテロではないかとの意見もあったが、この2日でその線は消えた。

女性専用車両の運用を停止した途端、事件はピタリと止んだのだ。テロの主張は女性専用車両の廃止にあるのではないかという見方が濃厚になった。

鉄道各社はこれまでの態度を一変させ、女性専用車両は男性差別につながる恐れがあり、女性の側からも疑問の声が上がっていたなどと抜かし、さも前から自分たちは女性専用車両を問題視していたとでも言いたいかのような態度で記者会見を行った。

もともと鉄道会社も利益にならず処置に面倒ばかり伴い、痴漢件数の減少にも役立っていない女性専用車両など嫌々やっていた。ただフェミニストや公明党などの圧力を受けて「自分たちは痴漢対策をちゃんとしてますよ」アピールのためにしてきただけにすぎない。女の側から不安なので廃止してほしいという声が上がれば、内心かえって好都合なのだ。

一方、勇太は西武池袋線の東久留米駅にいた。先日事故が起こったホームには献花がたくさんなされていた。

勇太は花を邪魔に思いながら足元に目を凝らして歩いた。そして地面に書かれたアルカの文を発見した。

「あった……」

そこには相模大野駅と同じ文言が記されていた。勇太はケータイで撮影する。

「やはりここにもあの男は来ていたんだ……」

ここに来る途中、山手線の目白駅にも寄っている。そこでも同じ文言を発見して撮影している。これで3件だ。すべての駅に同じ呪文が書き記してあった。

警察もマスコミもなぜこれに気付かないのか。見つけたとしてもアルカだからただの記号にしか見えないのだろう。公安の父親もこの事実に気付いていない。

「現場百遍とか言うくせに、人工言語は無視かよ。バカどもが。こんなにも分かりやすいヒントを出してくれてるというのに。どんだけ無能なんだよ、警察もマスコミも」

小さな声で嘲笑うと、勇太は半ば苛立ったような表情でケータイをポケットに仕舞った。

犯人はこんなにも分かりやすい犯行声明文を出している。なのに誰も気付かない。これでは被害が増え続ける一方だ。

明らかに犯人はアルカを使って犯罪を起こしている。もしかしたらマスコミにも犯行声明文をアルカで送っているのではないか。しかし人工言語だと気付かないバカどもがイタズラか何かだと思ってゴミ箱に貴重な情報を捨ててしまっているのではないか。そんな気がしてならない。

「さて帰るか」

東久留米から相模大野までの経路を検索しようとネットを立ち上げたところで、ふと気になってニュースサイトを見た。

ヘッドラインがいくつもある。女性専用車両関連のニュースで新しい動向はない。が、その中で気になる記事を発見した。

見出しは「著名フェミニストら、同時に変死」となっていた。

記事を見てみると、勇太でも知っているような名前フェミニストたちが今日の午後に相次いで謎の変死を遂げたという。いずれも突然人体発火現象のようなもので生きたまま焼き殺されたとのこと。

目撃者の証言では誰かが灯油をかけたり火をつけたりした形跡はなく、突然歩いている最中に発火したとある。まったく以って怪奇現象というほかはないとのこと。

「まさか……」

勇太はほかのヘッドラインも探した。似たような変死事件はないか。

毎日何十件と入ってくる速報のヘッドラインを見て回る。

「あった……」

そこには「全国各地で女性が原因不明の発火現象で死亡」という見出しがあった。

記事を開いてみると、本当に全国各地の様々なところで女性が謎の発火現象を生じ、死亡していた。今度はフェミニストと違って死亡した人間の間に共通点がない。

「いや、共通点がないはずがない。必ず一本の線に繋がる何かがあるはずだ」

記事には死亡した人間の名前が上がっていた。勇太は急いで全員の名前をコピーし、その名を検索する。

しかしどれも単なる一般人のようで、検索しても名前が出てきたり来なかったり、あるいは出てきても同姓同名の別人だったり、共通点らしきものは見当たらなかった。

勇太は死亡したフェミニストの記事に目を戻した。何名かは死亡した場所が詳細に書いてあった。一人は用事で法政大学に行った帰りに、入り口のところで発火現象にあったという。

法政大学を調べると、最寄り駅は飯田橋とある。東久留米からのルートを検索し、早速現場に向かうことにした。

飯田橋の駅改札を出ると、目の前は早稲田通りだった。そこから5分ほど歩くと既に警察による黄色い非常線が張られていた。現場はブルーシートで覆われ、あたりには人だかりができていた。マスコミのカメラが押し寄せていて、現場は騒然としていた。

「これじゃ発火現場に近寄るのは無理か……」

街路樹のところで遠巻きに見ていた勇太だったが、ふと足元に何か書かれているのに気付いた。

ᄇᄇᄇᄇᄇᄇ ᄇᄇᄇ ᄇᄇᄇᄇᄇᄇ

思わずゾワッとした。そこにはこないだのような白いチョークのような字ではなく、赤黒く焦げたような文字でアルカの文が書かれていた。まるで血のような、まるで炎のような……。

あたりを見回す。みなブルーシートに目が行っている。こちらには誰も気付いていない。勇太はケータイでオンライン幻日辞典を開くと、*minlangakn* を調べた。

「フェミニズム……」

そこにはそう訳語が記されてあった。文化欄には架空の国家アルバザードにおけるフェミニズムについて書いてある。いわく、アルバザードでは行き過ぎたフェミニズムの結果、

男尊女卑が転じて女尊男卑にまで引っくり返ってしまったとある。それをミロクや彼の意思を継ぐ者たちが是正し、ラディカルなフェミニストたちを排除したとある。

また、文化欄には mindaz の項を見よとも書いてあった。

「mindaz？」

確かどこかで見た覚えがある。

そうだ、minkov だ。女性専用車両の minkov を調べたときも文化欄に mindaz を見よとあった。

mindaz の項を見ると、果たしてそれは「女らしい」という意味の形容詞であった。文化欄にはアルバザードにおける時代ごとの女らしさについて書かれてあった。中にはフェミニズムや女性専用車両に関する記述も散見された。

アルバザードでもかつて日本のように女性専用車両ができたが、男性差別として女側からも批判が出て、廃止になったという。

日本では男性差別だという論客がいてもその存在を無視され、女側から男性差別だという批判は出ていない。今回の事件が起こって女側が恐怖を感じて自粛するまで、女性専用車両による男性差別は跋扈していた。

ところが一方のアルバザードでは女側からの自主的な批判により、男性差別の女性専用車両は撤廃されたという。国民性の違いがよく現れている。

日本女は自分に好都合なことなら男が差別されようが知ったことではないという態度だ。対照的に、アルバザードの女には差別はいけないという正義感が根付いている。

「……もしかしたら」

勇太はふとあることを思いついた。

口を手で覆うと、勇太は翻り、駅へと戻っていった。

飯田橋から相模大野まで戻り、家路につく。

夕飯を済ませ、風呂に入る。

自室に籠ると、テレビとパソコンをつける。

テレビでは女性専用車両の話はかき消され、すっかりフェミニストの炎上事件で持ち切りだった。

2ちゃんねるを見ると、炎上事件関連のスレはpart5まで達していた。ざっと見てみると、女性専用車両との関連性を示唆する意見と、それとは別個という意見とがあった。

いずれにせよ、アルカに言及したサイトはなかった。念のためアルカ関連のサイトも見てみるが、至って日常通りの平常運転だった。

勇太は人工言語アルカの公式サイトにアクセスした。ブックマークに入れてある。

トップページの下部には人工言語学研究会宛てに届くと思われるメールアドレスが書いてあった。

アルカがこの事件に関与しているのか。そうだとしたら、セレンは果たして事件に関与しているのか。それが知りたかった。

彼の動向を観察してからはや8年近くが経とうとしていた。思えばずいぶん長い片思いだ。ようやく8年かけて声をかける勇気が出た。

勇太は意を決し、愛用のテキストエディターのEmEditorを立ち上げると、文面を書きだした。

名前はなんと名乗ろうか。水月勇太と実名を出してよいものだろうか。セレンのようにアルカの名前を名乗ったほうがよいだろうか。

いや、むしろアルカ名を名乗ったほうがかえってセレンには好感を持ってもらえるかもしれない。というのも、セレンはセレンというアルカ名を非常に大事にしており、日常生活でもその名を使っていると聞いたことがあるからだ。

彼にとって戸籍名は忌々しいもので、できるだけ使わないようにしているとのことだ。彼は決して日本人としての名前を「本名」とは言わない。常に戸籍名と呼ぶ。そして本名はと聞かれると必ずセレンと答える。

セレンという名をハンドルネームや芸名やペンネームのように扱うとセレンはひどく気分を害する。それがきっかけで『紫苑の書』の漫画化企画が一度ポシャったことがあるくらいだ。

なんでも、依頼先の漫画家と契約を結ぶ際、セレンという名前をペンネームのように扱われたことで激高し、その場で相手を斬り捨て企画を潰したとか。

とにかく彼のセレンというアルカ名に関するこだわりは凄まじい。

ちなみに、彼は *seren* と表記されるのを好まない。「セレンさん」のようにカタカナで書かれるのを好むらしい。以前そんな発言をしていた。

まあそういうわけだから、こちらが名乗る際も日本人としての名前を出すより、何か適切なアルカ名を付けたほうが歓迎されるのではないかな。

結局、勇太は *duurga* と名乗ることにした。ドゥルガはアルカで上弦の月を意味するが、同時に水色の語源でもある。ドゥルガには水色の月という意味もある。つまり水月だ。これならば文句なかるう。

勇太はキーボードに指を這わせた。

人工言語学研究会代表 *seren arbazard* 様

はじめまして。 *duurga* と申します。

セレンさんが新生人工言語論を立ち上げられた少し後から、ずっとアルカや人工言語に興味を持って拝見しておりました。

あれからもう8年近くもの時間が経っており、小学生だった僕も先日17歳になりました。

アルカはひと通り勉強し、『紫苑の書』や『夢織』も拝読しました。『忌憑』も楽しく読ませていただきました。

僕がひと通りアルカを学んだことの証として、今書いているこの文をアルカに訳します：
men estel van tu vok le nos axtor al arka lana sins nos feles arka tuvalel.

さて、僕はセレンさんのことを毎日のように拝見しており、よく存じております。ですがセレンさんからすれば僕は初めて認識する人間でしょう。

僕からすればセレンさんは旧知の仲ですが、セレンさんからすれば僕は面識のないただの少年でしょう。

そんな子供から突然メールを送られて驚かれるかもしれません。

全くそちら様から面識がないにもかかわらず大変恐縮なのですが、ひとつお願いがあります。

突然な申し出で戸惑われることかと思いますが、一度僕とお会いしていただけないでしょうか。ぜひ一度お話をしてみたいのです。

僕は開成高校に通う2年生の男子です。神奈川県相模原市に住んでいます。セレンさんは確か埼玉県所沢市でしたね。もしよろしければオフ会をさせていただければ幸いです。

勝手に突拍子もないお願いですが、どうかよろしく願いいたします。

duurga

勇太は何度か文面を確認し、フリーメールの送信ボタンを押した。

時間は10時。早ければ明日にでも返事が返ってくるかもしれない。

今まで毎日のように見てきた雲の上の人によく話しかけることができた。自分でもちょっと意外なくらい興奮している。

それから1時間ほど勉強をし、それからもう1時間ほどフェミニスト関連の記事を読んで過ごした。

12時を回ったのでそろそろ寝るかと思って、その前に念のためメールをチェックしたところ、なんと受信ボックスにメールが入っていた。

まさかと思って見てみると、果たしてそれは人工言語学研究会からのレスだった。誰宛に届いたのかは分からないが、名指しでセレンを指定しているので、恐らく彼からの返信だろう。

行動が素早いことで有名なセレンだが、まさかここまでユーザーに対する対応が良いとは。アルカが人気を博した理由のひとつに作者の対応が親切というのがあるが、それを肌で実感した気分だ。

ドキドキしながらメールを開く。タイトルはRe:が付いた簡素なものだった。

duurga 様

ご連絡ありがとうございます。人工言語学研究会代表セレン=アルバザードと申します。

> 新生人工言語論を立ち上げられた少し後から、ずっとアルカや人工言語に興味を持って拝見しておりました。

> あれからもう8年近くもの時間が経っており、

そんな昔からご覧になっていたのですね。驚きました。

> 開成高校

それはずいぶんと優秀な学生さんですね。アルカに興味を持って実際に深く学んでみる方というのは、たいがい優秀な学生さんが多いようです。

> 『紫苑の書』や『夢織』も拝読しました

ありがとうございます。また、読了お疲れ様でした。あれを解説するのはさぞかし大変だったことでしょう。

> men estel van tu vok le nos axtor al arka lana sins nos felcs arka tuvalel.

素晴らしい。完璧なアルカ文です。僕に一度も質問したことがないのに『夢織』を解説し、なおかつここまで見事なアルカ文を書くというのは驚嘆に値します。

> 一度僕とお会いしていただけないでしょうか。ぜひ一度お話をしてみたいのです。

はい。今度の日曜で良ければお会いできますよ。相模原市とありますが、小田急線でしょうか。僕は西武線なので、新宿か池袋あたりでお会いできますか。

僕は池袋のほうが詳しいので、池袋でしたら首尾よくご案内できると思います。

よろしく願いいたします。

seren arbazard

勇太は思わず小躍りした。なんと親切で素早い対応か。しかも快諾つきだ。思ったよりずっと取っ付きやすい人のようだ。

返信は明日にすべきか今すべきか。何度も送ってウザがられないか心配だったが、どうもセレンという人は迅速を尊ぶようなので、速やかに返事を書いておいた。

セレン様

お返事ありがとうございます。

それと、オフ会の件、快諾いただき、誠にありがとうございます！

はい、次の日曜、池袋で大丈夫です。細かい場所と時間はどういたしましょうか。

夜分遅くにメールしてしまい恐縮です。

duurga

流石にこのメールには明日返事が来るだろうと思ったが、興奮して眠れなくなってしまったので、セレンに会ったときにアルカで挨拶できるよう、サイトを復習した。

30分ほどすると受信ボックスにメールが入ってきた。早い。

ふたたびドキドキしながらメールを開く。

duurga さん

早速のお返事ありがとうございます。

僕のことはふつうに「セレンさん」と呼んでくださって構いませんよ。周りもそう呼びますし、そのほうが気が楽です。僕も duurga さんとお呼びします。

はい、では7/7日曜の3時にジュンク堂の4Fの言語学コーナーに待ち合わせでどうでしょうか。少し遅めですが、よろしければお昼をご一緒しましょう。

これを受け取ると、勇太は即座に返事を出した。

セレンさん

お返事ありがとうございます。

はい、その時間その場所で大丈夫です。

セレンさんの顔はご著書を買わせていただいたときに袖の写真で拝見しておりますので、存じております。当日は僕のほうからお声をかけさせていただくと思います。では楽しみにしております！

2013年7月7日（日）午後3時

勇太は約束より15分ほど早くジュンク堂に到着していた。

4Fの言語学コーナーで本を見ていた。

セレンの姿はまだない。以前幻日辞典でアルバザード人は定刻通りに行動すると書いてあったので、きっと3時ジャストに現れるのだろう。

ノウルソンの『英仏普遍言語計画』をパラパラとめくって読む。

セレンが書いた新生人工言語論——現在では「人工言語学」と「人工言語の作り方」に分離しているが——に、人工言語史概説という長大な記事がある。日本で唯一人工言語史について雑観できる記事で、著書『人工言語学・アルカ』の中に収録されている。

そのセレンの書いた人工言語史概説の重要な参考資料になったのがこの『英仏普遍言語計画』なのだ。

本に見入っていると、後ろから「ドゥルガさんですか？」と声をかけられた。振り向くとそこには一人の男性が立っていた。

青いジーンズに、白地で柄の入ったシャツを着て、首からはホワイトゴールドらしきネックレスを下げ、ネックレスにはブルガリのリングを通していた。腰には上着を巻いている。

1981年生まれと聞いていたので32歳のはずだが、ずいぶん若く見える。少なくとも20代かそこらに見える。大学生と言われたら信じてしまいかねない。

ぱっと見の印象は、20年以上も部屋に閉じこもって黙々と辞書を作り続けている職人気質の学者肌からは到底かけ離れたものだった。知的な顔つきをしているが、どちらかというとか社交的というか、人馴れして堂々とした感じだ。

見た目は写真で知っていたが、写真で見た通りのいわゆるイケメンだった。ただ、少し写真より歳を取った感じはあるが。

体格は辞書に172cmの65kgと書いてあったが、白人の血が入っているせいか顔が小さい。それゆえ数値より背が高く肩幅が広く見える。あと、とにかく姿勢が良い。中肉中背だが、かなり筋肉が発達している。夏の薄着なのでがっしりした胸板や腕などが目立つ。姿勢が良く胸を張って堂々と立っているのも、なんとなく威圧感すら感じる。

どうも世界一精密な人工言語を作った人という感じがしない。ちょっと歳を取ったアイドルか何かに見える。

「えっと……ドウルガさんですよ？」

見た目に反して声はやや高めだった。物腰は穏やかで、言い方も丁寧だ。

「あっ、はいドウルガです。セレンさんですか」

「はい、セレンです。はじめまして」

取ってつけたこちら側の偽名に対し、彼はいかにもセレンが本名というような口調で答えた。言い方が何となく名乗り慣れている。実生活でセレンと呼ばれているのが本当のようだと思えることができた。

「はじめまして。どうもすみません、いきなりオフ会しようなんて呼び出してしまって」
時計を見るとちょうど3時だった。

「いえいえ。ここじゃなんですから、お昼でも一緒にしませんか」

「あ、はい」

床に置いた鞆を持ち上げると、セレンに付いていく。彼はエスカレーターを降りると、勇太を誘導する。

ジュンク堂を出たところで「何か食べたいものありますか？」と訊かれた。

「いえ、特に。なんでも大丈夫です」

「えーと、じゃあ和食でもいいですか」

「はい」

セレンは池袋に詳しいようで、そのまま駅のほうへ向かって歩いていった。肩で風を切って歩く姿が印象的だった。脚が長いのか、一步一步が大きい。勇太はちょこまかと早歩きで追いついていった。

「すみません。僕から声をかけるとか言っておいて、セレンさんに見つけてもらって」

「あはは、そんなそんな」パタパタと手を振る。

「あの、それ。サレンジャンですか？」

「え？ ……ああ、アルカの sarenjan ね。はい、そうですよ」

サレンジャンというのは現代アルバザード人のファッションで、上着を腰に巻いて半ばスカートのような形に見せることだ。男性のファッションとして人気があるらしい。

「それにしてもドゥルガさんはそんな細かい単語まで知ってるんですね。もう長いんでしたっけ？」

「新生人工言語論ができた少し後からずっと見てます」

「となると、当時は小学生ですか」

「はい」

「長いですねえ。僕が年取るわけだ」と苦笑する。

駅に入り、東武ビルに向かう。エスカレーターで15Fまで上がると、「ここでいいですか？」と言って料亭を指してきた。

暖簾には美濃吉と書いてある。高そうな店だ。勇太が外食するといえばせいぜい牛丼屋かファミレスだ。こんなこじやれた店に来たことはない。流石大人は違うなあと感心したが、財布の中身が足りるか心配になった。今日はいつもより多めに財布に入れてきたが、それでも5000円しか持ってきていない。

「あの……ここ、どれくらいするんでしょう」

声が尻すぼみになる。

「さあ……どれくらいだったっけかな」

値段など全く気にもしていない様子だ。勇太に言われてハタと気付いて首を捻る。

「まあ、どのみちここは僕が持つので気にしなくて大丈夫ですよ」

「え、いやいや、こっちから呼びつけておいてごちそうしていただくわけには」

「いやあ、8年もずっとアルカをやってくれたんですね。『夢織』なんかも攻略したんでしょう？ 作者としては嬉しいんですよ、そういうの。せっかくだからごちそうくらいさせてください」

「えと……」

セレンは軽く腕を開く。あ、これはアルバザード人のジェスチャーの haiz だなと思った。

「正直お金には困っていないんです。ふだんあまり使う機会もないし、まだドゥルガさんは学生さんですし、これくらいさせてください。お店を選んだのは僕ですし」

結局セレンの厚意に甘えることとなった。

席に着き、メニューの中から高くもなく安くもない無難そうな定食を頼む。セレンは常連客なのか、メニューを見ずに注文していた。

「よく来られるんですか」

「ここか、あるいは新宿ですかね。新宿にも京王ビルの中に同じ店があるんです。一昨年
の1月に娘とその母親と行ったのがきっかけで、通うようになりました」

「娘さんって、ルシアちゃんですよ」

「そうそう、紫亞。詳しいですね」

「だってセレンさん、ネットで娘さんの話をよくするから」

「はは、そうですね」 気さくに笑う。

「それと、『娘とその母親』っていう言い方が相変わらずですね」

「ん？」 セレンはくいとお茶を飲む。

「それってリディアさんのことでしょうか？ 異世界カルディアの作者の」

「ええ。彼女とは籍を入れてないので嫁と呼ぶわけにはいかないですよ」

「じゃあ娘と恋人という言い方にしては？」

「それだと娘がいるのに他所で恋人を作ったような風に聞こえるので、なんとなく躊躇し
ますね」

なるほどと思った。

「確か双子でしたよね。男の子のほうがユルト君」

「はい」

「ネット上では娘さんの話ばかりしてますよね」

「はは。やっぱり男親だから娘のほうが可愛いのかな」

「ネットに子供の写真とかをアップする親もいますけど、セレンさんはどうなんですか」

「僕はどちらかというやりたいほうなんだけど、リディアがNGなんですよ。昔リデ
ィアや元嫁の写真をアップしたら大問題になったことがあって」

元嫁というのはセレンがよく蛍という仮名で呼んでいる女性のことだろう。確か大学時
代に学生結婚して子供も作ったが離婚したと聞いたことがある。

「失礼ですが、リディアさんと結婚しないのは蛍さん……でしたよね……彼女の影響で
すか」

ぶしつけな質問にセレンは気を悪くせず答えた。むしろ会話を楽しんでいるようにも見
える。

「それがだいぶ大きいですね。二度と結婚はごめんだという気持ちもあります。ただ、彼女側が日本に住むのを嫌がっているという問題もあります。あと、双方の仕事の都合とか、様々な理由がありますね」

「双子のお子さんメルさんという方が乳母として住み込みで面倒を見ているんですよ？」

「ええ。本当よくご存知ですね」眉を上げる。

「確かフランスのほうに住んでいるとか」

「はい、南仏住まいです」

食事が運ばれてきた。懐石料理の店で、一品一品が上品だ。こんなもの口に入れるのは初めてだった。

「あ、おいしいですね」

「お口に合いますか。なによりです」

セレンはにこりと笑った。

「あの……大変厚かましいんですが」

「はい？」

「写真をアップできないのは、やっぱりネットに上げるとコピーとかでいつまでも残ってしまったり、悪用される恐れがあるからですよ」

「そうですね」

「じゃあオフのときに写真を見せていただくことってというのはできるんでしょうか」

「ああ」セレンはポンと手を打つ。「見せるだけなら問題ありませんよ。リディアはそれすら嫌がるでしょうけど、黙っていればバレませんし」

そう言って彼はケータイを取り出すと、「どうぞ」と言って見せてきた。そこには亜麻色の髪の女性が写っていた。瞳は緑で、体型は小柄。公式サイトに上がっていたリディアの肖像画そっくりだった。

「リディアさんですね。サイトに上がっていたものに似ています」

「そうですね？ あの絵は本人からは不評で、描きなおしを要求されてるんですけどね」と苦笑する。

「あと、こっちが紫亜ですね」

画面にはあどけない幼女が写っていた。セレンよりはリディアに似ている。

「可愛いですね」

素直な感想だった。

「ありがとうございます」と言ってセレンはケータイを仕舞った。

「えーと、あの……aa, anseerētis man sala sinsik sec laates a men siina. laas et lant haas an pomat anramma」

勇太は頭の中でセリフを用意してから、できるだけ流暢にアルカを喋った。意味としては「僕に彼女たちの写真を見せてくれてありがとうございます。予想通り綺麗でした」といったところだ。

なるべく流暢に早く喋ったのは、セレンが本当にアルカを実用して生活しているのかを試すためだ。本当に彼はこの速度のアルカを聴き取れるのか。ここはうるさい街頭ではないし、自分は声量を大きめに話した。聞こえないはずがない。

セレンはそんな勇太の心を見透かしたかのように、「いえいえ。ありがとうございます。でも僕の中ではリディアは綺麗というより可愛い人です」と笑って答えた。

勇太が黙って頷くと、セレンははにこりとして、「これで僕の信用テストは終わりですか」と言った。写真のこともアルカの聴き取りのことも、やはり全て見透かされていたようだ。

セレンは料理を箸で摘んだ。

「それにしても開成高校っていうのは凄いですね。驚きました。アルカを本格的にやる人はたいいてい学歴が高いのですが、開成は流石にまだ2人目です」

「そうなんですか」

「お住まいは相模原市と言ってましたね。どのあたりですか」

「相模大野っていうところなんですけど」

「ああ。じゃあ新町中学出身ですか」

どきりとした。

なぜ知っている。

「い、いえ。中学から開成だったもので。小学校は市立でしたけど」

「んーと、鶴の台小学校ですかね」

「え……あ……は、はい。そこから歩いて10分ほどのところに住んでいます」

なんでそんなに詳しいんだ？ ふいに寒気がした。

当のセレンは含み笑いをしている。

「今高2ですよ。僕ときは順当に数Ⅱと数Bをやりましたが、開成でもそうなんですか」

「いえ、うちはⅠとかⅡとかいう命名じゃないんです、そもそも。自分でも何がⅠで何がⅡなのかよく分かっていません。多分他の学校よりはだいぶ進んでいると思います」

「じゃあこの問題分かります？ 針金をある比率で切って円と正方形を作る。このとき面積の和が最小になるのは、針金を何対何で区切る場合か」

セレンは紙に図解しながら話しました。

「それ、前にネットでみんなに問題として出していましたよね。僕、見ました」

「答えは覚えてます？」 悪戯げに微笑むセレン。

「確かメルさんの答えが圧倒的に優れていたんですよ。みんな代数学で解いているのに、一人だけ幾何的にあっさり解いてしまったっていう……」

「あの問題、当時解けました？」

「あ、はい。でも僕もセレンさんと同じく代数学で解きました。確か答えは $\pi:4$ でしたよね」

「そうです」

「あのときメルさんは円が正方形の内接円になるとき面積の和が最小になるとして、即座に暗算で答えを導いたんですよね」

「そうそう。彼女は凄い」

「アルカを作った28人からなるアシェットという集団の中でも、メルさんは一番ですか」

「ポテンシャル的にはそうですね。リディアやリュウやピネナ君など、頭の良いのはいるけれど、純粋な知性でいえばメルが群を抜いています」

「でも娘さんも5歳にして素数や最小公倍数を理解したとか。やはりメルさんの教育の成果ですかね」

「ですねえ。ただ最小公倍数やマイナスの概念は僕も6歳頃には自力で解いていましたから。紫亜は人に教えてもらいましたが、僕はネットもない時代に親が買ってきた辞典についてた十干や干支の表を見て10と12の最小公倍数を割り出し、還暦をひとりで理解していました」

「それは凄い……」

「けどまあ、勉強は嫌いだったので、ろくに学校の勉強をした試しはないですね。中3の春頃だけかな、人生でまともに学校の勉強をしたのは」

「ちゃんと勉強してれば東大にでも行っていたのでしょうね」

「東大は君が行くような場所だと思いますよ。僕には向いていません。僕は自分の大学が大好きな人間なので。もう一度人生をやり直しても同じ大学に入り、また元嫁に出会うと思います」

「後悔はしてないんですね、蛍さんのこと」

するとセレンは表情を落とし、「2005年までは、ね」と答えた。勇太はそれきり黙った。

食事を終わると池袋の街並みを歩くことになった。

セレンに会ってもアルカの話をすることは少ないというのはネットで有名な話だったが、本当にこちらから話題を振らない限りアルカの話をしてこない。

「鬼子母神社にでも行きますか」と言って歩くセレン。

勇太は後を追いつつ、「セレンさんって本当にアルカの話をしてないんですね」と言った。

すると複雑な顔になり、「人に無理に広めるものではないと思っているので、なんだかこちらから話題にしづらいのですよ」と返してきた。

「じゃあ本音を言えばアルカについてもっと話したいんですか」

「うーん、どうだろ。そんなんでもないかなあ。ほかの話をしているほうが楽しいかも」

「セレンさんってアッシュットの先代のリーザ先生という人にアルカを作るように言われて人工言語の道に入ったんですよね」

「よくご存知で」

「自分の意思でなく人から言われて言語を作った人で大成した人って、僕はセレンさん以外に知りません。エスペラントのザメンホフもヘブライ語のイエフダーもエルフ語のトールキンも、みんな自分の意思で人工言語に入っていった」

「ですね」

「なのにセレンさんは他人に頼まれて、ただひたすらに使命感だけでアルカを作り続けた。特殊なタイプです」

「かもしれません」

「どうしてあそこまで頑張れるのか不思議で仕方ないんです。僕もセレンさんに触発されて人工言語を作ったことがあるんですが、2000語止まりで終わってしまいました」

「そこまで作れれば大したものですよ」

セレンは素直に褒めてくれた。勇太は認められたような気持ちになり、なんだかとても嬉しかった。

鬼子母神社に着いた。境内では猫が散歩している。

「七夕だからやっぱり天気が悪いですね。この地方の七夕は大体いつもこんな天気です」

勇太は頷きでセレンの言葉を肯った。

「何か頑張れる理由があるんですか」

「え？」

「アルカのことです。どうしてあそこまでやり遂げられたのか。そして今もなお進化しているのか」

「うーん、まあ一言でいえば使命感ですね。僕からアルカ取ったら何も残りませんし。僕はアルカの人なんですよ。」

男って子供を産めないでしょ。だから自分が生きた証となるような、この世に生まれてきた意味となるようなものを何か産んでから死にたい」

「セレンさんにとってはそれがアルカだったんですね」

「そうですね。それと、やっぱりリディアのことかな。アルカは僕と彼女を繋ぐ恋の言葉だから」

セレンは遠くを見つめて呟いた。よほどリディアのことを愛しているのだろう。純粋な少年のような顔つきだ。

「そんなにリディアさんのことが？」

「はい。まあ正直リディアか子供かどちらかしか助けられないとしたら、僕は迷わずリディアを選びますね。リディアもまた同様らしいです。それと、僕が死んだら彼女も死ぬそうです」

「凄い愛情ですね……」

セレンは境内に腰掛けた。勇太も横に座る。

「さて、それじゃあそろそろ本題に入りましょうか」

セレンが口を開く。

「え？」

本題とはなんのことだろう。もしかしてアセットに勧誘されるとかそういう面倒くさそうな話じゃないだろうかと不安になる。

「あ、別に何かに勧誘しようとかそういうんじゃないですよ。てゆうか僕、今までオフした人とは世間話して帰るしかしてこなかったです」

「じゃあ本題っていうのは……」

セレンは勇太をピッと指さした。

「君が僕に聞きたい本題——です」

「……え」

セレンは猫を呼び寄せた。猫に慣れているのだろうか、猫はすぐに懐いてきた。お尻のところを撫でてやると、猫は背筋をピーンと伸ばした。

「あ、こいつメスだね。メスは尻を撫でると尻を持ち上げるから」

猫をあやすセレン。そのまま猫に目をやりながら言葉を紡ぐ。

「単にウチの娘の写真を見たり僕のアルカのリスニング能力を試すためだけに、8年間の沈黙を破ったわけじゃあないんでしょう？」

静かだが、迫力のある声だった。

勇太は多少気後れしたが、意を決して問うことにした。

「セレンさんは……ずいぶん相模大野に詳しくかったですね」

「ええ。大学時代によく遊びにいったものですから」

「じゃあ駅には何度も来てるんですね」

「はい」

唾をゴクリと飲む。

「では、率直に伺います。……6月28日に、相模大野の駅にいましたか」

「……」

セレンは一瞬黙った。

「6月28日というത്？」

「今世間で騒がれている謎の連続テロ事件の発端となった日です。小田急線の相模大野駅で女性専用車両が横転し、多くの死傷者を出した事件。あれが起こった日です」

セレンは猫を撫でながら問う。

「……どうして僕にそんなことを？」

勇太はポケットからケータイを取り出すと、駅のホームで撮影した文章が書かれた写真を差し出した。

「これはアルカの文ですよ。『女性専用車両を原因とする神の鉄槌』と読めます」

セレンは面白そうな顔で画面を見つめると、「綺麗な幻京書体ですね」とコメントした。

勇太は続けざまに写真を見せる。

「こちらは東久留米駅で起こった横転事故。駅のホームにやはり同じ文言が刻んでありました。それと、こっちは目白駅。ここにも同じ文言がありました」

「よくこんなの見つけましたね。マスコミだってアルカの文が現場にあったことに一切触れていないのに」

「問題は、なぜアルカの文章が事故の現場にあったかということです。しかも文言の内容は事故を仄めかしています」

「仄めかす？」

「はい。こちらを見てください。この地面の焼け焦げたような文言です。法政大学で発火して死亡したフェミニストの遺体の近くにありました。こちらは『フェミニズムを原因とする神の鉄槌』と読むことができます」

「ほう」

「これを見て僕の頭にふとある考えがよぎりました」

「聞きましょう」

「女性専用車両もフェミニズムも、どちらも *mindaz*——女らしいという形容詞を見よとありました。そこを見るとアルバザードにおける女らしさについての説明があり、女性専用車両やフェミニズムについての記述がありました」

「はい。書いた覚えがありますね」

「アルバザードでは女性が批判主体の一員となって女性専用車両を廃し、男性差別を撤廃しました。革命家ミロク思想が国民に広く浸透していた結果でしょう」

「そうですね」

「ミロクは男女差別を悪としたが、その一方で男女区別を徹底しました。過度なフェミニズムなどは男性差別や女尊男卑に繋がるとして排他されたとあります。

それに逆らう者はミロクの鉄槌、神の天罰——いえ、ミロクによる人誅を以って処分されたのです」

セレンは黙って頷いた。心なしか表情が嬉しそうだ。

「アルバザード人はミロクの人誅を恐れ、ミロク思想に従った。結果、国は恐怖政治の元で民度を回復した。独裁政権が上手く働いた稀な例です」

「その考えは正しいです。独裁政権や絶対王政はいつも悪者のように歴史の授業で教えられるますが、悪い側面ばかりではありません。それらには必ずメリットもあるのです。そこに気付いた君はやはり賢い」

「アルバザードという架空の国では、ええ、ミロクのような偉大な魔導師によって、力による革命が行われた。

女性専用車両が撤廃されたのも、大局的に見ればミロクの鉄槌という背景があったからです。ミロク思想に沿わない者には人誅が下されました」

勇太は一拍置いて続けた。

「——でも日本ではそうならなかった」

セレンは無言で猫をあやす。

「日本ではミロク思想は実現されなかった。幻日辞典という巨大なリソースがあるにもかかわらず、誰も目に留めようとはしなかった」

「そりゃ一般人がこぞって人工言語なんてマイナーな分野に興味を持ったら大変な話ですからね」自嘲気味に笑うセレン。

「そう、誰もミロク革命に注意を払わなかった。セレンさんが紡ぎ出す理想郷を絵空事と笑うどころか、その存在に目を向けることすらなかった。

貴方が一生を棒に振って作り上げてきた世界観を、世間は認めない。企業は売れないことを理由に貴方の作品の相手をしない。民間人は学術性と芸術性の高い崇高な貴方の作品に目を向けず、くだらない娯楽に走り、貴方に少しも敬意を払わない」

勇太からはセレンの横顔しか見えない。だがその顔は心なしか喜んでるように見えた。

「だから……」

「……だから？」

セレンはゆっくりと振り向いた。

勇太はふうと息を吐いて、一息に言い放った。

「——だから貴方は神の鉄槌を下したのではないですか？」

セレンは黙っていた。

勇太も黙った。

しばらくすると、セレンが「いまいち意味が分かりませんが」と返した。

「僕は相模大野の事故の際、現場にいました。そして恐らく貴方であろう人物を見ています。地面にアルカで呪文を記した貴方の姿を」

「ほう……」

「あの事故を、僕は目の前で見ていたんです。世間はテロだと言ってるが、あれはどう見たって人間業じゃない。連結部は自動で外れ、車両は何の力も加えられずに自然と横転した。

テロが爆弾で吹き飛ばしたとか、そういうレベルじゃないんです。あれはなんというか……魔法、そう、魔法のようでした」

「魔法、ね」

「フェミニストの焼死事件のときもそうです。アルバザードのミロクが定めた正義に反するようなラディカルなフェミニストたちが突然全国各地で自然発火して死ぬなんてありえない。この世の法則で説明付かない何らかの力が働いているとしか思えません」

「この世の法則でない？」

「はい。この世の法則ではありません」

「ではいったい何だと？」

「ですから、この世ならざる世界の法則です」

勇太の言葉に思わずセレンは唇の端を上げた。

「——すなわち、異世界カルディアの法則です」

セレンは猫の眼前で指をせわしく動かす。猫は鼻を寄せてひくひくと指を嗅ぐ。

「これは僕の勝手な妄想です。

セレンさん、貴方は幻日辞典に書いた異世界の設定を現実化させる能力を手に入れたのではないですか？」

すると彼はくっくと笑い出した。

「異世界を現実化させる？ 架空の世界を？」

"hanoi e fie ikl xan"

勇太は静かにアルカの慣用句をそらんじた。

「積み重ねた嘘はやがて真実になる。嘘から出た真に当たるアルカの慣用句です。

セレンさん、貴方は20年以上に渡って架空の世界と言語を作り上げてきました。

その精度は世界一です。この世に何十億という人間の中で、貴方だけが世界で一番精巧な架空の世界を作り上げたんです。

その架空の世界はあまりに精巧すぎた。

——やがてその嘘が真実になるほどに」

「嘘が真実に……」

「はい。積み重ねた嘘はやがて真実になります」

「しかし君、嘘というのは真理値が0です。0をいくら重ねても1にはなりませんよ」

「0に数学上等しい無限小を無限個集めれば、その値は有になります。

原理的には嘘を集めれば真実になるんです」

「しかし僕は無限に執筆したわけじゃない。たった20年そこらです」

「ですがその嘘はあまりに精巧すぎた。精巧すぎる絵が写真と区別付かないように、まるで実在の人間に見えるように、あなたの描いた世界は実物と区別が付かないレベルにまでなった。

その結果、貴方は異世界を現実に取り込むことができるようになった。

——違いますか」

「突拍子もない話ですね」

「自分でもそう思います。しかしそう考えると納得がいくのです。

セレンさん、貴方は辞書に書いた異世界の事柄を現実のあるべき正義だと定義する力を手に入れたのではないですか。

つまり、貴方が辞書に書いたことが、そのままこの世界の正義となる」

「女性専用車両が横転したのも、ラディカルなフェミニストが炎に包まれたのも、すべてアルバザードの正義に従わなかった報いだと？」

「はい。それが僕の考えです」

「やれやれ……」

セレンは猫の背中をトンと押して、遠くへ行くように指示した。猫はとてとてと歩いて去っていた。

「とんでもない思いつきをするものだね」

口調が変わった。繕わない、自然な口調に聞こえる。

「自分でも滑稽だと思います」

セレンは虚空を見つめ、ゆっくりと立ち上がった。

「最初に気付くのはもっと親しいユーザーだと思っていたよ」

小さな声で、セレンは呟いた。

それは小さくて大きい告白だった。

「どうして最初に気付いたのが君だったんだろうね」

恐らく別の人だと思ってた。もっとふだんから自分と接点のあるユーザー」

「ゲームを作ってくれるような、漫画を描いてくれるような？」

「うん、彼あたりが最初に気付いてくれると期待してたんだけど」

「でも彼がアルカに参入したのは僕よりずっと後ですよ。僕の貴方への片思いはほとんど最古参といっても差し支えない長さです」

「そうか……。それは嬉しいよ。そこまで見ていてくれた人がいるなんてね」

セレンは解けかかった上着の袖を結びなおした。

「……認めるんですね？」

「ああ。君の予想通りだ。俺が幻日辞典に書いたことはこの世界の正義として定義される。アルバザードの正義に逆らうものには人誅が下る」

セレンはよそ行きの言葉遣いを止め、素の口調で話した。今までコーティングがかかって糖衣だらけで甘だるかった口調が、一気に自然なものに感じられた。

「アルバザードの正義とは名ばかりでしょう。実際には貴方個人の正義だ。貴方が世界はかくあるべしと思った内容を辞書に記す。するとそれに逆らう者は天罰を食らう。

結局のところ貴方が敷いた正義に逆らうものには人誅を下しているにすぎない」

「そうだね。

それで、君は実際どう思う？」

「どう……と言いますと」

「さっき言ったよね。独裁政権も絶対王政も、必ずしも悪ではないと。為政者が正義と善意と力に溢れていれば、衆愚政治などより世の中は遙かに良くなる。

君は今の日本に正義があると思うかい？

圧倒的な票数を保持した老害による無意味な選挙制度。これに何の意味がある。選挙というのは人海戦術がすべてだ。数が物を言う。しかし日本という国は少子高齢化社会だ。若者がいくら選挙という土俵で戦おうとしても、決して数の上で老人に勝てない。結果、老人に都合の良い政策ばかりが通り、しわ寄せはすべて若者に来る。

フェミニストによる女尊男卑もそうだ。最近の女どものマナーの悪さには見ていて反吐が出る。何が最近の女は強くなっただ。ただわがままになったただけだろう。ギャーギャー騒ぎ立てるのが強さだと勘違いしてる。黙って耐える芯の強さを失って、ただ子供のように喚き散らしているだけだ。

強くなった？ 勘違いも甚だしい。最低限の我慢すらできなくなって意地汚くなっただけだ」

「それが貴方の考えですか」

「この国には正義がない。溢れかえる非正規労働者、若者の就職難、一度社会のレールから外れたらニートになるしかない融通の効かない社会、少しも守られない労働基準法、蔓延するブラック企業、女ばかりに都合の良い法廷、目を覆うような資産の世代間格差、毎年3万人を超える自殺者、利権ばかり追う企業や政治家、既得権益にしがみつく老害。

問題を挙げればキリがない。

強者が弱者を食い物にし、弱者は抗うこともなく搾取されていく。弱者は革命しようにも力がない。

こんな世の中が正しいと思うか？」

勇太は何も答えられなかった。少なくともノーとは言えなかった。

「だから手始めに女尊男卑を標的にしたのですか」

「そう。これは序章にすぎない。フェミニストなど小さな問題にすぎない。実験としてはちょうど良い題材だった」

「人が死んでいるんですが？」

「世の中にはいらぬ人間が多すぎる。地球はそれほど豊かではない。

世の中には2種類の人間しか必要ないんだ。

ひとつは使命を持って行動し、人類の発展を促すもの。

そしてもうひとつはそれを支える者。

それ以外のただ無為に生きている人間など必要ない。

まして人の足を引っ張ったりするクズなど積極的に死ぬべきだ。

クズがいなくなれば世の中は良くなる。

人の命は尊い？ 誰の命も等価？ 暴力やテロはいけぬこと？

どれもこれも現在の為政者にとって都合の良い価値観にすぎない。民衆をそうやって洗脳し、力で解決することを子供じみた狂気と定義することで、反骨精神を奪おうとしている。

持つ者が話し合いに応じて持たざる者に富をくれるというのか？ ブラック企業で酷使されている人間が陳情すれば、定時で帰してもらえて生活を保証してもらえるのか？

話し合いで東電幹部のような既得権益者が東日本大震災の反省をしてボーナスを返上したり福島に寄付したりするというのか？ 誰かが刺し殺されないかぎり、奴らは何の反省もなく利益を貪り続けるだけだ。

既得権益者、持てる者は決して話し合いなどで持たざる者に喜捨しない。奴らは自分の身が危うくなって初めて既得権益を差し出すんだ。

話し合いで解決しましょう？ 暴力はいけません？ 暴力で今の地位を築き上げたお上が何を言うか。明治維新然り、フランス革命然り。すべては暴力で革命を起こしてきた。時代を変えてきたのはいつだって力による革命だ」

「では勝海舟の無血開城は？」

「それは交渉の背景に巨大な力があつたからにすぎない。なんの後ろ盾もない人間が幕府に乗り込んでいって無血開城してくださいなどと言って聞き入れてもらえるだろうか」

「それは……確かに」

「暴力は止めましょうなどというのはしよせん為政者側の言論による刀狩りにすぎない。革命やテロは幼稚で野蛮で無駄な行為などと洗脳することで、精神的な刀狩りをを行っているんだ。そしてほとんどの国民は唯々諾々とそれに従ってしまっている」

「つまり……セレンさんはそれを変えようと？ この国を革命しようと？」

「そう。俺はこの世界を革命する。この辞書を使い、新世界の神となる」

「なるほど」 勇太はすっと立ち上がった。「よく分かりました」

そして鞆の中から用意してきたスタンガンを取り出す。

「僕は少年漫画の主人公ではありません。これは売り物のお話でもありません。単なる現実です。だからテロは止めようなんて綺麗事も言わないし、テロは幼稚だなんて嘯くこともしません」

「じゃあ君は俺と一緒に来るかい？」

スタンガンに目をやりながらセレンはせせら笑う。

「セレンさんがもし本当に正義感と義侠心にこれからも溢れるならば、世の中は今よりよくなるかもしれませんね。貴方のアルカにかけてきた尋常ならざる精神力の強さを鑑みると、貴方ほどの偉人が力を持ったなら革命を成功させることができるかもしれません」

「——だが？」

セレンは勇太の言葉を予想するように言った。

「ですが、僕は貴方に与するわけにはいきません。これは単に僕の個人的な問題なんです。

僕の父は警察官で、公安に勤めています。一連の事件を捜査しており、しかも捜査員を率いる立場にあるんです。

今後父は貴方の壁として立ちただかるでしょう。そうなれば貴方が父を排除するのは目に見えます。貴方が描く理想郷に興味がないわけではありませんが、個人的に父を見捨てるわけにはいかないんですよ。ええ、まったく個人的な理由です」

「いいね。実にいい」

セレンは両腕を広げた。

「愛する者のために。戦う理由として誇るべきだ。その軽率な判断が社会全体の秩序を乱すとしても、その動機は美しい。君は自分の行いを誇るべきだ」

「……ですから、罠に嵌めるような形になってしまって大変恐縮なのですが、貴方を捕らえさせてもらいます。警察に引き渡し、幻日辞典のデータを破壊し、全てに幕を下ろします」

「そのスタンガンを使って？」

勇太はスタンガンのスイッチを入れる。パチッと音がして電流が走る。

「無防備の貴方に卑怯かとは思いましたが、事情が事情です。勘弁してください。それに僕は喧嘩が得意なほうではないんです。大人しく投降していただけるなら、わざわざ感電させる必要もありません」

するとセレンはくっくと笑い出した。

「君は何パーセントくらい俺が犯人だと思っていた？」

「正直 50%も確信していませんでした。更には言えば貴方が犯行を認める確率など更に低いと思っていました」

「もしはじめから俺が犯人だと分かっていたら、本当にその装備だけにしたいかい？」

「え……」

「君は心の半分くらい、まさかセレンさんと本当に渡り合うことなどないだろうと考えていなかったか。万が一ということもあるという理由でとりあえずスタンガンを用意した。違うかな？」

言われてみればその通りだった。だがスタンガンを前にして無防備な彼のこの自信はどこから出てくるのだろう。

「まさか……貴方も武器を」

セレンは静かに首を振る。そして一瞬笑みを洩らしたかと思うと、スッと真顔になる。

「武器はない。強いて言えば、俺自身が武器だ」

「え……」

それはまさに一瞬の出来事だった。数mは離れているにもかかわらず、一瞬にしてセレンの左脚が胸の前に届いた。伸びるゴムのような前蹴りだった。

勇太は何が起こったのかも分からないうちに後方へ吹き飛ばされる。

思わず左手に構えたスタンガンを振り回すが、セレンは即座に右脚でミドルキックを放つ。セレンの足は勇太の左手首を捕らえ、勇太はあまりの痛さにスタンガンを落としてしまう。

しまったと思うまもなくセレンは間合いに入り込むと、右足でスタンガンを遠くに蹴り払う。

スタンガンを目で追ったのも束の間、セレンはワンツースを勇太の顔面に浴びせてきた。その速さといったらまるでボクサーのようだった。

ボクシングなら大きなグローブを着けているので手を前に出すだけでそれなりにガードができる。しかし裸拳の場合は違う。裸拳はあっさりガードの間をすり抜けて顔面にヒットする。

左のジャブはなんとか手で反射的に防げたものの、強烈な右ストレートを頬に食らい、あまりの痛さに失神しそうになる。裸拳はグローブがない分、脳を揺さぶる度合いが低い。ただ単に痛みの方が強いのだ。

人に殴られたことのない勇太は思わず顔をしかめ、必死に殴られまいと頭を手でガードする。

するとその腕を取られ、意識がおろそかになっていた足を刈られてしまう。脚を奪われた勇太はあっさりと地面に倒れこむ。柔道場と違って地面は畳ではない。コンクリだ。背中から倒れたときの衝撃は半端ない。一瞬、息が止まった。

そのままセレンは勇太の腕を取ると、腕を後方にねじって地面に押しつけた。腕をねじられ、手首まで極められ、あまりの痛さに悲鳴を上げてしまう。

セレンは勇太の耳に顔を近付けると、「ごめんね。ちょっと痛いけど我慢してほしい」と囁いた。

それでも勇太が痛いと呼ぶと、セレンは少しだけ力を緩めた。だが、脱出できる緩さではない。

「君は俺を8年も見てきたのに、俺がケンカ慣れしていることを知らなかったのかな」
「それは……知っていました。格闘技に長け、居合や剣道もでき、ナイフ術にも通じ、弓も射れて、銃の扱いすらできるんでしたっけ……」

「そこまで知っているなら、なぜスタンガンなんかで渡り合おうと思ったんだい？」

「近代的な武器があれば勝てるかなと思ひまして……」

我ながら潰されかかった虫のような声だ。

「スタンガンにナイフに木刀を加えても、何の訓練も受けてない君じゃ俺を制することはできないだろうな」

「参考までに、どれが一番厄介ですかね。やっぱりナイフですか？」

「いや、木刀だね。あれは地味に鎖骨が折れたりとダメージがでかい。ナイフはそうそう当たらないから、使い慣れない者が扱う分には実際大した脅威ではない」

「ああ、そうですか。とはいえ、木刀を隠し持つのはできませんからね」

「まあ木刀でも素人の動きじゃ振り下ろしたところを掴んでしまえば終わりだけだね」

「そうですか。じゃあ銃でも用意すべきでしたね」

「あいく素人が銃を撃ったところで2m先の静止物に当てることすら難しい。俺のようなケンカ慣れた人間が素早く動くのを見極め致命傷を一発で当てるとなると、それはまあ現実的ではないだろうね」

「ということは僕が武力で挑んだのがそもその間違いだったと」

「そういうことになるね」

「まったく、人工言語を作り上げた学者肌のやることとは思えませんよ」

地べたに這いつくばったまま勇太は苦々しげに吐き捨てる。

「なんで学者がこんなケンカ慣れしてるんですか。チート級の強さじゃないですか」

「そこまで強くはないよ。ちゃんと毎日道場で鍛えている大柄な若者には勝てない。素人よりはだいぶ強いという程度さ。それに、正確には君でも俺を倒す方法はあるよ」

「後学のために聞かせてもらえますか」

「簡単だよ。不意打ちすればいい。いくら鍛えていても漫画じゃないんだ、不意打ちには弱い。正面から挑まれたらふつうの高校生相手に負けるはずがない。もともと俺は高校時代は一人暮らしをしていて、街でチーマーをやってケンカばかりしていたからね」

「なるほど、例の cuuks という歩き屋時代のことですね」

「本当に君は俺のファンなんだねえ」

セレンは感心したように呟いた。

「さて、秘密も知られたことだし、本来は君を生かしておくわけにはいかないな」

「ここで殺しますか」

「まあ素手でも人を殺す方法は子供のころから叩きこまれているからできなくはないけど、今回は見逃してあげるよ」

そう言うとセレンはあっさり手を離した。勇太は起き上がって地べたに座る。

「……いいんですか、解放しても」

「今君はまだ俺の間合いにいる。いつでも殴りかかれる間合いだ」

優に1m以上離れてるのに間合いの中だという。

「格闘技のできる奴の間合いというのは案外広いんだよ。不審な動きがあれば即座に攻撃させてもらう。まあ、そうしないのは目に見えているけど」

「なぜ？」

「恐怖心だよ。君は俺に対し動物的に絶対勝てないと身体に刷り込まれてしまった。その恐怖心を拭うことはプロの格闘家でも難しい。まして一般人の君に乗り越えられるはずがない。実際、君は今怖くて下手に動くこともできないだろう？」

確かにそうだった。

「まあそんなに怯えた顔をしないでよ。ケンカを売ってきたのはそもそも君なんだから？」

「それはまあ……そうですね。すみませんでした」

セレンはスッと立ち上がった。境内の縁に腰掛ける。

「これでもまだ間合いの中なんですか？」

「いや。もう間合いの外だよ。逃げようと思えば逃げられる。まあ俺、大学時代50m走で5秒台だったから、実際に逃げようと思って逃げられるかどうかは別だけど」

それって事実上逃げられないってことじゃないかと勇太は思った。

「どのみち逃がすつもりだから安心しなよ。俺は嬉しいんだ。自分の犯行を見つけてくれたことがね」

アルカで書いた犯行声明文はマスコミにも警察にも送りつけてある。だがどこの馬鹿どもも悪戯だと思って、というかそもそもメッセージだとすら思わず、アルカを無視したんだ。俺のアルカをね」

「マスコミが馬鹿だというのは同感です」

「君が俺に気付いてくれたとき、正直嬉しかった。俺はそもそもバレても構わないと思っていたからね。じゃないと犯行声明文なんて送りつけやしないし、現場にも残さないさ。

だから君のことを殺すこともしない。最初からバレても構わなかったわけだからね」

「それは……助かります」

勇太は項垂れた。

「それにしても本当に強いんですね」

「そりゃ毎日弓を射って刀を振ってサンドバッグを殴ってりゃ強くなるさ。筋トレやスパーリングも定期的に行なっているし。若いころはスクワットを連続 1200 回やったこともある」

「ほとんど化物ですね。確か自転車で埼玉から京都まで行ったんでしたっけ？」

「そう。ロードレーサーでもないただのクロスバイクでね。体力にも自信はあるよ。そうじゃなきゃ幻日辞典なんか作れない」

「文武両道でイケメンとか、実在の人物にしてはチートキャラすぎるんですが……」

「ありがとう、素直に褒められておくよ。ただ、これでも相当老いたんだよ。17 歳の自分に比べれば、半分にも満たない能力値だ。最近歳食って容姿も体力も衰えるわで、ロクなことがないね」

「会ったのが全盛期を過ぎたセレンさんで助かりました」

「それはそうと、怪我は大丈夫かい。それなりに手加減したんだが、肋骨とか折れてないかな。前に正道会館の空手やってる奴相手にミット越しでミドルキックを打ったら肋骨折っちゃったことがあってね、練習中に」

「とりあえず大丈夫だと思います。倒されたときに背中が痛かったのと、腕をねじられたのが地味に痛かったです。あと、殴られた頬が」

「悪かったね、せっかくのオフ会がこんなんで」

「いえ、僕が先に手を出したんですし、気にしないでください」

「でもまあ、次に会うときは敵同士か。ともあれ、お父さんのために頑張りなよ」

「はい。セレンさんも革命がんばってください。僕は立場上、止めなければなりませんけど」

「もう帰るの？」

「本当に逃がしてくれるのなら」

「うん。それは構わないよ。どのみち君は逃がすつもりだったし。……名前に免じてね」

「え……ドゥルガですか。やっぱりアルカ名を名乗ったのがお気に召したんですか」

「ううん、違うよ。下の名前に免じてってこと」

セレンは縁から立ち上がると、背を向けて階段を降りだした。

「下の名前……？」

訝る勇太に、セレンはひらひらと手を降った。

「——じゃあね、水月君」

その言葉に魂を吸い込まれそうになった。

階段をゆっくりくぐるセレンの背中に呆然と声をかける。

「……なぜ……？」

セレンは振り向かずには答えた。

「リディアは俺より怖いよ。アシェットの情報網を舐めないほうがいい」

勇太はすっかり肝が冷えてしまい、しばらく動けないでいた。

2012年7月8日（月）午後11時

勇太は父親の帰宅を待った。

父親は夜遅く帰ってきた。今日はもしかしたら帰ってこないかもしれないと思っていたから助かった。

「父さん、ちょっといい？」と言って父親を部屋に呼んだ。

「勇太が父さんを部屋に呼ぶなんて珍しいな」と言いながら父親はやってきた。

大事な話があると言ってドアを閉めた。

「父さん、例のテロの件、進展はあった？」

「いや、そういうことは家族にも秘密なんだ。お前もそれくらい分かっているだろう」

「実は父さんに協力してほしいんだ。犯人逮捕について」

「協力？ 父さんがお前にか？」

「そう。というのも、昨日犯人に会ってきたからね」

サラッという勇太に、父親は「なんだと……？」と呟いた。

「いや、本当に。僕の知り合いが犯人だったんだ」

「……お前は何を言ってるんだ？」

「僕がくだらない嘘を吐くと思う？」

「……………」

きっと開成高校に通う優等生の息子の言葉でもなければ、「なに馬鹿言っとる」と一喝されて終わりだったろう。

「確かに唐突すぎたね。でも結論を先に言ったほうがやりやすいと思ったんだ。じゃあその結論に対する証拠を今から挙げていくね」

勇太は相模大野駅で撮影した写真を見せた。

「これ、大野で起こった最初の事件の写真」

「なんだこの記号は」

「事故があったとき、実は僕、ホームにいたんだ。車両が横転するのを目の前で見る。事故があったとき、現場には一人の男がいた。その人がホームにこの文字を書いていったんだ」

「文字……なのかな？ この暗号が読めるのか、お前」

「暗号じゃないよ、父さん。これは人工言語」

「人工……言語？」

「人が作った架空の言葉のことさ。エスペラントって聞いたことない？」

「ないな」

エスペラントも知らないのか、この親父は。勇太は内心呆れた。

「そもそも言葉って作れるものなのかな」

「簡単な暗号程度のもならずぐにでも。だけど本格的に日本語や英語のような自然言語レベルにまで作りこもうとすると何十年とかかかる。まして自然言語から単語などを借りてこないタイプの言語は想像を絶する労力がかかるんだ」

「ほう……。よく分からんが」

「で、世界一精巧に作り込まれた人工言語っていうのが実はアメリカでもヨーロッパでも中国でもなく、この日本に存在するんだ」

「それがこの写真に写ってる言語なのかな？」

「そう。その名は人工言語アルカ。

そしてこの文の意味は『女性専用車両が原因の天誅』といったところ」

「天誅……だと」

「同じ文章が東久留米駅と目白駅でも見つかった」

写真を見せる。父親は驚いた顔になる。

「警察もマスコミもこの犯行声明文に気付かなかったの？」

「……」

父親は口を割っていいものか迷っているようだ。

「父さん、守秘義務については分かるけど、今回ばかりは僕を信じて仲間に入れてほしい」
すると父親はようやく重い口を開けた。

「……警察もマスコミもこの文章についてはまだ何も気付いていない」

「やっぱりね。」

じゃあ次はフェミニストの炎上事件について。法政大学で死んだオバサンの近くで見つけたのがこれ」

画像を見せる。

「こっちは『フェミニズムが原因の天誅』という意味だよ」

「これも女性専用車両のテロと同一人物によるものなのか？」

「そう。あと僕はその日同時に炎上して死んだ一般女性たちの間にもなんらかのリンクがあると思ってる。公安はそれに関しては調べがついてるの？」

「ああ、その一般女性たちの共通点についてはもう分かっている」

「聞かせてくれる？」

父親はやや迷いながらも、「彼女たちはいずれも痴漢の被害者だ」と答えた。

勇太はしばし虚空を見つめた。

「ねえ、父さん。もしかして、その中に裁判進行中や裁判を経た人がいない？」

「いる」

「で、その裁判で男性側は無罪——というか、冤罪を主張してたりしない？」

父親は目を丸くした。

「なぜ分かった……!？」

「やっぱりね……」うんと頷いた。「これで炎上した女性の共通点が分かった。彼女たちは痴漢冤罪をでっち上げた人物だ」

「痴漢冤罪……だと？」

「痴漢って女性の言い分が一方的に通る、証拠すらロクに不要な現代版の魔女狩りだよ」

「……」

「痴漢で訴えられた男性はまず無実を証明できないし、負ければ当然職を失い、路頭に迷う。たとえ勝ったとしても職場におけるブランクや『あいつ本当はやったんじゃないか』っていう白眼視を受け、会社にいづらくなる。無実が証明されても職を失う場合があるよね」

「ああ……」

「日本の場合、一度レールを外れれば、復帰は難しい。そういう社会だよ。つまり痴漢は人生を崩壊させるんだ。社会的な死刑だよ。触った代償が社会的な抹殺って、実害が大きすぎないかな？」

「なら触らなければいいだろう」

「うん。まあ刑の軽重はここでは問わないとして、問題は痴漢冤罪の場合だね。それだけ大きな被害を男性に与えるわりに、あっさりと女性は冤罪をかけることができる」

「……」

「人の人生を嘘で崩壊させようとしたんだ。冤罪をでっち上げた女は焼死くらいしてもおかしくないんじゃないかな」

「……お前はそう考えているのか」

「焼死が妥当かどうか、僕は分からない。裁判官じゃないからね。でも、少なくともテロの首謀者はそう判断した」

「そのテロの首謀者っていうのは誰だ」

勇太は本棚から『人工言語学・アルカ』を取り出し、袖の写真を見せる。

「この人、セレン＝アルバザードさん。事件の首謀者」

「物書きが首謀者だと……？ セレンって……いったいどこの国の名前だ」

「セレンっていうのはアルカでの名前。彼自身は日本人だよ、混血児だけど。日本人としての戸籍名は別にある」

「お前は どうしてこんな本を持っているんだ？ そもそもアルカなんていうのをどこで知った？」

勇太はパソコンの画面に公式サイトを表示させる。

「これさ。ネットを通じて8年前くらいに知った。以来、ずっとアルカを学んでいる。読み書きもできるし、聞き喋りもできるよ」

父親は息子の趣味をまるで知らなかったようだ。

「そんなどこの国の言葉でもないものを覚えて何になるというんだ？」

「英語みたいな使い方をするわけじゃないよ。世界一精巧に作りこまれた人工言語として学術的・芸術的な意義や価値があるんだ」

「ふむ……。それはともかく、なぜこの男が犯人だと思ったんだ？」

「最初は確信なかったんだ。アルカのユーザーは何百人といるからね。作者本人が自言語を使って犯罪を犯すなんて信じられなかった。

だから僕は直接聞いてみようと思ったんだ。それでメールを出してオフ会に誘った。昨日会ってきたよ。事件のことを問い詰めたら、自分が犯人だと認めた」

「手口は？」

「それが信じられないだろうけど、辞書なのさ」

「辞書……だと？」

「アルカの辞書は幻日辞典っていうんだけど、これはオンラインで公開されてる。

幻日辞典には架空の世界カルディアの文化が書かれている。

その記述に反する内容を行うと、現実世界の人間は罰を受けるんだ」

「……すまん、言ってる意味が分からない」

「要するに魔法なんだよ。超能力といっても構わない。呼び方は何でもいい。

とにかく彼が辞書に定義したことはこの世界のルールになるんだ。

それに逆らった者はみな罰を受ける」

「女性専用車両やフェミニストや痴漢冤罪がそうだというのか？」

「そう。辞書に書いてある。架空の国家アルバザードでは、これらは全て間違っただけのものとして廃止・粛清されたと」

父親は口元を手で押さえた。

「……信じられん」

「——と、僕も思ってた。だけど本当のことだった。痴漢冤罪犯が焼け死んだ現場を探してみてもよ。きっとアルカの呪文が見つかるから」

「訳が分からん。なぜ辞書に書いたことが現実化するんだ！？ 架空の物語なんだろう？」

「精巧に作り込まれた虚構は現実と区別が付かない。嘘はやがて現実になる」

「そんな魔法みたいな話があるか！」

「うん、だから魔法なんだってば」

父親は押し黙った。

「警察も分かっているはずだよ。衆人環視の中、車両の連結部を外し、指一本も触れずに車両を横転させることなど、人間業ではないって。人体が全国各地で同時に発火することがありえないことも分かっているはず。人間業では説明つかない力によって起こった犯罪という解釈をしなければ説明がつかないことを、警察は薄々勘付いているんじゃないかな」

父親は「ぐ……」と言ったまま言葉に詰まった。

「どうなの。公安でも魔法説みたいのが挙がらなかったの？」

「……正直なところ、若い連中が冗談交じりに魔法や超能力でも使わないと実行できないなどと口走っていたことならある。だが誰も本当にそうだとは思っていない」

「でも、それが真実なんだよ。父さんは僕が嘘を言っているとと思うの？」

「いや、勇太がそんなくだらん嘘を言う理由はない。だが事件の真相が魔法だなんていうのは到底納得できない。そもそも、そのセレンとかいう男は自分が犯人だとなぜ認めただ？」

「なんでも、自分が犯人だということに気付いてほしかったそうだよ。そのために毎回犯行声明文を残しているんじゃないか」

「犯行声明文を残すのは主張したいことがあるからだろう。なら日本語で書けばいいだろう」

「分かってないなあ、父さん」勇太は苛立ちを覚えた。「セレンさんは『ことばは魔法。まほうは言葉』という格言を残している。彼は何十年と苦心して作り上げた虚構が現実化したことを喜んでいるんだよ。彼にとってアルカという言葉は魔法なんだ。日本語で犯行声明文を書いてもなんの意味もない。アルカで犯行声明文を出すことに意味があるんだ」

「そのアルカという言葉を我々警察やマスコミや世間に理解せよ？ 我々のほうから犯罪者に歩み寄り、犯罪者を理解せよというのか」

「もちろん。アルカは魔法の言葉だ。日本語より遥かに力を持っている。もはやこの世のどんな言葉より強い力を持っている。僕らが彼の主張を彼の言葉で聞かなければならない。それが彼我の力関係なんだ」

「じゃあ何か。その犯人は最初からずっと自分の言葉で犯行声明文を出していたというのか。それを我々社会に理解せよと」

「あれだけの事件を起こしておきながら、マスコミや警察が一切アルカを無視してきたことについて、セレンさんはだいぶ気分を害していたよ。

彼にとっては、くだらない人間である僕たち衆愚の一般人がアルカに平伏して畏敬して理解しないことが許せなかったんだ」

「なあ勇太。お前さっきからずいぶんとその男の肩を持っているじゃないか」

「まあね。彼はなんにせよ僕が尊敬する偉人だから」

「その気持ち伝わったから、お前は昨日そいつに会ったとき殺されずに済んだのか」

「いや、もともと僕を殺すつもりはなかったらしいよ。そもそも僕は仮名を名乗ったのに、こっちの素性はすべてバレてた」

「向こうにも公安のような諜報部があるのか。セレンというのは個人で動いているのではないのか？」

「セレンさんはアセットというアルカを作った集団のリーダーをしていた人だったんだよ。もうアセットは解散してしまったし、そもそも学者肌の集まりにすぎないから、犯罪とは無縁の集団だけだね」

「学者集団か……」

「でもセレンさんの恋人のリディアさんっていう人がいてね。その人は個人的にかなり力とお金を持っているそうで、僕の素性を調べるなんていうのは朝飯前らしいよ」

「つまり、最低でもセレンという首謀者のほかに、協力者として恋人のリディアというのがいるわけか」

「そういうことになるね。そこで父さんにお問い合わせがあるんだけど、公安の力を使ってセレンさんやリディアさんの身元を調べてくれないかな。ネットを使ってるから、プロバイダに問い合わせれば個人情報を簡単に引っ張り出すことができるはずだよ」

「調べてどうする」

「もちろん逮捕するんだ。逮捕して、幻日辞典のデータを回収し、破壊する。辞書がなくなれば彼は魔法の力を失う。そうすれば一連のテロ騒動はおしまいさ」

「ふむ……」

「セレンさんはこのサイトの管理人だし、掲示板にも書き込んでいる。IPアドレスからプロバイダに照会を申し込めばすぐに身元が割れる。」

リディアさんについては南仏からのこのサイトへのアクセスを調べてみて。そうすれば住所だけでなく、役所に届け出ている名前まで特定できるはずだから」

「……うむ」

「父さんはまだ信じてくれないみたいだけど、どうせ公安は何も身動きが取れない状況なんですよ？ 手がかりひとつ掴めていない。だったら調べてみる価値はあると思うな」

しばし考えた末、父親は「分かった。明日まで待て」と言って部屋を出ていった。

2013年7月9日（火）午後11時

勇太は父親の帰りを心待ちにした。

父親は11時に帰宅した。勇太は玄関で父親を出迎えた。

息子が父親を出迎えるなど、5歳以来の珍事だ。母や姉や妹は何かと不思議そうに居間から首を伸ばして見ていた。

父親は無言で階段を上り、勇太の部屋へ入った。表情は重苦しい。

部屋のドアを閉めると、ベッドに腰掛ける。勇太はパソコンチェアに腰掛けた。

「どうだった？ セレンさんたちについて何か分かった？」

父親は複雑な表情で鞆から書類を出した。そのうち一枚を見せてくる。そこには一人の男のプロフィールが書かれていた。住所氏名年齢電話番号インターネットプロバイダ情報などなど。

「それがセレン＝アルバザードという男の正体だ。インターネットプロバイダに問い合わせさせて判明した」

「リディアさんについては？」

「海外からのアクセスを調べたが、分からなかった。フランスからのアクセスもあったんだが、どうもその女性ではないようだ」

「そうなの？」

「なにやらプロバイダを追えない不思議なアクセスがあるんだ、このサイトには」

「誰がアクセスしたか分からないよう細工されてるってこと？」

「ああ。巧妙な手口で追えないようになっている。恐らくそれがリディアという女性のものだと思うが……」

流石あのセレンが恐ろしいというだけのことはあるなと勇太は思った。

「いったい何者なんだ？」

「僕もよく分からないけど、様々な商品の仲介業をしているかたわらで投資家をしている大金持ちらしいよ」

「仲介業で投資家か。どうせリディアという名とは異なる名前で行事しているのだろうか、それだけだと絞り込めそうにないな」

「そっか……」

父親は紙をもう一枚差し出してきた。

「ところで、これはお前に言われて痴漢冤罪犯の女が焼死した現場を探した結果、見つかったものだ」

紙は写真の刷り出しだった。アルカの文が書かれている。

dcqolbolf dclen piseucfacz

「勇太、それがなんて書いてあるのか分かるか」

「mirokbolt milen rajevitdiz。rajは痴漢で evitは間違ったという意味。dizは罪。つまり『痴漢冤罪』という意味だよ。この文は『痴漢冤罪が原因の天誅』と読める」

「ふむ……やはりお前が昨日予想した通りか」

「アルカが一連のテロに関係していることは納得できた？」

「認めざるをえないようだな」

「だけど、どうせまだセレンさんが犯人かは確信できてないでしょ？ アルカユーザーは国内だけでも何百人といるからね」

「いや、もう確信が持てた」

「え？」

意外そうな顔を返す勇太。

「そのセレンという男の氏名が紙に書いてあるだろう。それが発端だった」

「どういうこと？」

「その男、つい先日殺人事件の重要参考人として警察にマークされていたんだよ」

「え……？」

「セレンという名のせいで気付かなかったが、元妻の殺人容疑で重要参考人扱いを受けていたんだ」

「どういうこと？」

元妻というと蛍のことか。セレンが蛍を殺害？

「先月、6月27日に31歳のシングルマザーが刺殺された。凶器はナイフで、何箇所も刺されており、犯人は未だ不明」

「あっ」勇太は口を押さえた。「そのニュース、知ってる。こないだネットの記事で読んだ。え……、あれが蛍さんだったの？」

「蛍？ いや、被害者の名前はこれだ」

そういうと被害者の写真や住所氏名年齢などが書かれた紙を見せてきた。

「ああ、いや、蛍さんっていうのはセレンさんが元の奥さんと呼ぶときの仮名なんだ。

そうか……蛍さん、亡くなってたんだ」

勇太はふと首を傾げる。

「でもなんでセレンさん、逮捕されなかったの？」

「アリバイがあったからだ。犯行時刻、その男は職場にいた。第三者による証言がある」

「なるほど……」

「ところがな、不思議なことに凶器のナイフにはその男の指紋が付いていたんだ」

「じゃあやっぱりセレンさんが刺したの？」

「だが時間的に考えて不可能なんだ。だから重要参考人としてしょっ引くことができなかった。結局警察としては男のナイフを奪った別の誰かによる犯行と判断した」

「なんか……きな臭いね」

「だろう？ 父さんもそう思った。だから今日鑑識に行って凶器を調べさせてもらった。すると面白いものを見つけた」

父親は別の紙を差し出した。勇太は目を凝らすと、「あっ！」と驚いた。

「ナイフの柄にアルカが書いてある！」

「そうなんだ。下の図は文を拡大したものなんだが、お前読めるか」

そこにはこう書いてあった。

in ilu lclhc fc, fjeffi.

思わずゴクリと唾を飲み込んでしまった。

幻日辞典で調べることなく意味が分かってしまう自分が怖かった。

「父さん……。犯人はセレンさんだよ。これは an aaxa xiliti ti, tsetta って読むんだ」

「意味は？」

勇太は一拍置いてから静かに答えた。

「——俺は絶対にお前を許さない、裏切り者」

父親は硬直した。微かに紙を持つ手が震える。

「なあ勇太、彼がなぜ妻と離婚したのかについては知ってるのか？」

「分からない。セレンさんのことは8年見てるし、たびたび蛍さんは話題に上るけど、離婚の原因についてはあまり語りたがらないんだ」

「彼は妻を裏切り者と呼んでいるな。かなり根深い恨みがあったようだ」

「どういう原因かは知らないけど、経緯は知ってる。2005年12月19日の月曜日だったと思う。朝起きたら蛍さんがいなくなってたんだ。家出ってやつ。

セレンさんはいつもどおり蛍さんが会社に行ったものと思い、自分も仕事に出かけた。ただ夜になっても帰ってこない。電話にも出ない。

事件に巻き込まれたんじゃないかと思って警察にも行ったそうだよ。ただ後から蛍さんが自分の意思で家出したってことを知ったんだ。

「蛍さんは別れたって切り出したそうだよ」

「彼は彼女に未練があったのか？」

「未練というか……。僕が彼を見てる感じだと、裏切って出ていった後の蛍さんの態度の悪さに激高していたという感じかな。後悔はそれなりにしている様子だったけど、どちらかというと裏切った後の蛍さんの態度が許せないという感じだった。

離婚自体は仕方ないと思っていたみたいだよ。セレンさんとしては、相性があまり良くないから最後のほうは蛍さんをあまり愛していなかったみたい」

「つまり彼はずっと相手の態度の悪さを根に持っていたのか。しかし勇太、なぜそんなに彼について詳しいんだ？」

「セレンさんは自叙伝みたいな私小説を書くことがあってね。明らかに自分がモデルだっていう話を赤裸々に書くんだった。それを読んで知ったんだ。

いつだったか、蛍さんを恨んで刺し殺すという内容の小説を書いたことがあったよ」

「つまり 2005 年のときからずっと殺意を抱いていたわけか。執念深い男だな」

「うん、それはもう。人工言語界でも彼の執念深さは有名だから。絶対に怒らせてはいけないタイプっていう感じの人だよ」

「そうか。しかし離婚自体は納得されているのに、それでも刺し殺されるほど恨みを買うとは、いったい元妻は家出後にどんな態度を取ったんだろう」

「だよねえ……」

「それにしても、そういう執着心の強い人間は得てして殺す日や場所や時間などにもこだわりを見せるものだが……」

「えっと、確か蛍さんが殺されたのって 2013 年 6 月 27 日でしょ。ちょっと待つてね」

勇太はパソコンの中身を検索し、過去ログを漁る。15 分ほど調べると、探しものが見つかった。

「あった。セレンさんが蛍さんと付き合った日が 2003 年 6 月 27 日だね」

「つまり恋の始まりからちょうど 10 年経った日に、恋を終わらせたというわけか」

「2005 年から数えても 8 年。毎日毎日殺そう殺そうと思っていたんだろうね。来る日も来る日も 2500 日以上に渡って、裏切り者の蛍さんを殺してやろうと……」

ゾットとした。背筋が凍る。人をそれだけ恨み続け、その傍らであれだけ膨大なアルカの作業をしてきたのか。いったいどんな人生なんだ。

「セレンさんは執念深い人なんだ。蛍さんと付き合った 6 月 27 日、恋人のリディアさんの誕生日の 7 月 19 日、愛人のメルさんの誕生日の 11 月 30 日、蛍さんが出ていった 12 月 19 日には何らかの業績を残すことが多い。あと、子供の誕生日にも」

「業績？」

「新サイトを作ったり、新作を投稿したりと、色々だね。特に 12 月 19 日は彼にとって特別なようだよ。毎年精神が不安定になるから、見てるこっちもヒヤヒヤする。

僕からすれば、この日に新しいイベントを作ることで魔の 12 月 19 日乗り越えようとしているように見える」

父親は袖に載ったセレンの写真を見やる。

「このハンサムがそこまでの粘着質だとはな。恋人や愛人がいて家庭もあるのに、まだ昔の女を引きずっているのか。意外だな」

「意外だね。父さんもそう思う？」

「女の目線にはなれんが、ぱっと見、女にモテるタイプだろう。この顔だしな」

「だけど本人曰く、そんなにモテないそうだよ。性格に難があるとかなんとか。あと、そもそも女があまり好きじゃないらしい。大和撫子みたいなタイプが好きなんだって。今の日本じゃ望むべくもないから……」

「まあ、日常生活でセレン＝アルバザードなどという訳の分からん偽名を名乗り、アルカなどというよく分からん趣味にハマっている変人など、そうモテはせんかもしれんな。

しかしこの本も本名で出していないのか。見たところ学術書の類のようだが、学術書をペンネームで出すなど、いかにも世間から相手にされなそうだな」

「何言ってるんだよ。ザメンホフやイエフダーだって自分の人工言語を使った名前だぜ」

「ザメンホフ？」と首を傾げた瞬間、父親は「うぐっ」と言って胸を押さえる。

「父さん……？」

「む……胸が……」

苦悶の表情を浮かべると、そのまま父親はドサッと床に倒れ込んだ。

「父さん？ ……おい、父さん！」

父親は胸を押さえてうずくまっている。

——心臓発作だ。

勇太は部屋を飛び出し、救急車を呼んだ。

こういうときはケータイより家電のほうが良い。

急いで救急車を呼び、電話を切る。母たちが何事かと慌てだす。

だが、部屋に戻ると父親は既に動かなくなっていた。

「父さん……」

勇太は呆然と立ち尽くした。

父親が病院に運ばれたとき、既に彼は事切れていた。

病院の長椅子で母と姉と妹が泣きはらしている。

勇太は病院のロビーを出ると、真っ暗な空を見上げた。

父親の死因は心臓発作だった。

だが勇太は本当の死因を知っていた。

真の死因は、セレンという名を偽名と呼び、戸籍名を本名扱いしたことだ。

新世界の神であるセレンの名を穢した。それが万死に値する罪なのだ。

勇太は呆然と空を見上げていた。

やがて思い立つと、ケータイのフリーメールでセレンにメールを書きだした。

セレンさん

一昨日はありがとうございました。

昨日、公安の父に貴方のことを話し、貴方の身辺調査を依頼しました。

今日、結果が出ました。貴方の住所氏名年齢からプロバイダに至るまで判明しました。

警察はもう貴方をマークしました。

貴方が蛍さんを殺したことも把握しています。

もう逃げられませんよ。警察は幻日辞典の効力を認めるでしょう。

ときに、その話をしている途中で父が心臓発作で倒れました。

今さっき、父の死亡を確認しました。

死因はセレンさんの名前を偽名と罵ったことだと思われます。

ひとつお聞きしたい。

そのように世界を定義したのですか。

水月勇太

そのまま勇太はロビー外のコンクリの上に寝転がって、ただひたすら暗闇の雲を眺めていた。

30分ほどしたころだろうか、セレンから返信があった。

水月さん

お父さんの件は残念でした。

リディアの放った間者から聞き及んでおります。

定義に関しては仰るとおりです。

はい、僕の名を貶める者はこの世に必要ありません。

僕の名前はセレン＝アルバザードです。

seren arbazard

2013年7月10日(水)午前2時

セレンの名前で人工言語掲示板に書き込みがなされた。勇太はケータイで確認する。

名前：seren ◆Irq7AFcfv2 投稿日：2013/07/10(水)02:04:01

今起こっている一連のテロの正体は僕です。

幻日辞典に書かれたアルバザードの正義に逆らう者は一様に人誅を下されます。

現場にはアルカの呪文が残されます。

相模大野、東久留米、目白、法政大学に残された呪文を skydrive にアップしておきます。

呪文は犯行声明文として残しましたが、愚鈍な警察やマスコミはアルカを無視しました。

本当に愚かな連中ですね。こんなにもあからさまに犯行声明文を出しているのに。

唯一、とあるアルカのユーザーさんが僕が犯人であることを突き止めました。

今後、彼の動向に注目してください。

少しすると2ちゃんねるにもスレッドが立てられた。誰が立てたのかは分からない。

勇太は病院の棟内に戻ると、泣いている母親の肩を叩いた。

「ごめん、母さん。行かなきゃいけないところがあるんだ。できるだけお金をくれないか」

「行くって……どこに」

「父さんの仇を打ちに」

母親は訳が分からない様子だったが、勇太の真剣な顔を見て有り金を渡してくれた。姉も「使って」と言って路銀をくれた。

電車がないのでタクシーで家に帰る。

部屋に戻り、父親の遺した資料を集め、かばんに入れる。

セレンの住所を確認すると、待たせておいたタクシーに乗り、埼玉へ向かった。

明け方にセレンの家に着いた。灯りは点いていない。

勇太は家の玄関が見えるところに身を潜めた。かばんの底は二重にしてあり、下にはナイフが隠してあった。警察に職務質問されても見つからないように細工したのだ。

セレンは言っていた。いくら格闘技のできる自分でも奇襲には勝てないと。家から出てきたところを狙えば、さしものセレンでも倒すことができるだろう。

今日は平日だ。待っていれば仕事に出るはず。まだ明け方で、始発も出てるかどうかという時間帯だから、まだ出勤していないことは確かだ。

一時間、二時間が過ぎる。たいていベッドタウンから首都圏に通勤するなら7時台あたりが狙い目だろう。

しかし7時になっても8時になってもセレンは出てこなかった。

フレックスタイム制なのか？

だが10時を過ぎても誰一人出てこない。家族はいないのか。

ネットを見ると、ニュースでテロの正体が判明かとある。2ちゃんねるの書き込みがピックアップされているようだ。

セレンが証拠としてアップした画像は大きな反響を呼んだらしい。

ワンセグでテレビを見ると、朝のニュースでもアルカのことが報道されていた。

ちょうど昨日警察からリークがあり、マスコミもアルカの存在に気付いたようだ。警察からのリークがなければ、マスコミもここまで大々的には取り上げまい。

また、先日のセレンの言葉どおり、マスコミにはテロがあるたびにアルカでの犯行声明文が送られていたこともニュースで明らかとなった。マスコミは単なる悪戯と思ってこれまで取り上げてこなかったらしい。

テレビのニュースでは有識者たちがセレンがテロ本人ではないかという見方と、悪戯ではないかとの見方を示していた。

いずれにせよ、何も進展がなかった一連のテロ騒動の犯人を名乗る者が現れたことで、テレビは視聴率を稼げるほうを選んだということだ。

勇太はさらにセレンを待った。

早番や遅番のある仕事なら昼からの出勤もあるかもしれない。まだ出版社にいるのだとしたら、出版社は午後出勤があると聞き、午後に出るのも頷ける。

だが 12 時をすぎても出てくる気配はない。

昼の 2 時を回った。依然としてセレンは出てこない。

一方、2 ちゃんねると人工言語界は大騒ぎになっていた。

突然犯行を暴露したセレンに、みな度肝を抜かれた。

アルカのサイトはアクセスが集中し、サーバダウン。

オンライン幻日辞典も落ちていてアクセスできない。

人工言語掲示板もアクセス過多でサーバダウン。

2 ちゃんねるの掲示板と、そこからリンクされた youtube の動画でわかるアルカだけが見ることができた。

動画の再生回数は昨日まで数千回だったのに、なんと半日で 100 万アクセスを突破した。テレビで報道されたのがよほど効果的だったのだろう。

皮肉なものだ。セレンが何年と頑張って地道にアルカを広めても数百人から数千人程度にしかな認知されていなかったのに、犯罪に使ってマスコミを利用したとたん、一気にアルカの知名度はエスペラントの学習者に匹敵するレベルにまで達したのだから。

SNS を見ると、アルカユーザーの間では一様に混乱が広がっていた。

面白いことに、新参者ほどセレンが犯人ということに懐疑的だった。「セレンさんがそんなことをするとは思えない」とか「メリットがない」とか「テロを利用した広告では」といった意見が見られた。

対照的に、古参メンバーは「セレンさんならやりかねない」とか「リアルミロク革命w」といった発言をしていた。

テロを利用した広告ではないかという見方は 2 ちゃんねるでも見られたが、事件前日にアルカでの犯行予告がマスコミや警察に送られていたことがニュースで報じられたことが決定打となり、セレンが犯人という見方は受け入れられつつあった。

夕方になった。セレンは依然として出てこない。いくらなんでも一日中家に引きこもっているということはなかろう。それともニュースに臆して出てこれないのか。

「待てよ……あるいは」

不審に思った勇太は家に近寄って電気のメーターを見ると、円盤は少しも回転していなかった。ブレーカーごと切つてあるようだ。

「しまった！」

勇太は地団駄を踏んだ。

セレンは昨日の書き込みをした時点でとっくに行方をくらませていたのだ。

こんなところにもラチがあかない。勇太は家を離れた。入れ違いにマスコミ各社と思われる報道陣が押し寄せるのが見えた。

公安からセレンの住所がリークされたのだろう。さしずめ夕方のニュースの中継をするといったところか。

勇太はグーグルマップを使うと、最寄り駅へ向かった。

電車に乗り、座席に座る。ワンセグでテレビ中継を見る。

ちょうど先ほどの報道陣がセレンの家を中継していた。マイクを持った女性記者がセレンの家が不在であることを告げている。

それはちょうど女性記者がセレンの氏名に容疑者を付けた瞬間だった。その刹那、彼女の頭は電子レンジで加熱したトマトのようにボンッと弾けた。

一瞬間の後、スタッフとおぼしき人々の悲鳴が起こる。各局のカメラが即死した女性記者にカメラを向ける。日本では到底放送できないようなグロテスクな映像が生中継で全国に報道された。

「やめろやめろ、映すな！ まずいまずい！」など、スタッフの怒声が上がり、数十秒もしないうちに中継は切れ、スタジオに戻った。しかし司会者たちは呆然と立ち尽くしたまま、放送事故であるかのように何も言えないでいた。

ほどなくしてコメンテーターが掠れた声で発言を再開したが、混乱しているのか、取り留めのない内容だった。

それから10分ほどしてからだろうか、頭が爆発した女性記者の所属していたテレビ局宛てにFAXが届いたという緊急速報がなされた。

恐らく抗議の電話やFAXがたくさん殺到しているだろう。その中から選ばれたFAXとは何を意味するのか。勇太は首を捻ったが、その答えはすぐ分かることとなった。

司会者はスタッフから FAX を受け取ると、驚いた顔でスタッフの用意したスクリプトと送られてきた FAX を交互に見た。そして口を開く。

「えー、速報です。たった今、容疑者からと思われる FAX が届きました」

そして FAX をカメラに向ける。カメラは FAX の文面をクローズアップした。そこにはこう書いてあった。

マスコミのみなさん

僕はセレン=アルバザードと言います。

人工言語アルカの作者で、一連のテロの犯人です。

僕は幻日辞典を使って、世界の正義を思うがままに記述することができます。

魔法のような力を使い、異世界カルディアの正義をこの世界の正義として定義できるといことです。

その正義に逆らった者はみな mirokbolt（人誅）を受けます。

男性差別の女性専用車両しかり、高慢ちきな気違いフェミニスト然り、痴漢冤罪をでっち上げた女ども然り。

今、女性記者が爆発して亡くなったことと思います。その理由を下記に示しましょう。

li dcradbin jefif ye din li inlif den lel eejejf. pen inl den lel jepen iz jepen jin.

アルカが読める有識者は国内に数百といます。今後もっと増えることでしょう。

とりあえず今は彼らにこの文を解説してもらってください。

テレビで訴えかければ誰かしら協力してくれるでしょう。

今は幻日辞典がアクセス過多で利用できない状況になっているはずですが。

辞書なしでもこれを解説できる人間となると、数十人に絞られます。

彼らの協力を仰いでください。

今後、世界は異世界カルディアにある国家アルバザードの正義に従ってもらいます。
従わない者には等しく人誅が下ることでしょう。

次は東電の社員に人誅を下します。彼らは東日本大震災で大きな厄災をもたらしたにもかかわらず、ボーナスをもらっています。一般の民間企業でこのようなことが許されるのでしょうか。

しかし東電の社員には猶予を与えましょう。明日までに支給されたボーナスを返納するか、あるいは被災者に還元すれば、助命します。

では次の課題。

消えた年金問題。あれだけの問題を起こしておきながら犯人の名前も明らかにされず、適切な処分は下されませんでした。

犯人は明日以内に辞職してください。さもなければこの世から消えてもらいます。

今日はもう少し課題を出しておきましょう。

警察官による職務質問。あれは任意です。にもかかわらず、警察は協力を事実上強要します。断るとわらわら警官が集まってきて取り囲み、無理にでも協力させようとします。しつこく道を塞ぎ、逃がそうとしません。あれは違法です。任意ではなく実質強制です。そのような警察の権力の濫用を見逃していいものでしょうか。

職務質問は任意ですので、「拒否します」と言われた時点で何も言わずに警察官は撤退すること。明日からこれを守らなければ、その場で警察官には心臓麻痺を与えます。

スピード違反や一時停止違反のネズミ捕りを点数稼ぎの目的で行うのも禁止します。スピード違反や一時停止違反に関しては常にビデオで撮影し、証拠を取った上で切符を切ってください。

また、痴漢やDVは確たる証拠がない限り、逮捕したり立件したり女側の言い分を聞いてはいけません。女側の主張を無条件に通すなどという魔女裁判は許しません。

鉄道各社は1ヶ月以内に首都圏の全車両に監視カメラを設置してください。痴漢はそのカメラなどによる証拠がなければ男性を拘束できないようにします。

なお、飛び込み防止の柵を首都圏のすべての駅に2年以内に設置してください。これらが守られない場合は社屋を爆破します。

一方、主に女性に朗報です。今まで痴漢を行ったことのある人間の手首を明日付けで切り落としします。今後痴漢を行う者にも同じ罰を与えます。男性に対する痴漢も同様です。二度と我々は痴漢に怯えることがないでしょう。やがて監視カメラも必要なくなる時代が来ることでしょう。

なお、性犯罪者には明日付けで再犯ができないよう、性器を切除させていただきます。

次は政治家に対して。公約を守れない場合は適切な処分を下します。マニフェストと名を変えようが同じことです。票稼ぎに嘘をつくことは許しません。

一方、敵対勢力の公約を守らせまいと邪魔した者にも処分を下します。ヤクザのみなさんは気を付けてください。

ヤクザで思い出しましたが、ヤクザや不良やチーマーやギャル男やギャルといった汚い存在のみなさんは、今月中に足を洗って善良な市民に戻ってください。

犯罪はもちろん、汚い言葉遣いや派手なデコやメイクやファッション、親や教師への反抗、大人に対する舐めた態度、家出や麻薬や犯罪などはみな処分を受けます。ただし麻薬に関しては、疼痛治療や麻酔等の目的であれば免除します。

命が惜しければ、アルバザードの yunk や milia や mayu や arden や yuul や pikko などといった人種になるよう、努力してください。

なお、売春はアルバザードでは合法ですので、援交などは合法とします。これを取り締まる警察には処分を下します。

年齢が何歳であっても両者合意の上ならセックスしても構いません。ただしアルバザードでは処女性が尊ばれるので、処女のみなさんは結婚まで大事に取っておいてください。

とまあ最初はこんなものですが、今後、僕の指示はマスコミに送ります。マスコミは僕が書いたとおりに指示書を報道してください。それができないのならば担当者を爆破します。

僕の言葉を信じない愚かな人間が明日大勢亡くなることでしょう。起こったアルカ関連の事件は包み隠さず報道してください。偏向報道をしたら責任者の首を飛ばします。

念のため言っておきます。僕はアルカに気付いてはしかなかったけど、アルカ自体を広めようとは思っていません。日本語が通じる間柄では日本語を使えばいいのです。面倒くさいからね。

今後は主に日本語を使って指示を出します。ただ途中でアルカが混ざるかもしれません。僕はふだんアルカを使って生活しているので。その場合は有識者に問い合わせるなどしてください。

ときに、世間では僕の活動をテロと呼んでいるようですが、できれば革命と呼んでほしいところです。

僕の革命はミロク革命のようなものです。ミロクは人名ですが、神という意味もあります。神による革命なので、一連のテロ騒動は今後ミロク革命と呼ぶようにしてください。

幻日辞典はアルカの辞書という意味なので、世界の正義を書き換える機能を持った書物として呼ぶ場合は、そうですね、さしずめ『セレンの書』とも呼んでください。

なお、僕の目的はこの腐った現代日本社会を革命することです。

この国は問題が多すぎです。誰かが正義の名の下に変えなければならない。

僕はしががない人工言語屋で、学者で、芸術家です。

しかし力を与えられました。神の鉄槌を下す力を。

僕は理想郷を作り、新世界の神となります。

以上。

FAX はそこで終わっていた。司会者は言葉を続ける。

「どうやらこの FAX は埼玉県川越市のコンビニから送信された模様です」

テロップにテレビ局の FAX 番号と電話番号が映しだされ、アルカ文解読の協力が求められた。

「la minfoman setat yu man la anxat men lex eesest. ren anx men lex seren az seren san.か……」

勇太は石神井公園駅で降りると、テレビ局に FAX を送った。FAX を送ると勇太はそそくさとコンビニを出て、電車に乗った。

5分ほどすると、スタジオがざわついて司会者のもとにスタッフが駆け寄っていった。

勇太には自分が今ニュースを動かしているという実感があった。なんだか少し面白く感じられた。

きっとセレンの感じている小気味よさはこの比ではないだろう。なにせ今までずっと世間から目を向けられていなかったのだから。無知蒙昧な愚民どもに対する復讐を果たし、さぞかし悦に入っていることだろう。

「速報です。匿名の方から人工言語アルカの翻訳文が届きました」

司会者が勇太の FAX を読み上げる。

くだんのアルカ文 (幻文) について。

くだんの文は

la minfoman setat yu man la anxat men lex eesest. ren anx men lex seren az seren san.

と読めます。カタカナにすると

ラ ミンフォマン セタット ユ マン ラー アンシャット メン レッシュ エエ
スエスト。レン アンシュ メン レッシュ セレン アズ セレン サン。

と読めます。意味は

かの女性記者は僕を戸籍名で呼んだため死亡しました。僕のことはセレンかセレンさんと呼んでください。

という意味です。

匿名希望より。

「——以上です。なお、このFAXは、東京都練馬区石神井町三丁目付近のコンビニから送信されたものと思われます」

早く現場を去って正解だった。防犯カメラに自分の顔が映る可能性を考慮して、顔は隠してある。

マスコミは早々に石神井公園へ駆けつけるだろう。

マスコミもネットもそれまではセレンの戸籍名を使って報道していたが、このテロによって恐慌に陥り、以降は彼のことをセレン容疑者と呼ぶことに改めた。

「速報です。セレン容疑者のFAXは埼玉県川越市の川越駅付近にあるクリアモールにあるコンビニから送信されたものと判明しました。現場に中継が繋がっています」

画面に川越が映し出される。明らかに外観からしてセブンイレブンだった。

「はい、こちら川越のクリアモール内のコンビニです。セレン容疑者がFAXを送信したと思われる店舗です」

インタビューで店長が答えていたが、特に怪しい人物はいなかったと答えている。

続いて防犯カメラの様子が映し出される。セレンがFAXを送っている様子が映しだされている。

彼は送信待ちの間、挑戦的な笑みを浮かべて防犯カメラを見つめていた。

ケータイで2ちゃんねるの実況版を見る。物凄いスレの勢いだ。

セレンの顔が画面に映ると、掲示板には「革命家、テライケメンw」などの書き込みが相次いだ。

恐らくセレンはもう川越にはまい。防犯カメラに顔を露出したということは、全国ネットで放送されることを知っての上だろう。

となると今後公共交通機関などは利用しないものと思われる。車を持っているかは分からないが、ナンバーは警察が控えているから、車で悠長に移動していたら間違いなくNシステムに引っかかる。となると車もない。

移動手段がないとなると、どこかアジトのようなところに隠れていると推測される。だがそこがどこかはまるで見当がつかない。

警察もマスコミも政府すらも敵に回した。たった一人の力でだ。

まるでアルバザードのミロクそのものだ。

ただ、彼はミロクと違って銃弾から身を守るような魔法は使えない。

彼ができるのは単に世界の正義を規定することだけだ。

警察や自衛隊が彼を発見すれば、即座に彼は捕らえられるか撃ち殺されるだろう。

勇太は虚空を見つめて呟いた。

「セレンさん……いくらなんでもやりすぎです。勝算はあるんですか……？」

勇太は家路へと着いた。母親たちにはアルカに関わっていることを隠しておくことにした。父親のこともあるので気付いているかもしれないが、下手に巻き込みたくない。

2013年7月11日(木)午後10時

その日は一日中テレビが、いや日本中がミロク革命の話で持ちきりだった。

勇太は朝、駅でJapan Timesを買ったが、海外でもミロク革命のことは大々的に報道されていた。

動画で分かるアルカは英語のアノテーションが付いているし、アルカのサイトは英訳されているから、アクセスはうなぎ登りだった。

もっともアルカの公式サイトは依然としてサーバーがダウンしているが、youtubeはダウンしていないので、動画で分かるアルカの再生回数はあつという間に1000万ビューを獲得した。

この日の報道は凄まじかった。

まず「ミロク革命」という用語を使わず、「セレン容疑者によるテロ活動」という用語を用いたNHKのアナウンサーの頭が中継の最中に爆発し、死亡。

これによりNHKを含んだ民放各社が一連のテロ活動をミロク革命として報道することにした。

すっかり怯えたマスコミは、ありのままに起こった事件を報道した。偏向報道をすれば殺されるからだ。

東電の社員の一部がセレンの言葉を信じず、ボーナスを返納しなかったため、爆死。

消えた年金問題の関係者と思われる公務員の数名が焼死。

職務質問を無理に行おうとした警官が心臓麻痺で死亡。

女性に過度に有利な判決を出した裁判官の身体が、馬車で引き千切られたかのように四方八方に飛び散って死亡。

そして何万人という男性の手首が切り落とされたとのこと。

また、泌尿器科や救急病院には性器を切除された男性が何千何万という単位で詰めかけたとのことだった。

ネットではセレンに対するアンチの声と、擁護の声が上がった。どちらかというアンチは死を恐れて少なめで、擁護の側はすっかりセレンを新世界の神と崇めているかのようだった。

アルカ関連のサイトは有志によりミラーサイトがいくつも作られ、各国語への翻訳も始まった。

オンライン幻日辞典もミラーが複数作られ、ようやく閲覧できる状態になった。いま世界で一番多く引かれている辞書だろう。セレンはどんな気持ちでいるのだろうか。

はじめはセレンを神と崇めてセレン教なる宗教ができつつあったが、アルカを勉強した者たちによって、アルバザードにはアルティス教という宗教があると分かると、すぐさま彼らはアルティス教徒になった。異世界において、革命家ミロクはアルティス教の敬虔な信者だったという。

2013年7月19日(金)午後8時

人工言語掲示板にセレンによる書き込みがなされた。

掲示板は長大な文章はひとつのレスで打てないようになっているので、記事はいくつかに分けて投稿された。勇太は最初の記事の投稿日だけコピーし、ほかの記事は本文だけコピーして EmEditor で保存した。

名前：seren ◆Irq7AFcfv2 投稿日：2013/07/12(水)20:02:04

こんばんは。セレンです。

これだけ世間で騒がれているので、掲示板のトリップ程度なら、コンピュータに詳しい人によってもう看破されていることでしょう。

今後僕のトリップを使って僕の名を騙る者が出てくるものと思われます。

僕の名を騙る者には爆死してもらいますので、ご注意ください。

どこの国の人間だろうと同様です。この文章はどうせ有志によって訳されるでしょうから、僕は気楽に日本語で書いておきます。

日本人の金融資産の8割は60歳以上の方が保有しています。この層は30代に比べ、金を使いません。子供がいて住宅ローンを組む30代などの若手に金を回さなければ経済は循環しません。

よって、資産が5000万円を超える者は、1年以内に子供世代に無税で贈与してください。政府はそれを認めてください。

贈与できる相手がいなければ国に税金として支払ってください。国はその金を貧困世帯に所得に応じて分配してください。

どうせ贈与するくらいなら使っしまえという考えは認めません。

消費税は変動税率にします。日用品などには5%まで、贅沢品や嗜好品には最大500%までかけて構いません。特にタバコは税率を上げ、500%にして構いません。

ワークシェアリングを導入し、ブラック企業を改善します。一日8時間以上労働者を働かせる事業主には洩れなく失血死してもらいます。

足りない人員はニートなどを積極雇用することで補ってください。一度就職戦線のレールから外れた人間が社会に復帰できない世の中は間違っています。

人員が増えた分、人件費が増えると思います。事業主や役員や管理職等の給与は非正規労働者の120%までに抑えてください。また、彼らの資産も最大5000万円（住宅や土地の時価なども入れた上です）、最低非正規労働者の120%にまで落としてください。

それでも人件費が賄えない場合にのみ、減給を許可します。

一部の持っ者が持たざる者から搾取をしないかぎり、一億総中流の時代は戻ってきます。

女性のアファーマティブ採用は禁止します。

有能な女性が第一線で総合職に就くのは認めますが、一般の女性は家庭を支えるか、花嫁修業をするか、パートに出て4時間程度働くようにしてください。

結果的に男性の雇用が増え、ニートは減ります。なお、花嫁修業中の女性はニートから外します。

女性はわがままを言っていないで、自分の背丈に見合った男性と結婚し、子供を作ってください。男性は家庭を養ってください。

結婚相談所は成婚時にのみ仲介手数料を受け取る形に変えます。現在のやり方では胴元ばかりが儲け、成婚率が低いからです。無駄なお見合いパーティーなどはなくなることでしょう。

子供は父親を尊敬し、母親を愛してください。父親を汚物扱いするような娘は万死に値します。未成年は年長者に対する口の聞き方をわきまえてください。

最近是我慢ができない女性が増えています。簡単に家に戻り、離婚をし、シングルマザーを増やし、片親の子供を増やす。父親のいない子供が不憫です。

裁判所は問答無用で親権を母親に渡す。離婚裁判は女に都合よく働く。裁判が公平ではありません。このような女尊男卑な裁判は認めません。

女性はもっと我慢してください。男性はもっと女性を大事に扱ってあげてください。安易な離婚は罰します。

なお、シングルファザーに対する公的援助をシングルマザーと同等にしてください。女にばかり都合がいいのが現状です。

低学歴の人間ほど結婚と子作りが早く、高学歴ほど遅いという風潮があります。かえるの子はかえるですから、劣悪な遺伝子が早いサイクルで循環することで、日本全体の民度が落ちます。

結婚と子作りは20~30歳の間に行ってください。現在30歳を超えた人は速やかに結婚して子供を作ってください。このまま少子化が続き、できる子供はDQNの子ばかりということが続けば、日本は滅びます。

医師は訴訟を恐れず、義を持って産婦人科と小児科を増やしてください。また、救急患者のたらい回しも責任者の首を飛ばします。

DQNの子供が増えたせいでDQNネームも増えました。

子供には成人したら一度だけ改名できる権利を与えます。

年金支給額が25万円以上の世帯は、25万円以上の分を徴収します。年金が25万に満たない世帯に回します。

意図的なインフレやデフレを起こすことは許しません。

公務員の年収は前年の民間平均年収に合わせます。

民間の平均年収を300万円台に下げます。男性の所得は300万程度、女性は100万円程度とします。

最高所得は500万円とします。それ以上稼いだ場合は徴収し、貧困層に回します。

これにより、多くの国民は実家暮らしや結婚&共働きが必要になります。これにより核家族化を防ぎ、家族の絆を取り戻します。親の介護は親と同居して、できるだけ子供世代が見てください。

同一住居内での世帯分けは禁止します。

親と近場に住んでいる場合は同居してください。

世帯年収が 500 万を超えた場合は徴収し、貧困世帯に回します。家族が 5 人以上いる場合、一人につき 100 万ずつ世帯年収の上限幅を上げます。

企業は社内留保を吐き出し、非正規労働者をはじめとした貧困層の人件費に回してください。社内留保は何もなくても一年間会社を運営できる額を最大値とし、それ以上貯めこんではいけません。

犯罪者はアルバザードの法に抵触した時点でアルバザードの裁判による罰を即時与えますので、警察は市民の親切係として今後働いてください。横柄な態度は許しません。弁護士や検察や裁判官は今後、民事事件のみを扱います。

選挙制度を廃止します。政治家は廃止です。政治はアルバザードの政治をよく理解した官僚が直接行います。

つまり官僚は残すわけですが、天下りや利権争いなどの汚職をした場合は即時罰します。

スポーツ選手や芸能人など、所得の多い売れっ子について、500 万円以上の所得はすべて売れない選手や芸能人に回します。

だからといって、頑張らなくても金がもらえらると思っけて怠けるような者は罰します。

産地偽装や食材の使い回しや不衛生な環境での調理などは全て罰します。食品業界や外食業界は気を付けてください。

音楽や文章など、作品の著作権は廃止します。すべてをフリーコンテンツにします。金儲けのために物を作る必要はありません。本当に好きならアルカのように無償でも作れるはずです。

大作ゲームなどを作りたい場合は申請してください。通れば公的援助をします。ネトゲは依存度が高く廃人化の温床になるので、従来通りパッケージ売りを優先してください。

アニメやドラマにも公的援助をします。テレビ放送でなく、はなからネット上に公開し、いつでも見れるようにしてください。動画の最初に広告を挿入し、広告収入を得てください。それでも足りない分は公的援助を出します。

アニメやマンガなどのサブカルは日本が世界に誇れるコンテンツです。

著作権保護がなされなくとも、動画サイトでの広告収入や公的援助を受けて今後とも頑張るって制作し、輸出してください。

これだけ有名になったので黙っていてもされるでしょうが、『紫苑の書』のアニメ化を京アニさんあたり、ひとつよろしくお願いします。レインには花澤香菜さんあたりが、紫苑には皆口裕子さんあたりが合うと思います。声優さんはウチのサイトでアルカの発音を頑張ってください。

方言は不要なので廃止します。東京弁だけを使ってください。大阪弁キャラがいなくなってしまうのはもったいないし、漫才が標準語だけになるのは面白くありませんが、方言はなにかと不便なので。

日本語を国際語とします。アメリカなど諸外国は日本語を学習してください。

別にアルカはやらなくていいです。ご自由にどうぞ。

民度が低い人は即刻死んでもらいます。天網恢恢疎にして漏らさず。天はいつでも貴方の行いを見てますよ。

学問を何より優遇します。学問で身を立てない国はやがて滅びます。売れない学問だからといって冷遇するような態度は許しません。

売れないし賞賛を得られないけど頑張っている人たちこそが、売れてる俗物よりも高尚なのです。

学者は最低限の生活の保証がされ、毎年 200 万円が支給されます。

なんびとも大学に残って研究することができます。

ただし研究成果を毎年出さねば学者は続けられません。

男性は 172cm の 65kg を理想体型とし、女性は 160cm の 50kg を理想体型とします。

彼らが最もモテる容姿になります。

ただし異性を外見だけで判断することは許されません。

醜く生まれた者を笑う者には罰が下ります。

公娼制度を認めます。

本番ありで20分で4000円。そのうち女性の取り分は2000円とします。会話や浴場での過度な時間稼ぎは罰します。とっととセックスしてください。

娼婦の管理は自治体が行い、病気の娼婦は働けません。

性病の治療は自己負担0割でできます。

売春を利用した男性による浮気は恋人や奥さんから殴られる程度で許されますが、女性の浮気は死罪です。

一夫一婦制ですが、男性が愛人を持つのは許されます。

清貧を尊び、幻日辞典の害食にあるようなものの摂取はできるだけ控えてください。

お酒は子供でも少量なら飲んで構いません。

大人は酔いすぎないようにしてください。年に数回ハメを外す程度なら寛恕します。

男性は女性が反抗的なら手を上げて構いません。

女性は男性を上手く立て、利用し、手の平で転がしてください。

表では男性に威張らせておいて、裏では貴方がた女性が操ってください。男性は単純な生き物で、プライドさえ満たしてあげれば好んで操作されます。

くだらない俗悪なバラエティ番組などは量を減らします。ニュースやスポーツや教育的な番組を放送してください。たまには息抜きも必要なのでバラエティの全面廃止はしません。お笑いなどは頑張ってください。

今あるJ-POPのような俗悪な音楽は廃止します。BUMP OF CHICKENのような歌詞に意味のある音楽は許容します。アニソンはそのまま構いません。

絵画は新古典主義を至上のものとしします。

医療費が保険を圧迫しています。風邪などに比べ、癌などの大病にかかる医療費が莫大です。苦しめて生かす上、医療費ばかりがかさみます。非合理的です。

よって1年以内に安楽死施設を設立してください。薬物を飲むだけで苦しまずに死ぬるスイスのディグニタスのような施設です。自殺幇助罪は廃止します。安楽死施設は健常者でも何歳でも利用できます。

記者クラブは廃止します。

税金の使途はすべて透明化します。

建築業の談合は廃止します。

個人がペンネームでISBNを取得できるようにします。

個人出版を促します。

医師会、看護師会の力が強すぎます。弱めてください。

保険料は自己負担3割のままとします。

線維筋痛症など新しい病気や、新しい医療技術に積極的に保険を適用してください。

鍼灸と柔道整復師の保険適用範囲を広げてください。未病段階での体質改善が国民の利益になります。

介護士の所得を上げてください。

どのみち安楽死施設や同居のおかげで看護師と介護士の人手不足は緩和されるでしょう。

日教組は解体します。

モンスターペアレントや態度の悪い生徒は焼死します。

教師による体罰は可能です。度を過ぎた場合や聖職者にあるまじき行為を行ったものは焼死します。

クレマーは爆破します。

企業はお客様は神様の精神を捨て、客と店は対等な関係にあると思ってください。

一方、個人は企業よりも本質的に弱い存在なので、企業側が高慢な態度に出たり消費者を騙すようなことがあれば担当者を焼き殺します。

マネーゲームを制限します。原油や食糧価格を過度に釣り上げるなどして市民生活に大きな影響を与えるレベルのマネーゲームは禁止します。お金は愚直に働いて稼ぎなさい。

真面目に働かない者は絞首刑にします。

これだけ働ける環境を整えておきながらお働かないニートは処罰します。

ただし働けないだけの疾病がある場合は免除します。

コミュニケーション障害の人には国が責任をもって内職など、人と接しない、彼に向けた仕事を斡旋してください。

産業の空洞化を抑制します。なるべく国内で生産してください。

レディースデーなどの男性差別は廃止します。

人権擁護法案は棄却します。

児童ポルノ法は破棄します。あんなもの、何歳であろうと買う方と売る方の双方が合意していればよろしい。

出版社はすみやかに既存の書籍を電子書籍化し、本文を検索できるようにしてください。絶版本や雑誌もです。ベーシックマガジン（ベーマガ）とか、久々に読みたいじゃないですか。

くだらない利権にしがみついていたら社屋ごと吹き飛ばします。

電子書籍は本来一冊 100 円程度で販売できます。やってください。

潰れた版元の書籍の電子書籍化は国会図書館の役割とします。

学会誌や論文や辞書は国がタダで買い上げ、自由にネットで閲覧できるようにします。

電子産業は、4年以内に非発光式の画面で四つ折りできる端末を作って流通させてください。

端末のOSにはwindowsを入れ、デスクトップPCと同じ程度に快適な動作を保証してください。appleは要りません。microsoftと合併してください。

詳しくは幻日 leizen をご参照ください。

国民全員にIDを付け、腕時計型の電子端末アンセを付けさせます。

詳しくは幻日 anse をご参照ください。

電子マネーを普及させます。

世界各地でアンセを使った電子マネーでの支払いが可能になります。

電車もアンセの情報を自動で読み取り、改札のアーチをくぐるだけで課金されるシステムを作ってください。バスも同様です。オムロンあたりが頑張ってください。

途上国は一人っ子政策を実施します。第二子以降は死産させます。

日本は食料自給率を上げてください。TPPは入らなくて結構。

和食中心の生活に戻しましょう。

養子縁組の敷居を下げます。途上国などから自由に子供を連れ帰って養子とすることができます。子供には国籍も与えます。

2ちゃんねるのような匿名掲示板は残しますが、他人をむやみに誹謗中傷した場合は処罰します。

国が wikipedia と wikitionary を税金で運営してください。記者は一般人ではなく、召喚省の辞書庁の役人が行います。これが文系の花形職となります。

ただしアルバザードの diaklel と同じく、採録する単語はこの世に存在する全ての単語です。載せる載せないの判断はありません。あまねく全ての言葉をありのままに蒐集しなさい。

ある単語が必要ないとか判断するのは編集者の仕事ではありません。辞書というのは調べたいと思った言葉が載っていないければ意味がないのです。だから全ての言葉を収録してください。

wikipedia と wikitionary は diaklel と名を変えます。ディアクレールの制作に精を出してください。

以上は日本以外の先進国にも適応されます。

ときに、これはスクウェア・エニックスに対する個人的なお願いなのですが、Final Fantasy 4 を PS4 の能力を最大限活かしてできるだけリアルな映像でリメイクしていただけますか。期間は4年とします。ソニーはそれまでに PS4 を発売してください。

このゲームがなければアルカは存在しませんでした。この革命もありませんでした。個人的にお願いします。

この革命で得た税金の中から 10 兆円を資金として回します。ふんだんに資源を使って最高のリメイクをしてください。満足行く内容であれば、残った資金は特別に社内留保として保持して構いません。

今日 7 月 19 日を革命記念日とし、世界中で祭日とします。

なお、この内容はマスコミ各社に郵送済みです。

以上。

「マジかよ……」

勇太はパソコンチェアに背中を預けた。

「完全なディストピアだ……。いや、人によっては理想郷なのかもしれないが」

法外な要求ばかりだった。だが、国民もマスコミも政府も彼の要求を飲むだろう。飲まねば死ぬだけだ。結局飲む人間だけが生き残るので、彼の要求は 100% 通ることになる。最悪な出来レースだ。

「ミロク以上の淘汰じゃないか、これ……。いったい何億人の人間が人誅を食らうんだ」
人類が反省して彼の正義に従うまで、どれだけの犠牲者が出ることだろう。
もはや世界はアルバザードの正義感に即して生きていくしかないのだ。

ネットを見ると、名指しで言われた社名や団体名が話題が盛り上がっていた。BUMP OF CHICKEN やスクウェア・エニックスなどは物凄い勢いで話題に上っていた。

早速 BUMP OF CHICKEN の公式サイトにはミロク革命と無関係である旨が書かれ、その一方でセレンの怒りを買わないよう、名指しで評価されたことには素直に喜ぶとの旨が書いてあった。

スクウェア・エニックスも数日のうちには何らかの動きを見せるだろう。いずれにせよ、翌週月曜日の前場は一瞬にしてストップ高で間違いない。

なにせ神様から直々の供物の要求だ。支給額も 10 兆円と桁外れ。間違いなく世界一のゲーム会社になるだろう。株価はしばらくうなぎ登りになるだろう。

「それにしても 7 月 19 日の午後 8 時か。ちょうどセレンさんがリディアさんに出会ったのが 1991 年の 7 月 19 日の午後 8 時だというから、それに合わせてきたんだな」

かつてセレンがネットで言っていたが、リディアは 1984 年 7 月 19 日の午後 8 時に生まれたそうだ。それで午後 8 時という時間を神聖視しているようだ。

8:30 になると、緊急報道番組が流れ、セレンの発表した文章が公開された。

10 時になると速報が入り、セレンが記事を投稿した場所が明らかになった。

場所は静岡県静岡市清水区興津東町にある「クア・アンド・ホテル 駿河健康ランド」。

フロントから見て左手にあるパソコンから投稿したものらしい。

マスコミや警察はセレンの車やバイクのナンバーを紹介し、防犯カメラにそれらしきものが映っていないかを確認した。しかしホテルやそこに至るまでの街道には何も手がかりとなるものが映っていなかった。

セレンはケータイを切っているようで、GPS から居場所を突き止めることもできなかった。

マスコミや警察はホテルにセレンらしき顔の人物が泊まったかどうか調べてもらったが、答えはNO。

実はホテルのネットは入ってきた者なら誰でも使うことができる。従業員はいちいち宿泊客の顔を覚えていないし、ここはただのホテルでなく健康ランドでもあるので、泊まりでない客も利用する。

だから客のふりをして上がりこみ、何くわぬ顔でネットを使うことができるのだ。もっとも、セレンがネットを利用したのは夜8時だから、泊まり客だと勘違いさせたのだろう。

防犯カメラにはネットを使うセレンの姿が映っていた。

セレンはリュックを背負っていた。

ネットを使い終わったセレンはホテルを出ていった。その後、街道や街道沿いの店の防犯カメラにはセレンと同じ服装の人物は映っていなかったし、セレンの車やバイクも映っていなかった。

マスコミはセレンが魔法を使って移動したのではないかなどと混乱した発言をしていた。もはやセレンは魔導師としてのイメージが強いらしい。無理もないことだ。

だが勇太はセレンの魂胆が見えていた。

セレンの移動手段は常識はずれだ。恐らくその方法は自転車。誰が埼玉から静岡の興津まで箱根の山を越えて自転車で行くなどと考えるだろうか。

しかしセレンは静岡どころか京都まで自転車で行く脚力の持ち主だ。静岡くらい容易く行ける。どうりでNシステムにも引っかからないわけだ。

では街道にセレンの服装をした者が映っていない理由は？ 答えは簡単。リュックの中に着替えが入っているからだ。

カメラのあるホテルでは服を着替え、ホテルを出たら着替えて自転車にまたがる。こうすれば誰にも気付かれることなく移動できる。

勇太はテレビ局にFAXを送った。

セレンの移動手段やその手口についてだ。

セレンは埼玉から静岡まで恐らく箱根を経由して、国道1号沿いに移動している。

埼玉から箱根まで移動している自転車が街道沿いの店舗の防犯カメラに断続的に写っているはずだと指摘した。

セレンの自転車さえ分かれば、足取りは掴みやすい。

11時になると勇太のFAXが紹介された。前回アルカ文を解読して送った者だという署名を入れたためか、すんなり紹介された。

前回アルカ文を解読した者を騙る人間がいるかと思ったが、意外といなかった。誰もがミロク革命を恐れ、民度の低いことをしないようにしているようだ。

何をしたらアルバザードの正義に触れて殺されるか分からない。空き缶のポイ捨てですら罰を食らうかも分からない。皆、必然的に模範的な行動しか取れなくなっているのだろう。

ただ、今から街道沿いのすべての自転車を調べても遅いかもしれない。

セレンは途中で自転車を乗り捨てて別の自転車に乗り換えている可能性もある。

それに、そもそもセレンの脚力ならわずか1日で静岡から埼玉まで行けるだろう。今から警察に調べさせたところでまた埼玉に戻るか、あるいは愛知あたりにまで足を伸ばすことができる。

それでも何もしないよりはマシだった。

ネットを見ると、セレンの脚力に驚いた書き込みが何件もなされていた。

みな、セレンのことを学者のようなイメージで描いていたせいとか、体力がスポーツ選手並みに高いことを知って驚いたようだ。

この上格闘技も弓も刀も銃も扱えると知ったらどうなるだろう。並々ならぬ武力を持ち合わせていると知ったら、新興宗教のアルティス教徒たちはますますセレンを神格化することだろう。

2013年12月19日(木) 午前6時

セレンは巧妙に姿をくらませ、警察もマスコミもその足取りを追えないでいた。

彼の用心深さと周到さは並大抵のものではなかった。

また、セレンと思われる人物を見つけたところで、警察はすでに職務質問を拒否された場合すごすごと退散しなければいけないルールになっていたので、セレンだと特定することができなかった。これもセレンが逃げおおせた理由のひとつだろう。

たった半年にも満たない間に、世界では何億という人がミロク革命で命を落とした。

セレンを崇拝するアルティス教徒は日増しに増え、アルカの知名度や学習者はセレンの意思に反して急増した。

敬虔なアルティス教徒らに言わせると、何億人もの犠牲者は崇高な正義に逆らったため当然の天罰を下されたという解釈らしい。

『紫苑の書』はアニメ化され、セレンがノミネートした声優陣で放送された。

空前絶後の視聴率だった。勇太はアルカのファンとして純粹に楽しませてもらった。

特典版ブルーレイディスクもよく売れたようだ。

アニメは世界の各国語に翻訳された。また、『紫苑の書』の原作やマンガが各国語版に翻訳されて発売された。

映画化まで決まり、紫苑役には石原さとみ、レイン役には新人のハーフの可愛い女の子が起用された。どうも役者の審査は裏でセレンが映画屋と連絡を取って行ったのではないかという噂が広がっていた。

セレンが書いた作品の総売上は、全体でハリーポッターを上回った。

スクウェア・エニックスの株価は予想通り高騰し、同社はセレンの言い分を全面的に採用した上で、ファイナルファンタジー4のリメイクを決定した。

ソニーの株価も高騰し、PS4の開発を間に合わせるよう約束した。

何もかもがセレンの思い通りになっている。

革命記念日に書かれたことはすべて現実化したか、あるいは現実化に向けて動いている。

革命記念日から半年ほど経った12月19日の朝。

この日、人工言語掲示板にセレンからの書き込みがなされた。

6時という、蛍がセレンの元を去ったとされる時刻だ。

名前：seren ◆Irq7AFcfv2 投稿日：2013/12/19(水)06:07:19

お久しぶりです。セレンです。

セレンの書の正義に従わない者が粛清され、住みやすい世の中になりましたね。

さて、僕はいま埼玉県上福岡市大原にいます。

とっくの昔にふじみ野市になりましたが、高校時代をここで過ごした僕にとっては、いつまでもここは思い出の上福岡市です。

リディアにミネストローネを作ってもらい、幼かったメルを遊びに連れてきた思い出深い上福のアパートは既になくなってしまいました。

アパートがあったところは今住宅が建っています。

自分の部屋があった空間には家が建っているのです。

先日僕は家主にセレンであることを告げ、相応の対価を払って、家を買いました。

清水病院からわずか50m以内にある一軒家です。

なぜ今になって僕が居場所を暴露したのでしょうか。

それは半年がかりでようやく暗殺を防ぐための魔法を習得したからです。

さて、警察や自衛隊のみなさん。

せつかくですからこのテロリストを捕まえてみませんか。

勝てると思うのなら、ね。

勇太はこの日を徹夜で迎えていた。

セレンのことだから12月19日のような思い出深い日に何か行動を起こすに違いないと考えていたからだ。

前回のメルの誕生日である11月30日には何も起こらなかったが、蛍が出ていった12月19日には行動を起こした。

セレンは蛍を殺した後もまだ彼女との思い出を引きずっているようだ。

7時になるとこの書き込みは速報として放送された。

8時には現地に報道陣が詰め寄せ、セレンのアジトと思われる住宅群にレンズが向けられた。

警察や自衛隊までもが出動し、物々しい雰囲気になっていた。

マスコミはやや遠巻きに警察や自衛隊を映していた。

現地の住民は恐れおののいて屋外に退避していた。自分の家がセレンのアジトと勘違いされて攻撃されてはたまらないからだ。

そうなるとう当然、一軒だけ住民が退避しない家が出てくることになる。そこがセレンの買い取ったアジトだ。

その家は脇道の左奥にある一戸建てで、周囲の住民の証言によると、90年代に確かにそこにアパートが建っていたそうだ。

警察は既にセレンの書き込みからIPアドレスを割り出し、IPアドレスから一軒の家を特定していた。

ネットの契約者はセレンがこの家を買った相手の名前そのままだったが、明らかに先ほどの書き込みはセレンの投稿と思われる。

セレンはこの家から堂々とネットに投稿したのだ。

警察はマイクでセレンに投降を命じた。

しかしその家屋からは何の反応もない。

警官は玄関に行くと、鍵をこじ開けようとした。

ところがその刹那、青い泡のような光が玄関の鍵を包んだ。警官の手は青い光に弾かれ、中に手を入れることができなくなった。

マスコミが一斉に「バリアのようなものが発生し、鍵を開けられないようです」と報道した。ニュースが真顔でバリアとか言っているのが滑稽だった。

警官は銃でバリアを撃ったが、銃弾は青い泡に埋もれるだけで、鍵には届かなかった。泡は広がると、警官を弾き飛ばして家全体を覆った。

マスコミが声を張り上げる。

「いま、青い光のようなものが家全体を包み込みました！」

自衛隊が前に出て、家に入ろうとする。

ところが一切光の中に入ることができない。

自衛隊は銃を構え、一斉射撃をした。

ところが銃弾はことごとく光に当たって消滅してしまった。

自衛隊が困惑した顔でざわつく。

すると一人の男性が玄関から出てきた。

アクアスキュータムのトレンチコートを着た男性だった。

周囲の人間がざわめく。

——セレンだった。

彼に続いて一人の少女が現れる。

……いや、よく見ると大人の女性だった。小柄で華奢なので中学生くらいに見えた。

亜麻色の髪、緑の瞳、小柄な身体。

勇太は画面の前でハッとした。

「——リディアさんだ……！」

来日してたのか。

それにしても若い。というか幼い。もう 29 歳のはずだが、中高生にしか見えない。中国人漫画家の夏達以上の童顔だ。

「セレン＝アルバザードだな！？」

自衛隊が声を張り上げる。

セレンはコクっと小さくお辞儀をした。

「あ、はい、そうです。おはようございます。朝からお疲れ様です。

ところで皆さん、住みよい世の中になりましたか？」

「両手を頭の後ろに当ててゆっくりこちらに歩いてくるんだ！」

怒声を浴びせる自衛隊。セレンは苦笑し、頭を掻く。

「うーん、なんで偉い人ってこう偉そうな態度なんだろうねえ……。」

こっちが丁寧語で話してるんだから、そっちも合わせるべきじゃないですか。

そもそも、それが人に物を頼む態度ですか」

「いいからこっちに来るんだ！」

「はぁ」とセレンはため息をつく。「僕、そういう偉そうな態度の人間って嫌いなんですよね。権力や武力を持った人間が偉そうにしちゃいかんです。実るほど頭を垂れる稲穂かくなっていうじゃないですか。それが分からない貴方はいない人間ってことですね」

セレンは小脇に抱えたノートPCをカタカタ打つ。すると怒声を浴びせた自衛隊の頭がパンと破裂した。場が騒然とする。

「はい、分かりましたか。日本語には丁寧語ってのがあるんですよ。人に物を頼むときの態度くらい心得ましょう」

その瞬間、別の自衛隊員が「撃てっ！」と言い放った。

轟音がして一斉射撃が始まる。

数十秒ほど続いただろうか。

やがて硝煙の中からセレンとリディアの変わらぬ姿が現れた。

彼らの身体は青い光に包まれていた。銃弾はすべてその光によってかき消されてしまった。

「ちょっと考えれば分かると思うんですが……」

セレンはコホコホと咳をした。

「こんなんで死ぬくらいなら、おめおめと出てくるはずがないでしょう？」

セレンが一步外に出る。自衛隊は思わずたじろぐ。

「あ、ちなみにこっちの子は僕の恋人で、リディアって言います。

メディアの前に現れるのは初めてですね。

ようやく日本で同居することに同意してくれました。

まあ、娘と息子は相変わらずフランス住まいですけどね」

後ろを歩いていたリディアが笑顔でセレンの腕に絡みつく。

「ねえ、セレン君、どこにお散歩に行くの？」

「西友で買い出しでもしようかと思ったんだけど、まだやってないから駅近くのアマゾンに行こうか」

「昔セレン君がチーマー時代にたむろしてたところ？」

「そうそう。てかテレビで言うなよ、それw で、リディア、朝ごはんは何がいい？」

「お寿司は食べられないよ、わたし」

「知ってる。鮭以外の生魚はダメなんだよな。パスタとかパンとかでいい？」

「うんっ」

リディアはやけに上機嫌だ。セレンと一緒にいるのが嬉しいらしい。

セレンが歩く。自衛隊はジリジリとたじろぐ。

ついには後方にいた警察官たちより後ろに下がってしまう。

セレンが歩いていくと、自衛隊も警察もマスコミもおののいて道を開けてしまった。

「わあ、なんか磁石のN極とN極を近づけたみたいに離れてくね」

リディアが楽しそうに言った。

「おい待て！」

沈黙を破って一人の警官が前に出る。どうやら素手で戦う気ようだ。

セレンは相手の構えを見ると、トレンチコートを脱ぎ、上着も脱いで上半身裸になった。

「逮捕術と柔道を経験しているようですね」

「……なぜ分かる」

男がすごむ。

「逮捕術は警官なら必修ですし、柔道を長くやっていたらごことは貴方の耳を見れば分かります。柔道を長くやっている人は耳が変形しますから」

「なるほどな」

男は身長が 180cm ほどで、体重は 100kg はありそうだ。

どう考えてもセレンに勝ち目はない。

「体格差があるので、身体能力を高める noa の力を使わせてもらいますね」

セレンはそう言うと、男に肩からタックルしていった。

その速さは人間離れしていた。男にドンとぶつかると、男は思わずうめき声を上げる。だがそこは柔道経験者。セレンの腕を取って固めようとする。

だが男がセレンの左腕を掴んだ瞬間、セレンは軽々と男を持ち上げ、空中に浮かせた。

「なっ！？」

男が仰天したのも束の間、セレンは勢い良く男をコンクリの地面に叩きつけた。次の瞬間、セレンは男の腕を取って後ろ手に捻り上げた。男は懸命に逃れようとするが、圧倒的な腕力差で動けない。

「あなたは 180cm で 100kg ほどの体格に見えますが、今ノアを使っている僕からすれば、貴方は小学校 3 年生の女の子くらいの腕力しか持っていないんです」

「なん……だと」

「僕は基本的に殴る蹴るが主体のストライカーです。合気道や柔道などの関節技や投げ技の人とやりあうのは苦手です。

だからそういうときはまず襟を取られないように上半身を脱ぎます。そして腕を取られないようにタックルから入ります。

こうなれば相手がどれだけ関節技に長けていようと負けません。

仮に腕を取られても、9 歳女兒程度の腕力しかない貴方では、どんなに技術を持っていたとしても、僕が腕力で抵抗すれば締め上げることはできません。

今みたいに貴方の体ごと片腕で持ち上げてしまえば、どれだけ技術があったとしても意味ないですからね。足場もない空中に釣り上げられたら人間何もできません」

「そんな、馬鹿な……話があるか……」

「ノアを使わなければ貴方が腕力でゴリ押しして勝てたと思いますよ。でもノアを使った僕からすれば、あなたは少女ほどの力しかありません。どんなに技術があっても圧倒的な腕力差は埋められないんですよ。

たとえ貴方が合気道の師範並みの技術を持っていたとしても、腕力差がありすぎる場合は相手の力をゼロ化することはできません。相手の力をゼロ化する方向に力を加えた瞬間、相手はゼロ化されない方向に力を加えるからです。まあ、型稽古しかない合気道には分からないかもしれませんが。

柔道のほうが実践的ですが、それでも圧倒的な腕力差の前には無力です」

セレンは男の腕を離して解放した。巨漢の男は諦めて地面にへたり込んだ。

リディアはそっとセレンに寄ると、「風邪引いちやうよ?」と言って上着とコートを渡した。

業を煮やした警官が無許可で発砲するが、あいかわらずセレンもリディアも光に守られて傷つけることができなかった。

セレンはリディアが撃たれたのを見ると不快感を顔に出し、近くの警官に歩み寄って銃を奪った。そして発砲した警官に向けて銃を撃った。

銃弾は警官の眉間を貫き、一発で絶命させた。

「……俺のリディアに危害を加えようとする奴は、誰であろうと許さん」

一瞬、セレンが素の口調に戻った。

素人が銃を撃っても2m先の物に当てることすら難しいとかつてセレンは言っていたが、セレンは銃の扱いもできると言っていた。

以前ネットで聞いたが、海外で銃の訓練をしたことがあるらしい。

なるほどこれがその腕前か。

「さて、それじゃあ買い物に行くので、僕の討伐は諦めてそろそろ解散してもらいましょうかね」

セレンが言うと、リディアはセレンの腕にしがみつき、てくてくと二人で歩きだした。

「あ、ちなみに僕は高校時代からその西友で食糧を買ってますが、毒殺しようとしても魔法で治療できるので無駄ですよ。

老婆心ながら、地下からの攻撃も無駄ですし、寝ている間も meitel という魔法のバリアが張ってあるので暗殺はできません。

ちなみにこのバリアですが、核爆弾でも無力化できるので諦めたほうがいいですよ」

そう言うとセレンはリディアの髪を撫で、首筋に唇を這わせ、耳たぶを甘噛みした。

リディアは小さな嬌声を上げ、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「もう、セレン君、わたしメディア露出 NG な人なんだから、止めてよね。全国区で映っちゃったじゃない」

セレンは楽しそうに笑うと、リディアの手を引いた。

「おい、お前俺のこと好きか」

「え……？」

「せっかくだからテレビで全国にお前の俺に対する気持ちを伝えたい」

「そんな……恥ずかしいよ」

「好きじゃないのか？」

「好きに決まってるでしょ。……セレン君、だいすき」

リディアは紅い顔で呟いた。

セレンは満足そうに微笑むと、わざとテレビに映るようにリディアにキスをした。

そして悪戯げにカメラを向く。どこまでも不遜なテロリストだ。

「あ、そうそう。ちなみにフランスに残った僕の子供にも魔法をかけてあります。

僕の仲間である旧アセットの面々とその家族も同様です。

よって、彼らを人質に取ることもできませんよ。

それにルシアやユルトのようなアルカ名だけでは絶対に彼らに辿りつけないように細工してありますし」

全てのカメラとマイクがセレンのほうを向いている。もはや警察も自衛隊もお飾りだ。

「あと、ネット上の古参のアルカユーザーに危害を加えれば罰します。

彼らは僕の大切な友人なので」

そう言い残すとセレンは去っていった。

流石のテレビ東京もこの中継を放送していた。

2021年6月27日（日）午後7時

世界は何をしてもセレンを暗殺することができなかった。

一度アメリカ政府がセレンに原爆を投下するという作戦を出したことがあった。

それを知ったセレンは上福岡を壊されては困るし、周りの住民にも迷惑ということで、長野の佐久広瀬にまで自ら足を運んだ。

そこで好きに原爆を投下するといいと述べた。佐久広瀬の住民は騒然となり、退避した。どうやらセレンはこの場所に嫌な思い出があるようで、破壊したがっていたようだ。

日本政府は原爆の投下を認め、アメリカ軍は核を投下した。

しかし吹き飛んだ長野の農村からは、傷ひとつないセレンが出てきた。むろん放射能による汚染もない。

セレンの宣言どおり、毒殺も一切有効でなかった。細菌兵器も一切無効。

何をしてもどうやってもセレンを殺すことはできなかったのだ。

そうしてセレンによる支配は8年間続いた。

何億人もの犠牲者が出ている横で、犯罪自体は激減どころか事実上ゼロになった。

みな、セレンを恐れて犯罪に手を染められないのだ。

女性の多くは退職し、結婚相手を探した。相手の年収だ見た目だにこだわらず、積極的に交際し、結婚し、子供を作った。

少なくない老人が安楽死施設を利用し、意外なことに一部の若者も利用した。医療費は減り、社会保障による財政の圧迫も減った。

出生率が増えたことで、若年者の人口の割合は増加の一途をたどった。少子高齢化社会はあつという間に崩壊し、日本経済も社会保障も財政破綻を迎えることなく、日本という国自体が回復していった。

ニートという存在も事実上なくなった。

雇用が増え、ワークシェアリングが一般化し、国民の余暇は増え、金を使う余裕も出て、経済活動が活発になった。

それでも働かない健康なニートには内職や工場での労働が課せられるか、あるいは処罰されたので、事実上ニートはいなくなった。

セレンは空き家をホームレスに与えるなどした上、彼らに職も斡旋した。
また、セレンは各地に孤児院を建て、リディアとともに孤児の面倒を見て回った。
国会は機能しなくなり、セレンがリディアやアシェットの面々を招いて政策会議をする場所となった。

首相官邸はセレンの公務室に姿を変えた。

セレンは公務を霞ヶ関で行ったが、首相官邸には住まなかった。
用があるたびわざわざ電車を使って一般人に紛れて首相官邸までやってくるのだ。
セレンの信奉者たちはベンツやロールスロイスで官邸に向かうよう進言したが、セレンは「そんな偉そうなことはしたくないです。僕は電車で十分です」と言った。

また、「電車内で急にトイレに行きたくなる人がいて苦しんでいるようなので、一車両に最低ひとつはトイレを付けてください。あと、駅のトイレは混まないよう数を増やしてください」と指示した。

清貧を尊ぶセレンは、この地位に昇りつめてもなお安物の食材や日用品を買い、贅沢をしなかった。

信者から供物が捧げられたが、丁重に包んで返送した。

口癖は「僕は学者ですから、最低限の暮らしができればそれでいいんです」だった。
また、「安い食材でもリディアの愛情がこもった料理なら、なんでもおいしいんです」と笑って答えていた。

セレンは一度、「スクウェアが作ってくれたFF4のリメイクをリディアと一緒にプレイしたのが幸せな日々でしたね。あれは満足のいく出来でした」と語っていた。

セレンは国定辞書となったディアクレールのアルカ版の執筆を独りで黙々と行っていた。勇太が知っていた最初の頃のセレンから少しもアルカに対する孤高な態度は変わっていない。

相変わらずリディアはアルカは自分とセレンの間で使われる恋人同士の秘密の言語というスタンスでいたため、リディアはアルカの作業の一切を手伝わなかった。

セレンはそれを知った上で独りで黙々と幻日辞典を編み、アルバザードやアルカを定義していった。どれだけ力を持っても彼は本質的に人工言語屋なのだ。生粋の学者肌なのだ。

どんなに権力を持っても、セレンはアルカを無理に広めようとはしなかった。やりたい人だけがやればよいというスタンスを崩さなかった。

当たり前のことだが、人工言語といえばアルカという公式が世界中の人に知れ渡っていた。エスペラントは見る陰もなかった。

セレンはアルカ版ディアクレールの執筆を主に上福岡の家で行なっていたが、たまに日本語版ディアクレールの執筆を手伝いに国会図書館にやってくるがあった。

彼はディアクレールの制作場所を国会図書館と定めたため、ここで国定辞書は編まれている。

世の中はセレンの定義した正義に沿う者しか生き残れなかったため、自動的に生き残った人はセレンの正義を受け入れた者になり、彼らにとっては今の世界は元の世界より遙かに理想郷となっていた。

かつてセレンがテロリストと揶揄された頃とは大違いだ。もはやセレンは新世界の神として多くの信者に崇められ、キリスト教やイスラム教や仏教はなりを潜め、ほとんどの人口がアルティス教徒に改宗していた。

もはやセレンを排除しようという考えのほうが悪で、そんなことをしたら犯罪や汚職まみれの腐った世の中に逆戻りしてしまうという考えのほうが主流になっていた。

ディストピアに思えたものが、いつの間にかユートピアになっていた。

この日、水月勇太は神奈川県にいた。実家のある相模大野ではない。

あれから8年。勇太は父の遺志を継ぐため、東大を経て公安に入った。現在は東京で一人暮らしをしている。

神奈川に戻ってきたのはある少年に会うためだった。

その少年は集合住宅に住んでいた。
今日は日曜なので外に遊びに出かけたようだ。
少年が自転車で戻ってきたのは午後7時のことだった。

勇太は少年が家のドアノブに手をかけたところで声をかけた。
「勇太君だね？」

名前を呼ばれた少年はハッとして振り返る。

「……」

しかし何も答えない。こちらを怪しんでいるようだ。

「失礼。僕は水月勇太。君と同じ名前を持った人間だ。

僕は公安の人間だ。君に用があって来た」

「公安……？」

不審そうな声。

「すまんがちょっと話に付き合ってくれないか。

確か君はおじいさんとおばあさんと3人暮らしだったね。

ちょっと彼らには内緒で話があるんだ」

少年は訝りながらも勇太についてきた。

近くの縁に腰掛けて話す。

「唐突だが、君のお母さんは2013年6月27日に亡くなっているね」

「……どうしてそれを」

「公安って分かる？ 警察の諜報機関みたいなものなんだけど」

「さあ……」

「まあいい。とにかく僕はそこの職員だ。

ときに、君は自分のお父さんについてどれくらい知ってる？」

「いえ……あまり。家族もあまり話したがらないし、僕も興味ないので」

「じゃあお母さんについては？」

「7歳まで一緒に住んでました。でも僕の目の前で男に刺されたんです」

「その男の顔は覚えてる？」

少年は首を振る。

「ただ、僕のことを勇太と呼び、僕を撫でて、抱き上げました。母さんを刺した後に」

「犯人に心当たりは？」

「いえ……。離婚していた父親が重要参考人に上がったそうですが、その日その人は仕事をしていた神奈川にいなかったそうです」

「なるほどね。ところで、アルカについては知ってる？」

少年は当たり前だという顔をした。

「じゃあセレンという人物については？」

「知らない人がいると思いますか」

「だよね」

「あの、話が見えないんですけど」

「悪い悪い。でも確認したいことがあるんだ。

君はセレンさんが作り上げたこの世界をどう思う？」

「どうって……いいんじゃないですか。犯罪も戦争も起きないし、暮らしも穏やかで貧しくもなく、みんなそれなりに過ごせてるし」

「まあそりゃそうだろうなあ。セレンさんはアフリカの民族紛争も『そんなくだらない争いしないで仲良く共存してください。できない人はこの世にいません』の一言で解決させてしまった。

北朝鮮も『国民が可哀想ですから』の一言で民主化させてしまった。バックにいたロシアや中国は何もできなかった。アメリカもその機に乗じて戦争するわけにはいかなかった。セレンさんが『戦争とか、止めましょうね？』と一言勧告したからだ。

確かに彼のおかげで戦争もなくなり、紛争も片付いた。世界は平和にはなった」

「はい。まあ学校で教えられてる通りの神様ですよ」

少年は素直に頷く。

「なるほどね。じゃあそろそろ単刀直入に言おうか」

勇太は一拍置いて喋った。

「君のお母さんを殺したのは、君のお父さんだ。

そして君のお父さんはセレン＝アルバザードだ」

少年は十分な沈黙を保った後、「はい？」と返した。

「セレンさんにはリディアさんとの間にルシアとユルトという子供がある。

そして蛍という謎の女性の間に息子が一人いるんだ。

蛍というのは仮名で、君のお母さんのことだ」

「え……」

「セレンさんはマスコミやネットを操作し、蛍さんの情報については制限したんだ。

過去ログなどから蛍さんに関する情報は全て消去した。

また、君のおじさんとおばあさんに連絡を取って、自分がセレンだということを息子や世間から隠すように依頼した」

「……母を殺した男の言うことをウチの家族が聞いたんですか？」

「もし君がセレンの息子と世間に知られたら、君は平穏無事な人生を送れたかな？」

「それは……」

「だから君の祖父母はセレンさんの要求を飲んだんだ。君の人並みの幸せのためにね」

少年は黙って下を向いた。が、ハッと顔を上げる。

「おかしい。セレンの戸籍名と僕の父親の氏名は異なってます。

僕の父は水月静という人です」

「戸籍を取って確認した？」

「はい。社会の授業で戸籍の取り方について習ったときに実習で取ってみました」

「その戸籍もセレンさんが偽造させたものだ。水月静というのは彼が書いた小説のキャラで、偽名だ」

「そんな……」

少年は頭を抱えた。

「僕の父親が母さんを殺したなんて……。ましてその男がああセレンだなんて……」

勇太は少年の肩を握った。

「僕の父親もセレンさんに殺されたんだ」

少年は勇太を見上げる。

「……じゃあ、水月さんはセレンに復讐をしたいんですか」

「そう。そして世界を元の形に戻したい。アルバザードの正義でなく、地球のあるべき姿に」

「でもなんで僕に。原爆を落としても倒せないようなのが相手ですよ。何もできないでしょう」

「違う、勇太君。君はこの世界の最後の希望なんだ」

「え……」

「君、今までの人生で大きな事故に遭ったことはないか？」

「いや、ありませんけど」

「じゃあ遭いそうになったことは？」

少年は少し考え、「小学校のとき、車にひかれそうになりました。でも不思議と無傷で助かったことがあるんです」と答えた。

「やはりな……」

勇太は顎に手を当てた。そして「すまん」と言うと、少年の頬を殴った。

「いたっ！」

突然殴られた少年は思わず立ち上がる。

「何するんですかっ！」

「すまん、ちょっとした実験だ。やはり軽い怪我の場合は発動しないようだな」

勇太は少年の袖を掴むと、「これならどうかな」と言い、少年の身体を引っ張った。そして右ポケットから取り出したナイフで少年の心臓を刺した。

その瞬間、青い光のバリアが発生し、ナイフは弾き飛ばされた。

驚いたのは勇太より少年のほうだった。

「な……な……」

「やはり、予想通りか」

「い、いま僕を刺しましたよね……！？」

逃げようとする少年。

「待ってくれ。落ち着いて。もう何もしない。約束する。実験は終わりだ」

「実験……！？」

「ああ。セレンさんは自分だけでなく、仲間や子供にも魔法のバリアをかけた。

双子の子供ルシアちゃんとユルト君にも魔法をかけた。

そして最初の息子である君にも魔法をかけておいたんだ」

「僕にも……？」

「ああ。だけどセレンさんは自分が君の父であることを隠している。

魔法のバリアがあっさり発動してしまったら、君はすぐに『これはセレンのバリアだ』と気付いてしまうだろう？ そうしたら君はセレンが父親だという事実に気付く可能性が出てくる。セレンさんはそれを恐れた」

「……」

「だから君の場合は命に支障があるレベルの怪我じゃないとバリアが発動しないよう、魔法を調整しておいたんだ」

少年は硬直した。何が何やら分からないといった感じだ。

「だがこれで確信が持てた。君はやはりセレンさんの子で、彼は君に魔法をかけておいた。

世界をセレンさんの支配から解放するには、君が必要だ」

「僕が……？」

「セレンさんには魔法のバリアがかかっている。そのせいで誰も彼を攻撃できない。

だがバリアがかかっている人間ならセレンさんのバリアをかき消すことができる。

例えばリディアさんやメルさんやルシアちゃんやユルト君ならセレンさんを刺すことができるというわけさ」

「でもそんなこと彼らがするわけがないでしょう。自分の大切な恋人や父親なんだから」

「そう。で、唯一バリアを持っていながら、セレンさんに対して殺意を抱くだけの理由を持った人間がいる」

少年は押し黙った。

「それが君だよ、勇太君」

「僕がセレンを……？」

「ああ。君はこの世界にさしたる不満もないようだ。

だが、君の目の前で惨殺されたお母さんの仇を取りたくはないか？」

「それは……」

少年は口ごもった。

「バリアの件で、君がセレンさんの息子だということは明らかになったろう。

何を迷うことがある」

「……本当に母さんを殺したのはその男なんですか？」

「ああ。これを見てくれ」

勇太はポケットから袋に入ったナイフを取り出した。

「セレンさんが蛍さんを刺したときのナイフだ。君、アルカの腕前は？」

「多少読み書き程度なら。この世界の常識ですから」

勇太はナイフの柄に書かれた文言を見せた。

少年は黙ってその呪文を訳し上げた。

「俺は絶対にお前を許さない、裏切り者……」

「そう……。それがセレンさんの言葉、第一のテロだ」

「第一の？ え、でも教科書では最初のテロは相模大野駅の車両事故だって……」

「それは表向きの情報だ。本当にセレンさんが最初のテロを起こしたのは、蛍さんに対する私怨を晴らしたときだったんだ」

「あの……」

少年は恐る恐る口を開いた。

「水月さんはセレンの知り合いなんですか。さっきからやけにそんな風に聞こえるんですけど」

「僕は2005年に彼が新生人工言語を立ち上げたすぐ後から彼をずっと見てきた。

彼のことは尊敬すらしている。偉人だと思っている」

「……」

「実際にオフ会で会ったこともある。気さくな人で、気前よくごちそうもしてくれた。

最初にセレンさんがミロク革命の犯人だと気付いたのもこの僕だ。

セレンさんを捕まえようとして挑戦し、格闘技で返り討ちにあったときも、彼は僕を見逃してくれた」

「……ならなぜセレンを殺そうなんて」

「だから、父親の仇さ。それに、この世界をあるべき姿に戻すのが使命だと思ってる。

たとえそれが理想郷を崩すことになろうとね」

勇太は少年の肩に手を置いた。

「頼む、勇太君。君が最後の希望なんだ」

母親が刺されたナイフを手にとると、少年は静かに頷いた。

その目からは涙が溢れていた。

2021年6月27日（日）午後11時

勇太は少年を車に乗せ、上福岡までやってきた。
セレンは在宅しているようで、灯りがついていて

インターホンを鳴らすと、リディアの声がした。インターホン越しに「水月勇太が会い
にきたとセレンさんに伝えてもらえませんか」と告げる。

リディアは少し沈黙した後、無言でインターホンを切った。

すると玄関が開き、リディアが出てきた。84年生まれだから今は36歳のはずだが、ど
う見ても中高生の少女に見える。どれだけ若作りなんだと薄ら寒く感じた。

「どうぞ。水月さんが来たら入れるようにとセレン君から言われてました」

リディアは儂げな顔をしていた。

「僕のほかに客人もいるのですが」

「分かっています。……勇太君でしょう？ あの女が産んだ、最初の子供」
寂しげな声で囁くリディア。

勇太と少年は中に入った。
居間にはセレンが立っていた。

「水月さん、お久しぶりです」

「お久しぶりです。お元気そうで。相変わらず中肉中背のわりにガタイがいいですね」

「どうもです。確か最後に会ったときは池袋でしたね。君はまだ開成の2年だった。

あれから人生はどうなりましたか」

「おかげさまで東大を経て公安に入り、父の遺志を継ぎました」

「そして僕に復讐しにきた、と」

セレンは両腕を広げた。

「じゃあ久々に組手でもしますか？ あの鬼子母神神社のときのように」

「いえ」苦笑して手を振る。「ケンカは相変わらずで。40になったセレンさん相手でも
とても勝てる気がしません」

「そうですか。たまには運動したかったのですが」

ふと少年に目を向けるセレン。

「……大きくなったな、勇太」

その声は穏やかなものだった。

少年の肩が小さく震える。

「最初にお前に会ったのは、2013年6月27日だった。7歳になったばかりだったな。

あれから8年。もう15歳か。中学校は楽しいか？」

「……じゃあやはり貴方があのとき母さんを殺したんですか」

少年は掠れる声で言った。

セレンは一拍置いて答えた。

「ああ、俺が殺した。俺を裏切って捨てたあの女がどうしても許せなかった。

きちんと和解して離婚すればあんな目には合わせなかった。

俺からお前を奪い、俺を訴え、俺の言葉を無視しつづけた。

すべて弁護士を通して要件だけ伝え、気持ちのひとつも明らかにしない。

女に都合の良い裁判制度のせいで、俺は地獄を見せられた。

かつてあの女は俺のことを何度も愛していると言った。

だがあっさりと裏切って出ていった。あの女の言葉は嘘だった。

出ていった後、俺は必死に何度もあいつの言葉を求めた。

だがあいつは答えたくないの一点張り。すべての処理は弁護士を通して。

ふざけるな。

ふざけるな。

何が答える必要はないだ、糞弁護士が。

俺があるって言ってるんだよ。ならあるんだよ、必要性が。

あの一件で俺にふざけたことしやがった連中は皆殺しにしてやった。

子供の保護者となる祖父母を除いてな」

セレンは頭を抱え、何かに取り憑かれたかのように呟いた。

「ふざけるな。

ふざけるな。

あの女、絶対殺してやる。

絶対殺してやる……」

リディアはセレンの背中をさすると、「彼女はもういないのよ」と囁いた。

するとセレンは急に落胆した様子になり、「そうか……」と寂しそうに答えた。

勇太は生唾を飲んだ。殺してもなおセレンは蛍のことを恨んでいる。

本当に彼が心の底から愛したことのある女は蛍だったのではないか。

愛と憎しみは表と裏。どちらも一枚のコイン。恨むほどに、愛している。

少年は無言でナイフを取り出し、セレンに向けた。

「僕から母さんを奪った奴を、許すことはできない」

セレンは勇太を見やる。

「水月さんの差金か」

「ええ、バリアを相殺できるのはバリアを持っている人間だけですから。

バリアを持つ者のうち、貴方に殺意を抱く動機があるのは勇太君しかいません」

「そうだね。だが上手くいくかな？ 僕が勇太の魔法を解除すれば、勇太は僕に指一本触れることができない」

「でしょうね。当然それは予想してました」

勇太は胸ポケットから銃を出す。

「銃で僕を殺せないことは重々承知のはずでは？」

勇太はセレンの言葉を受けると、口の端を上げて、銃口を少年に向けた。

「もしセレンさんが勇太君のバリアを解けば、僕は勇太君を射殺します。

セレンさんが勇太君のバリアを解かなければ、勇太君がセレンさんを刺します。

——かつて貴方が蛍さんを刺したナイフでね」

セレンはそれを聞くと、「合格」と言って微笑んだ。

「流石、東大生。良い頭です」

「恐れ入ります」

「6月27日の11時か。2003年に僕が蛍と付き合うことになった時間頃だね。

あれからもう18年か。あの日ほど、心が高揚した日はなかった……。

蛍はいまだに数日に一回は夢に出てくるよ。

常に夢の中では寄りかかっているんだ。

若いままの、あの頃の彼女の姿でね。

そして起きては絶望するんだ。ああ、また今回も夢だったんだって。

彼女の呪いは解けないんだ。どんなに時間が経っても、彼女がもうこの世にいないでも」

「……セレンさん」

勇太は目の前の狂人を哀れに思った。そして冷ややかに告げる。

「自分の命か、息子の命、どちらかを選んでください」

少年はナイフを持ったままセレンに近付いた。

セレンは優しい顔で勇太を見つめると、「本当に大きくなったなあ」と呟いた。

「よくも……よくも母さんを……。

返せ……。母さんを返せ！」

少年はセレンに身体を預けると、深々とその胸にナイフを刺した。

セレンの胸から鮮血が滲む。

少年はナイフを手放した。

「……僕がどんな思いであれから生きてきたか、あんたに分かるか……！」

セレンは愛する者を見る目で少年を見つめた。

「……分からなかったよ、ずっと、ずっと。

だから、お前のことを考えてきた。毎日、毎日。

勇太。お前にしてやれる最初で最後のことがこんなので、ごめんな。

俺、ダメな父さんだった」

「僕のことを考えてたって？

いい加減なことを言うな！」

泣き声混じりに叫ぶ少年。

「勇太君、それは違う」

勇太は少年に声をかけた。

「君のお父さんは君のことを愛して、気にかけていた。

だからバリアを張って君を陰から守ってきたんだ」

「けど、その息子に刺されたんですよ？

守ってきたはずの息子に刺された。

これは母さんを殺した報いですよ。

僕を生かしておいたばかりにね」

少年は声を荒げた。

「君は本当にお父さんに愛されてないと思う？」

「え……？」

「セレンさんは自分が刺されて、君を生かしておいたことを今後悔していると思う？」

「あ、当たり前じゃないですかっ！」

勇太は少年の肩に手を掛ける。

「じゃあ、なぜ君は今生きている？

君は人を刺した。その瞬間、アルバザードの法で裁かれるはずだ。

なぜ君の身には何も起きない？」

「そ、それは……」

少年は呆然と立ち尽くした。

「セレンさんは君にバリアをかけただけでなく、君を法の外側に置いておいたんだ。

たとえ君が革命に反しても、君だけは罰を受けないよう、彼は設定しておいたんだ」

「え……」

「勇太君。君はお父さんに愛されていたんだよ。

この世でたった一人、革命に抗う特赦を与えられていたんだ。

セレンさんも、我が子を愛する気持ちには勝てなかった。

たとえ君が法を犯しても、君だけは殺すことができなかったんだ。

彼は最初から自分の命より息子の命を選んでいただよ」

少年はハッとすると、思わずセレンを見つめる。

少年の口から思わず言葉が洩れる。

「——とうさ」

だが少年は喉まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

子供の頃から一度言ってみたかった言葉。

でも、言ったら自分の中で何かが崩れてしまう言葉。

……絶対に、呼んではいけない名前。

「勇太……ありがとうな。

父さん、お前に殺されるのを、ずっと待っていたんだ。

でも、ごめん。本当はこんなこと、お前にさせたくなかった。

本当はあいつと一緒に幸せな家庭を築きたかったんだ」

セレンはリディアを見た。

「ここまでだ、リディア。……ごめんな」

リディアは小さく頷いた。

「うん。ここまでだね、セレン君」

「愛してるよ、リディア」

「わたしも。愛してるよ、セレン君」

そう言い残すと、セレンは地面に倒れた。鮮血が床を伝う。

勇太は少年に向けた銃を下ろした。

少年は泣いていた。泣いて肩を揺らしていた。

勇太はぼんぼんと肩を撫でた。

「……君がきつと一番の被害者だ。

君のお母さんが正しかったわけじゃない。君のお母さんも間違っていた。

恐らく、セレンさんが間違っていたのと同じくらいにね。

君のお父さんとお母さんはどちらも過ちを犯した。

その被害を一番被ったのは君だ、勇太君。

セレンさんもそのことがよく分かっていたんだろう。

彼の革命では、君のような片親をなるべく出さないような措置が取られていた」

「……はい」

勇太は少年の肩を抱き寄せた。

「お疲れ様、勇太君。

君は世界を変えた。神を殺したのは君だ」

「僕は……。……本当に世界にとってこれで良かったんでしょうか。

世界にセレンは必要だったんじゃないでしょうか」

「少なくとも僕は地球には地球のあるべき姿があると思っている。

異世界の正義とは別にね。

これでようやく地球は元のカオスを取り戻す。

それを今の人々が望むのかは分からない。

だが、それがこの世界の本来のあり方なんだ。

この世界はちょっとの間だけ夢を見た。

それはうたかたの夢だったんだよ」

少年は黙って頷いた。

リディアは無言でセレンの元に近付くと、唇にお別れのキスをした。

ナイフをセレンの胸から抜くリディア。

勇太はリディアに向き直る。

「リディアさん、貴方は最初から僕の計画に気付いてましたね、
なぜ止めなかったんですか」

「だって……これがセレン君の書いたシナリオだったから」

勇太は口を開けた。

セレンは勇太が少年を盾に使うことも計算していたのだ。

セレンははじめから死ぬつもりでいた。

革命を終わらせようとしていたのだ。

リディアはナイフを自分の胸にあてがった。

「子供の頃からの約束。わたしはセレン君が死ぬときに死ぬ。

わたしとセレン君は死後、カルディアに転生する。

そして向こうで再び結ばれる」

リディアは自分の心臓を一突きすると、セレンの身体の上にふわっとしなだれかかった。

彼女は自分でナイフを抜くと、心臓に空いた穴をセレンの胸の穴に重ねた。

二人の血が交じり合って流れていく。

儂げな微笑を浮かべると、リディアはセレンの胸を撫で、髪を撫で、唇にキスをした。

セレンはまだ息があった。リディアの髪を撫で、優しくその身体を抱く。

リディアは囁いた。

「ね？ わたしはあの女とは違ったでしょう？

わたしは決して貴方を裏切らない。

愛してるよ、セレン君。

だからお願い。

わたしを、愛して」

「ああ……愛してる、リディア……」

それがセレンの最期の言葉だった。

リディアの瞳から涙が溢れる。

「——また会おうね。

わたしたちの世界で……。

non [cci ɽɸ, jɛɸen jɔɸ...]

——了